

社 会 正 義

紀 要

6

上智大学社会正義研究所



目 次

<論 文>

- 低所得者層の住宅と経済開発の関係について
……………エドワルド・ホルヘ・アンソレーナ………… 3
- 解放の神学の先進諸国への挑戦
—現代世界における福音宣教……………山田 経三…………19
- Principles of Science and Technology
Cooperation in Asia…………Hidetake Kakihana…………49
- Work in the Modern World
—Towards a Theology of Work…………Keizō Yamada…………67
-

<特別寄稿>

- フィリピン民衆の選択
—フィリピン二月革命とアキノ新政権
……………ホアキン・G・ベルナス…………81
- コミュニケーション, 文化, 宗教
—フィリピンの経験……………ハイメ・L・シン…………99
- 日本の解放の神学を求めて I
—解放の神学における「貧しさ」および「貧しい者」
の意味
……………ホアン・M・リベラ… 115
-

<活動報告>

- 上智大学社会正義研究所活動報告(1986年～1987年)………… 135
- Institute for the Study of Social Justice, Sophia University
…………… 153

低所得者層の住宅と経済開発の関係について*

エドワード・ホルヘ・アンソレーナ

はじめに

第三世界は現在、住宅に関して未曾有の難問を抱えている。1980年度における国連の統計によれば、1975年から2000年にかけて第三世界の都市人口は、およそ28～40%の増加をみるであろうと予測されている。

この爆発的に増え続ける都市人口の大部分は、まぎれもなく貧困者層である。彼らは農村での食うや食わずの困窮状態から逃れて、生きのびるための糧を求めて都会へ殺到する。しかしながらこれといった技術をもたない彼らが、一縷の望みを抱いてなだれのように都会へ押し寄せても、そこで待ち受けているのは、苛酷な現実である。

そのしのぎを削る厳しい都会生活の中で、彼らがいかなる方法で収入を得、より人間的な環境の中で生活することができるかということは、21世紀を目前にした人類にとって、最大かつ緊急の課題の1つであると言っても過言ではない。

筆者はこの10年間、アジアやラテンアメリカのさまざまな低価格住宅プロジェクトと関わり、幾多の対策や具体例を目撃した。それらの中に、最近注目に値する新しい動きがみられる。それは、国全体の経済状態を改善する種々の対策の中に、草の根ともいふべき民衆の力を、もっと生かそう

* 本稿は昭和61年度上智大学学内共同研究「カトリック社会教説と経済倫理」で1986年7月に報告したものである。

とする兆しが現われていることである。そこには、有史以来、無に等しい存在として軽視され続けてきた草の根の民衆も、ようやくこれからは、国家レベル政策の恩恵に浴せるのではないかということを予測させるヒントが、垣間みられるのである。

このようなヒントは、民衆の逞しいエネルギーや創造性と深く関わっている。いくつかの実例をみれば明かなように、草の根の民衆活動は環境改善をするばかりでなく、その同じエネルギーを使って、彼らの経済状態を向上させることも可能であるということを如実に示している。こうした草の根レベルで実際に行われていることの中から得られるヒントを通して、今後の第三世界全体の住宅経済を展望するにあたっての、意味深いメッセージをよみとることができよう。

本稿では、低価格住宅と民衆の経済的成長との関わりについて、最近の新しい研究や、筆者の体験の中から最も印象深い実例を示しながら、若干の考察と提言を試みたい。

第1章 住宅についての新しい概念

都市の貧困者層と彼らの住宅との関係について理解するために、ダグラス・マカルン (Douglas McCallum) とスタン・ベンジャミン (Stan Benjamin) の興味深い研究を紹介しよう¹⁾。

この二人の研究者は、消費と福祉としての住宅という従来の住宅の概念に、挑戦を試みている。そして、より広範な視野でながめた住宅の経済的見地からの展望についての研究をまとめた。その経済展望には、国家レベルの住宅問題の分析や対策に、示唆を与えるものがある。

1. 従来の住宅の概念

A. 消費と福祉としての住宅

住宅は、経済よりもむしろ政治との関連において、考慮すべき問題であ

る。国家の安定上や人権上の見地からも、住宅は人間の基本的ニーズとして、供与する必要がある²⁾。

B. 健康状態の改善と、精神的安定感を与える住宅

この考えは、19世紀並びに20世紀のイギリス、西ヨーロッパ、アメリカの都市計画に、少なからぬ影響を与えた。とりわけそれは、1950～60年にかけて社会の裾野にまで広く浸透した。その結果、住宅の役割がさまざまな社会的犯罪（若者の非行、アルコール中毒等）の減少に寄与していることへの認識が深まった。

確かに、住宅が人びとの健康に及ぼす影響は大きい。とりわけ居住状態が劣悪である場合、たとえば、路上や空き地、橋の下の居住者、雨期には雨もりで、夜もおちおち眠れぬような掘っ立て小屋に住む人びとなどの健康に大きな影響を与えている。

しかし、雨期でもどうにか乾いた空間が確保できる状態であれば、住宅問題よりも、飲料水の質や下水道設備の有無、予防医学の普及、栄養などの問題の方が、人びとの健康により深刻な影響を及ぼすものであることは、否定できない。

C. 国家レベルの経済政策としての住宅

第三世界のいかなる国でも、膨大な国家予算を、高速道路や上下水道設備、鉄道などのインフラ・ストラクチュア（基幹施設）に投入する。こうした国家による大掛かりな経済開発を行う場合、これを最も有利に進めるためには、開発事業の実績をもつ優秀な建設企業の協力を求める必要がある。コロンビアの経済開発として、1970年初期と中期に実施された CURRIE PLAN³⁾ は、その例である。だが、Strassmann, Burns, Grebler⁴⁾ などの住宅分析によれば、住宅に関しては、建設企業の先端技術をあますところなく駆使して建設した住宅よりも、民衆が日常的に使っている簡単な方法で、少しずつ建てられた住宅の方が、第三世界が現に抱えている住宅問題に、インパクトを与えていると報告している。

D. 収入と生産に間接的影響を与える住宅

この考えは、健康と関連性がある点、B. と共通するところもあるが、経済的側面とのつながりが、より強いと言える。これについて Burns と Grebler は、“International Housing Productivity Study” の7章で論じている。

その内容は、①仕事の可能性の増大、②健康状態の促進、③教育レベルの向上、④反社会的要素の減少である。この理論はしばしば引き合いに出されるが、この理論に基づいた実際の調査の結果については、確実な報告がない。

E. 貯蓄と投資への刺激となる住宅

近年、住宅取得のための資金を、貧困者層に対しても適用させようと試みた研究もある⁵⁾。その内容とするところは、貧困者層が住宅のためにどの位金を拠出できるか、たとえば頭金はどの位まで支払えるか、残金の支払いにはどれ程の期間が必要か、また限られた予算で、いかなる特長をもつ住宅の建設が可能であるか、などについてである。いわば、貧困者層にとっては、住宅についてどのような可能性があるのかということについての研究である。この画期的ともいえる研究は、世界銀行をはじめとする第三世界のいくつかの国際機関で、実際に適用されている。できる限り多くの貧困者に恩恵が行きわたるようにという理念に根差したこの研究が、第三世界へ投げかけた波紋と期待は、極めて大きかった。しかしながら結果としては、あまり多くの貧困者に恵みをもたらすことはできなかった。その大きな理由は、プロジェクト実施がなかなか捗らなかったことや、貧困世帯の選択基準が厳しすぎて、当然恩恵を享受してしかるべき多くの人が計画の枠外へはずされたからである。

むろん、大多数の貧困世帯は、住宅建設のための資金援助を切望しているが、貧困層へ融資を行っている銀行、その他の金融機関は皆無に等しい。そこで彼らは住宅を建てる場合、他のあらゆる手段を講じて、金の工

面をする。貯金クラブや協同組合、頼母子講、友人などからの借り入れである。

こうした、貧困世帯がどのような方法で資金を獲得しているかについての徹底的解明を行い、その拡充と支援のための多角的研究を推し進めることが、早急に望まれている⁶⁾。

これまで住宅に対する従来の考え方について述べたが、これに対して、もう少し広範な視野でとらえた住宅の経済展望について次に述べたい。

2. 広い視野でながめた住宅の経済展望

A. 店舗と生産拠点としての住宅

第三世界の都市で最も顕著にみられる現象が、住宅の中に、経済的活動の場としての店舗あるいは生産拠点があることである。ことに低価格住宅においては、家屋の道に面している部分を、小さな店舗に使っているケースが多い。そこでは、食料品をはじめ、衣料、石けん、タバコ、石油、週刊誌など、あらゆる種類の生活必需品を商い、いくばくかの収入を得る。インドネシアのカンボンでは、およそ56%の世帯が、この種のなりわいで生計をたてている。

また、それほど目立たないが、家の中に小規模な生産の場をもつ低所得者も多い。そこでは手軽な食べ物をつくったり、工場の下請作業や簡単服の仕立、竹細工加工など、いずれも単純な機械で、迅速かつ安価に物を製造する。

このような住宅の場を用いた生産方法は、世界的にみても、近年に至るまでの唯一の生産方法であった。19世紀に入り産業革命の嵐の中で、工業生産技術の大変革にともない、工場という画期的な生産の場が出現した。しかしながら家内工業は、今日に至るまでヨーロッパはもとより、日本、アメリカにも連綿として存続している。

こうした家内工業の活動に活力を与え支援している良い例として、フィ

リピンのカウラン多目的センター (Kaunlaran Multi Purpose Center : KMPC) を紹介したい。

KMPC は、Sta-Ana 地区（人口 5 万 7 千）が活動の場である。この地区内の 17 箇所にネットワークをもち、メンバーの数はおよそ 1,800 名である。

この機関は、次の 2 つのプロジェクトをもっている。

1. Social Credit Program

目的：貧困世帯がたてる実現可能な計画に対して融資を行い、各世帯の収入増加を計る。

問題点：貧困者は通常次の理由で、銀行その他の金融機関からの融資が受けられない。①貧困者は担保物件がない。②他の金融機関で融資を受けた記録がない。③金融機関で融資を受ける場合、小口融資だと手数料が割高につく。

融資のための条件：①融資希望者の誠実さや責任感を担保の代りとする。

そのため人びとはグループをつくり、互いに責任を分かち合う。グループの 1 人が貸付金返済を怠ると、他のメンバー全員の貸付が停止される。

②グループに入るには、正直であることが第一条件なので、地区委員会は加入希望者につき次の点をチェックする。その地区に 3 年以上居住していること、これまでに受けた融資は、全額返済済みのこと、犯罪歴のないこと、飲酒、賭博などの悪癖のないこと。

③融資希望者がたてた計画の経済的可能性につき、財団委員会は次の点を検討する。

計画中の事業が、市場で需要があると認められること、地区内に、その事業に関する専門家がいること、その地区で、原料の入手が可能なこと、他店と競合できる価格であること。しかも廉価なこと、貸付金を返済してもなおかつ採算のとれる見込みがあること。

以上の融資条件が満たされて初めて銀行 (Philippine Islands Bank)

から融資が受けられる。融資額は、100 ペソ（約 750 円）から 3,000 ペソ（約 22,500 円）までで利子は月 1.73%，年 20.75 % である。ちなみにフィリピンのインフレ率は年 20%（1981 年），プライベートな貸借の利子が月 20% だから、たとえば、500 ペソ借りたら 600 ペソにして返すので、これを 5/6 ローンともいう。銀行融資の利子は年 24% でこの場合、融資額の 3/4 に相当する額の担保が必要となる。

このプロジェクトは、1980 年に始まった。融資を受ける者は、受給と同時に口座を開き、返済金を逐次振り込む。貸付金を元手に始める商売は、通称サリサリストアと呼ばれる食料品をはじめあらゆる日用品を売る店の他、豚の売買、屋台、露店などがそのおもなものである。

2. Site-Contracting Program

このプロジェクトの目的は、零細企業に融資を行って、その安定と成長を助け、その企業の成長によって地区の住民に働く場を提供することであった。その結果、貧困世帯の収入が増加し、地域の人びとに仕事の機会を与え、地域の零細企業に、経営の技術を指導した。

B. 借家としての住宅

貧困者はおおむね、収入を得るため自分の住居を部屋貸しする。この現象は、第三世界のあらゆる都市でみられる。フィリピンでは、部屋貸しどころか、一室の中のベッド用の空間のみを貸すこともある。インドのボンベイでは、家のない人びとが寝るための貸ベッドがある。ベッドは 8 時間交替制なので、時間がくれば次の人に明け渡さなければならない。

政府の手で建てられた住宅の部屋貸しは、フィリピン、タイ、シンガポールなど、ほとんどの国で禁止されている。当局者である低価格住宅の管理者や設計者の中には、貧困者がなぜ少しでもゆとりある住空間づくりを志向しないのか、理解に苦しむと言う人びともいる。だが、貧困者が部屋の新貸しをする背景には、それなりの事情がある。貧困者はなかなか定職にありつけないので、生活が絶えず不安定である。そのためわずかであっ

ても、毎月確実な収入が欲しい。彼らは過密状態に慣れており忍耐力も強いので、定収入を得る確かな手だてとして、部屋貸しをするのである。

C. 資産と都市経済への入口としての住宅

家をもてば、それを担保にクレジットの利用が可能となる。自分の家があれば、老後の生活は安定する。場合によっては息子に家を渡し、その見返りとして、息子は親の面倒をみるというケースも多い。

一般的に、橋の下や路上、空き地での生活者は、都市の一員とは認められていない。だがひとたび家をもてば、一人前の人間として扱われる。さらに第三世界で活動している種々の低価格住宅プロジェクトとの接触を通じて、彼らが現金の扱い方や貯蓄の方法、クレジット契約の仕方などについて理解するようになれば、それは取りも直さず都市経済の枠組の中の多岐にわたる活動を可能にする。

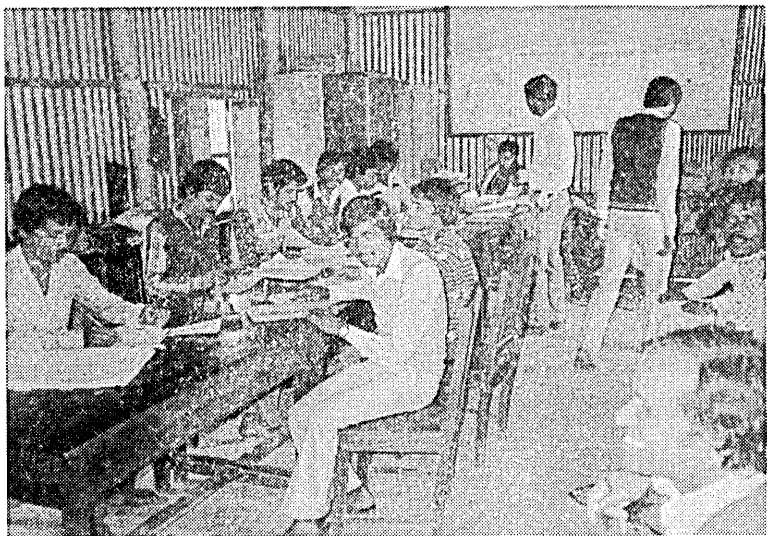
1982年、ブラジルの司教団は、司牧教書の中で都市問題に言及し、いみじくも、スラムにおける物心両面にわたる不安定な生活環境がいかに人間性を根底から破壊するかについて指摘している。

「人間であるということは、住むということである」と言った人もいるが、いかなる環境のもとに生まれようと人間であるならば、ささやかであっても、せめて風雪のしのげる、やすらぎの場としての自分の住まいをもちたいというのが、共通の願いではなかろうか。そしてその願いがかなうとき、それは自立のシンボルとなるのである。

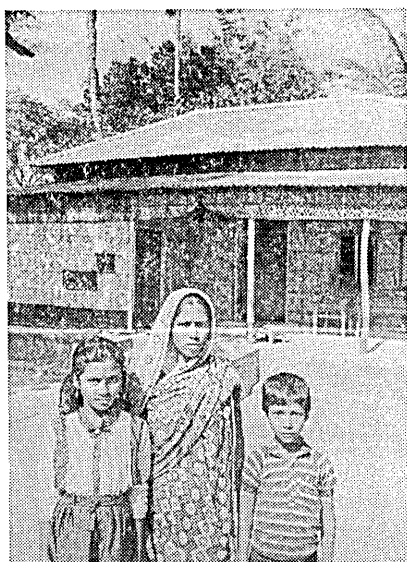
第2章 貧困者層の経済的發展と住宅取得

低価格住宅と経済との関係について説明するために、バングラデシュのグラミン銀行の例を紹介しよう。

このプロジェクトの活動は、第三世界の数あるプロジェクトの中でも、ひととき優れた特色を備えており、筆者自身その動向に特別の関心と期待を寄せている。



グラミン銀行



住宅融資によって建てられた家屋

プロジェクトは、1976年、チタゴン大学のモハメット・ユヌス（Muhammad Yunus）教授をリーダーとするパイロットプロジェクトとして発足した。目的は、貧困世帯の経済状態の改善を計ることにある。

その経緯は、ある日大学からの帰路、ユヌス教授が1人の貧しい女性が懸命に働いているのをみかけ、思わず声をかけたことに始まる。聞いてみると彼女の1日の収入は、わずか40円とのこと。なぜなら貧しく資本もない彼女は、働くための道具をすべて借りねばならず、その使用料を差し引くと、手元にはその金額しか残らなかったからである。そのことを知ったユヌス教授は、少なからぬ衝撃を受けた。

バングラデシュでは、大部分の人は農村に住んでいる。ユヌス教授が思っていたのは、そうした一般の貧しい農民はもとより、彼らの中でも極貧の人びとや、土地をもたず労働力として牛馬のごとく働かねばならない人びとのために、彼らの銀行をつくることであった。彼は、貧困者といえども彼らにとって無理のない条件の融資を受けることができれば、援助金なしでも自力で仕事と収入が得られ、自立への道がおのずと開かれるのではないかと思案した。そして、この構想のもとに、プロジェクトのすべての歯車は作動を始めた。

1983年、プロジェクトはグラミン銀行として再出発した。資本金 TK 100M（\$ 3,000,000）（内訳：政府の援助が40%，銀行の融資メンバーから40%，他銀行から20%）。

この銀行は既述のように、貧困世帯の経済状態の改善を目的に設立された。従って、当初、メンバーのほとんどは、貯蓄高の増加に努めた。蓄えが徐々に増え、ゆとりが出てくると、次は家屋の改善すなわち、かやぶき屋根を半永久的なトタン屋根につくり替えたいという要望が起り、そのための融資を希望する声が聞かれ始めた。従来のかやぶき屋根は、2年毎にかなりの費用と手間をかけて、ふき替えしなければならなかったからである。

住宅融資

トタン屋根作りに端を発した融資は、1984年には、収入を得る活動の場（店舗・生産拠点）となる住宅に対しての融資に発展した。融資額の最高は、TK 18,000 (\$ 540) である。融資額とその返済期間は、TK 1,000 の返済期間を1年とし、これを1単位として決める。融資額がTK10,000 なら、返済期間は20年となる。返済期間には5～15年の幅をもたせている。

この住宅融資の利用で、1985年までに1,800戸の家屋が建てられた。各グループ（後述）は、グループ資金の活用で、1986年1月までに1,881戸の家屋を建てた。また、833戸が改築されている。

第三世界においてこのような銀行は極めてユニークで、その特筆すべき点は次の通りである。

1. グラミン銀行は、スタッフが人びとのところへ出向いて行く。
2. 担保のない貧困者に対して銀行は、担保にかわるものとして、人の組織を利用する。組織とそのメンバーの連帯責任が、担保にかわる役割を果たす。貧困者は融資を受けたくても担保がなく、一方銀行は、貸付金返済のめどがつけば、担保がなくても融資を行いたい。しかし、このような銀行でも福祉事業ではないので、ある程度は商売としての採算性も考慮しなければならないからである。
3. まず、銀行のスタッフはトレーニングを受ける。訓練の終わったスタッフは、毎週1回村へ行き、住民との接触を深めながら、彼らを指導する。
4. 住民は5人で一つのグループをつくる。グループは毎週1回集会をもち、出向いて来たスタッフに、一人TK 1 (\$ 0.03) ずつ預金する。
5. 集会では、自己開発とグループとしての成長の可能性などについて話し合う。たとえば、バングラデシュでは結婚式に巨額の費用がかかるのが悩みの種だが、それにかからむ問題や、わずかばかりの収入をいかに効

率よく増やすか、生活の質的向上を計るにはどうすればよいかなどが集会での話題である。それは貯蓄の場というよりも、むしろ教育の場といったほうがふさわしいであろう。

6. 毎週1回の集会が、滞りなく2ヶ月間継続し、そのグループの真面目さ、熱心さ、真剣さが認められた段階で初めてグループ内の一番貧しい人が選ばれて融資が受けられる。融資された資金は、家畜の購入や、小さな店づくりの資金となる。
7. 融資額の5%は、グループの共同資金へ繰入れる。グループは、個人が借りた融資金の連帯責任を負う。
8. 融資を受けた資金の返済方法は、毎週2%ずつ払い、1年間で支払いを終える。
9. 八つのグループは一つのセンターをつくる。メンバーはセンター名義で融資が受けられる。
10. 8~10のセンターが集り、一つの支店を形成する。

1986年初めで、226支店に172,000人のメンバーが加入し、そのうち113,000人が女性である。女性の比率が高いのは、この銀行の対象が、女性や貧困者であるということからもうなずける。イスラム教の国では、女性は社会的に無視された存在であり、ことに未亡人は、経済的苦境に陥る場合が多い。この銀行が、最も貧しい人びとに関心を向けていることは確かである。その証拠は、メンバーの62%に相当する人びとの全財産が、TK1,000(\$30)以下であり、TK5,000(\$150)以上の人には、わずか6%にすぎないという調査報告からも明らかであろう。それにもかかわらず、この2年間で貸付金返済の遅滞者は、2%にすぎない。

人びとが貧しさから抜け出すためには、貧しい者同士が一緒になり、持てる力を結集しなければならない。グラミン銀行は、一人よりは二人、二人よりはグループでの活動を奨励している。従って、一人よりも数人なら

融資額が増えるし、グループなら、融資金の限度枠がなくなるのである。

貧困者のためのこのような銀行は、第三世界でも稀にみるケースで、筆者の知る限り他に類例をみない。

ま と め

以上述べたように、貧困者に住宅を与えることは、経済開発にあたって重要な役割を果たすことになるのである。貧困世帯の収入と住宅との関わりについては、さらに広範で綿密な調査が必要とされるが、第三世界諸国に総じていえることは、多くの貧困世帯にとって住宅は、単に雨露をしのぐだけでなく、いわば収入を得るためのベースともなり、また彼らの生活を多様性に富んだものとするのである。このことを、第三世界の各国政府が理解するならば、次の諸点を自国の住宅対策に取り入れることを、考慮しなければならないであろう。

1. これまで述べた展望に基づいて、草の根共同体の経済活動を理解すること。
2. 低価格住宅建設のための国家予算を増額する。
3. 各国の住宅管理当局は、従来の部屋の又貸し禁止制度を見直し、貧困者の経済状態を考慮した、もっと血の通った柔軟性のある対応策を講じなければならない。
4. 高層住宅は階が上になればなるほど、店舗や生産所などの経済活動が行いにくくなるので、貧困者には必ずしも適当ではないと思われる。少なくともこの点を、検討する必要があることは確かである。

(筆者は上智大学社会正義研究所客員研究員)

注

- 1) Douglas McCallum and Stan Benjamin, "Low-Income Urban Housing in the Third World: Broadening the Economic Perspective" (The Fifth National Conference of the Asian Studies Association of Australia, University of Adelaide, May 1984)

- 2) Orrille F. Grimes, *Housing for Low-Income Urban Families: Economics and Policy in the Developing World* (Washington: The World Bank, 1976)
- 3) Harold Lubell and Douglas McCallum, *Bogota: Urban Development and Employment* (Geneva: International Labour Office, 1978) Chap. 5.
- 4) W. Paul Strassmann, *The Transformation of Urban Housing* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1982); idem, "Employment in Construction: Multi-Country Estimates of Costs and Substitution Elasticities for Small Dwellings," Working Paper Number 3, *MSU International Development Papers*, Department of Agricultural Economics, Michigan State University.
- Leland S. Burns and Leo Grebler, *The Housing of Nations: Analysis and Policy in a Comparative Framework* (London: The Macmillan Press, 1977) Chap. 8.
- 5) PADCO, Inc. *The Bertaud Model: A Model for the Analysis of Alternatives for Low-Incomes Shelter in the Developing World*. Urban Development Department Technical Paper Number 2 (Washington: The World Bank, 1981).
- 6) これに関して、アジアですで行われている研究については、拙稿「貧しい人びとの住宅に関する財政問題について」『社会正義』紀要3, 1984, 参照。

Housing and the Economic Development of the Urban Poor

Eduardo Jorge Anzorena

SUMMARY

This article deals with housing as one of the key factors influencing the ability of the poor to succeed in the urban economy.

First are given examples of the traditional economics perspectives on housing: housing as social consumption, as a factor for the health and well being of the people and as influencing the

macro economic sector, and as stimulus to saving and investment.

Second shows how the low income people's housing serves often as a shop, as a factory as a rental income and is an entry point into the urban economy and third gives the example of the Grameen Bank.

解放の神学の先進諸国への挑戦

——現代世界における福音宣教——

山 田 経 三

目 次

はじめに

1. アメリカ合衆国における解放の神学の意義
2. 信仰，正義，解放
3. 貧しい人びとを優先し，連帯する神学
4. ヨーロッパの神学との相違
5. 現代においてキリスト者とは？
6. 現代において教会とは？
7. 先進諸国における解放の実践
8. 解放の神学への取り組み
9. キリスト教とイデオロギーの問題
10. マルクス主義の挑戦

は じ め に

1984年9月，バチカン教理省から「自由の使信——解放の神学の一局面に関する指針」が出され，1986年3月にはその第二弾「自由の自覚——キリスト者の自由と解放」が出された。この間，日本においても解放の神学が積極的に紹介され，各界から注目を浴びている。とくに最近では，第三世界の民衆の直面している問題や，それに取り組む民衆の精神的基盤になっている解放の神学そのものを積極的に理解しようとする人びとが増えている。たとえば，マスコミ関係者だけでなく全国から900名以上の参加のあった「社会主義フォーラム——人間解放の思想と実践のために——」や，

日本平和学会、経済史学会、経済同友会、仏教界（「解放の神学と真宗」セミナー）でも、解放の神学がひとつの主題になるほどで、その積極的反応はいっそう高まりと広がりを見せている。

ところで、第三世界とは社会的・政治的実践のあり方の異なる日本において、人間の解放をどういう思想と実践で実現していくか、日本社会に必要な解放の神学をどのようにつくっていかなければならないか、という問いかけが出てきている¹⁾。

それにこたえる意味で、日本と類似した状況にあるアメリカ合衆国で、解放の神学がどのように取りあげられ、生かされ、つくりあげられているか、その一端を紹介してみたい²⁾。

1. アメリカ合衆国における解放の神学の意義

「……わたしはボンヘッファー、ティヤール・ド・シャルダン、メツ、モルトマンや、アメリカのマーチン・ルーサー・キングといった神学者たちの業績を統合する仕事に、価値を見出した。それにもかかわらず、わたしはラテンアメリカの神学者たちの著作から、かれらがよりいっそうの深さ、幅広さ、切実さをもって、挑戦の重大さにこたえうる神学を表していたことを学んだ。かれらは、現代教会全体にとって、キリスト教の信仰と正義のための闘いと総合を探る上で多大な価値のある貢献を行った者と、わたしには再び思われるようになってきたのだ³⁾」。

確かに、ラテンアメリカの神学者たちの著作の大部分は、多様な神学の分野を統合する、学際的なアプローチに落ちつくように思える。さらに、これらの著者のほとんどは、主として大学で教えている者でもなく、その考察も学究的な討論から生み出された事柄に基づいているのでもない。かれらの神学は、むしろかれらの国に深く関わっている問題と現実と接して生まれ、それに対して、未来に向けて案出する指針ともいえるべき解釈をなそうと試みるのである。このことは、かれらの仕事のほとんどが学究的で

ないことを示すのではなく、むしろ、学問がより全体的な形で統合され、つねに実践の光の下で試されることを意味するのである。

2. 信仰、正義、解放

解放の神学は、非常に根源的な挑戦を映した写真が現像されて、教会につきつけられているということが出来る。人類のほとんど大部分の人が、現実「悪い知らせ」を雄弁に明快に語る構造にからめとられている時に、どのようにしてイエズス・キリストの福音、「良い知らせ」を宣べ伝え、実践すればよいのか、という挑戦である。「悪い知らせ」の構造にからめとられている人びとにとって、かれら抑圧されている貧しい人びとの苦しみの原因である現体制を維持するためには、いかなる犠牲でも払うつもり先進諸国のキリスト者から、愛の福音、「良い知らせ」を受けるなどということは、いかにも困難なことで、ほとんど不可能なことであろう。「われわれは、周辺に追いやられ抑圧されている人びとの運命に、これ以上無関心ではいられない。人類愛が偉大な主の教えであれば、利己主義と不正義は世界の大いなる罪であり、まさにキリストの否定である⁴⁾」。

ところで、「社会政治学」(Socio-politics)という言葉は、あらゆる社会制度、政策、構造を含んだ政治的秩序の広い理解を指して使われている。これを通して、所与の共同体は、その共存の形態を表現する。1960年代に入って以来、種々の跋しい政治的過程に直面して、キリスト教の役割を把握する試みに努める動きが数多くあった。たとえば、短期間のうちに革命の神学(Theology of Revolution)に関する激しい討論が燃え上がり、ホセ・コンブリン(José Comblin)の著書『革命の神学』(*Théologie de la révolution*)の内に、その優秀な分析がみられた。ところが、それが多分行きつく不穏な結果が明らかになるにつれ、この動きは影響力を失った。

他方では、開発の神学(Theology of Development)もまた、多くの

第三世界諸国から、結局は支配と従属を続けるだけの先進諸国の観点を隠すものであるとみなされ、失墜した。また、第三世界諸国の歴史的・経済的環境は多岐に分かれ、先進諸国のモデルによる「開発」は、途上諸国には不可能で、望みのあることでさえなかった。

3. 貧しい人びとを優先し、連帯する神学

ラテンアメリカをはじめ第三世界から生み出される解放の神学だけでなく、ヨーロッパの神学の中にも、たとえばマシュー・ラム (Mathew Lam) 著の『社会変革をめざす解放の神学——被抑圧者との連帯——』(*Solidarity with Victims—Theology towards Social Transformation*, 拙訳, 明石書店, 1987年) のように、抑圧されている貧しい人びとを最優先し、かれらとの連帯をテーマとする書物が増えている。次の諸点がこれらの著書に共通する内容である。

第一に、神への回心とキリストとの交わりは、隣人への回心と抑圧に苦しむ人との交わりを通してのみなされる。第二の洞察は、「救いの歴史」とラテンアメリカの貧しい人びとの真の解放との間の深いつながりを強調する。つまり、貧しい人びとと関わるということは、贖い主キリストと共に、救いのみ業につとめることである。第三に、解放の実践は神の国の予見とそれへの前進として見られなければならない。神の国は、正義と、平等と、兄弟愛と、連帯で特徴づけられる。第四の基本的洞察は、解放の実践を描いている。すなわち、それはキリスト教の愛の最も重要な実践の一つとして、抑圧される人びとの代りに、かれらの立場から社会を変革してゆく活動である。キリスト教の愛は肉の形をとり、現実にも効果のあるものとならなければならないからである。最後に、貧困の価値を強調する。それは、単に貧しい人びとと窮状を共にするだけではなく、かれらの正義のための闘いに共に参加することである。それは、貧困という形で、またキリストと共にいて真の自己確認という形で、迫害、弾圧を受け入れること

である。

レオナルド・ボフ (Leonardo Boff) は、この5点を次のように説明する。第一に、教会論的分野におよぼす人類学的要素の優位性を指摘する。換言すれば、ラテン民族の関心は、教会そのものよりも、むしろ教会が目標とし、創造し、人間化しなければならない人びとに、向けられるのである。第二に、そのアプローチは、現実主義者よりもユートピア主義者の視点に優先権を与える。つまり、決定的な要素は、単にヨーロッパのもので、一種の植民地主義にしかすぎない過去ではなく、未来なのである。未来という観点からみれば、ユートピア主義者の考えは、幻想でも現実からの逃避でもない。むしろ、それ自体が「希望の原理」に基づいている。それは、社会のプロセスを変革に向かってつねに開かれたものとする貢献を行ない、そうしてイエズス・キリストによってその実現が表され、約束された究極の世界を建設し、ゆっくりと見出してゆくものである。

第三の特徴は、教条主義に対する批判的な要素の強調である。批判的な姿勢というのは未来に向かってつねに開かれているためには、絶対に必要な条件である。というのも、教会の制度や伝統は、しばしば古くさく、時代錯誤で、保守的で、信仰と世界、教会と社会の対話を妨げるからである。

第四は、社会的要素の個人的要素への優位である。それは、ラテンアメリカ全体でばく大な数の民衆が周辺に追いやられていることから、必然的に生じてくる。そうして、教会はイエズス・キリストの模範にならって、特別な仕方でも無名の、無告の民に注意を払うべきであり、そのようにしてはじめて、来るべき神の国が少数の特権階級だけではなく、すべての人びとのものとなる。

第五の、そして最後の強調点として「正統な行い」(orthopraxis)の「正統な教え」(orthodoxy)への優越を挙げる。ボフは、共観福音書の基本的テーマを「イエズスにならう」ことだとみてとる。キリストと、初

期の教会にとって「本質的なことは、キリストのメッセージを体系的な範疇に引きおろして知的に理解するのではなく、この世で行動し、生きてゆく新しい道を創り出すことであった⁵⁾」。

4. ヨーロッパの神学との相違

ヨーロッパの神学者の動機である「合理性」と、解放の神学者の動機である「変革」という、動機の違いについて、ソブリノ（Jon Sobrino）は、次のように指摘する。

ヨーロッパの神学者にとって、神学は現実の苦難を一般的な苦難へと昇華させるためのもの、とみる傾向がある。それは、理性的必要から「苦難の世で神を信じることが、どれほど意義深いか」などと説き明かす、といった具合である。しかし、このアプローチは、しばしば現実には触れずにおいて、それを正当化する、あるいは正当化しうるものとみるという、一種の疎外的働きをする。

他方、ラテンアメリカの神学者は、罪に満ちた世界の変革の必要性に、むしろ焦点を合わせ、できうる限りあるがままに、イデオロギーから自由に、解放されて「現実に対する」のである。

上述の違いを、若干違った方法でみると、次のようにいうこともできる。ヨーロッパ的観点では、この苦難の無意味さを中和する道を、ただ自分自身の内にのみ見出そうとする。それに対して、ラテンアメリカの観点では、現実との和解とは、現実の危機それ自体の解決——あるいは、少なくとも解決への企て——の内にしか見出せないのである。

このような観点の差異は同時に、ラテンアメリカの神学者たちが、この問題の解決のための手がかりを、真っ先に哲学ではなく社会科学に求めた理由も説明する。それは、かれらが具体的な苦難の現実、その苦難の構造、その苦難からの解放の具体的に可能なモデルを分析するからなのである。

ソブリノは、その論文の後半を、実践と理論の間のあやふやな関係の指

摘にあってている。ヨーロッパの神学は、一義的に真理や意味の形状を伝達することに関心を抱いているように思える。いわば、基本的にヨーロッパの神学は「理論、ないし理論の歴史」である。それは、理論と実践との関係を考察するという営みにおいてさえ、である。しかし、ラテンアメリカの神学者たちは、ある現実において、神学が示す意味を考察する前に、その現実に接する必要を指摘する。さらに、かれらにとって体験からはじめて考えるという問題ではなく、体験する決意からはじめて考えるということであり、苦難の世に影響される一方で、その苦難を変えてゆくところからはじまる実践を、まずは始めることなのである。

したがって、ラテンアメリカ的な観点から神学の方法をみれば、それは基本的に「道」(camino)である。そこで、イエズスの「後に従う」ことが、認識論的にいえば、真にかれを「知る」こととなるのである。キリストは、別の言葉でいえば、「道」である限りにおいて「真理」なのである。そこで、かれらにとって神学の方法は、イエズスの歩まれた跡をたどることであり、その道を完全に知り尽くすことではない。

結論として、ソプリノは、ヨーロッパの神学の成果を認めてはいるが、つまりそれは、第二バチカン公会議に導くようなものであるが、その歴史的・地理的な自己批判性の欠如をとがめる。地理的な欠如とは、神学を世界の周辺からではなく、中心から行っていこうと考えた誤りから生じた。それは、世界には、はっきりと中心というものはなく、緊張関係の内に中心と周辺の全体性があること、キリスト教的な観点からは、周辺こそ神学的理解のための特等席であることを知らないのではないかと思わせるものである。

「真理を知ることは、それを実行することである。イエズスを知るとは、かれに従うことである。罪を知るとは、その重荷をになうことである。苦難を知るとは、世界を苦難から救うことである。神を知るとは、正義の内なる神に至ることである⁶⁾」。

ロバート・M・ブラウン (Robert McAfee Brown) もまた、1970年代の著作の中で解放の神学に関心を示している。しかし、バウム (Gregory Baum) の、より分析的なアプローチとは異なり、かれはラテンアメリカの動きがアメリカ合衆国、カナダのライフスタイルに要求した変化を強調する。それは、「もし、われわれが解放の神学を真剣に受けとめるなら、もう一度、われわれの仕事を点検しなければならない。……われわれの豊かな生活の水準を、あたりまえに思わないようにしよう。……われわれの文化の構造全体を問い直してみよう⁷⁾」。

ここで、アジア・アフリカに目を向けるならば、そこで出会う宗教的・文化的状況がラテンアメリカのそれとくらべて、大いに違っていることは容易に認められるであろう。しかし、この二大陸は、政治・経済の中心から外れたところに位置して、基本的に第三世界の外観を分け合っている。このようにして、ラテンアメリカから発せられる力強い声は、注意深く聴かれ、アジア・アフリカの進路を将来ははっきり表し、指し示す助けに、この声になるという可能性が、すでに開花している。

このような大陸間の対話の実現の見通しが大きいことは、すでに第三世界の神学国際会議の成果として出版されている⁸⁾。ともかくモルトマン (Jürgen Moltmann) が提唱した世界神学 (World Theology) はすでに、世界村 (Global Village) のあらゆる方面で生成の段階に入っている。ブラウンの予言が果して成就するであろうか。「神学であれ何であれ、未来のリーダーシップは、ヨーロッパ・北米ではなく、アジア・アフリカ・ラテンアメリカから来る⁹⁾」というかれの言葉は、今しばらく歴史の審判に委ねられねばならないであろう。

5. 現代においてキリスト者とは？

セグンド (Juan Luis Segundo) はぼう大な量の文献をふまえて、次のように述べている。それは、ユダヤの虜囚時代と復興の時代にまつわる

ものであり、預言者の第三世代や知恵の書を含むものである。この時期の神の理解における大きな前進は、神を、天と地の造り主たる唯一の神と理解するところに集約される。「生きとし生けるもの」(all flesh)という言葉葉がひんぱんに用いられるのは、人間とその他すべてが被造物と理解されていることを如実に示している。さらに、神の至聖と被造物の絶対的な欠乏が指摘され、そこから神への崇敬と、一方で神の現存への畏怖とが導かれた。

しかし、知恵の書においては、神の正義に関して批判的問題が提起されている。もし、神がまことに正しい方であれば、正しい者が苦しみ、よこしまな者が栄える、この眼前の現実をどのように説明できるだろうか。この疑問は、ヨブ記における至高なる方の顕現を受けており、セグンドは、その答えを次のように要約する。「それでは、いかに神の摂理と正義を説明しようか。説明などできまい。それはまさに、神の超越性である。それによって、摂理と正義とは神秘となる¹⁰⁾」。

ここで、神の超越性に関する明瞭な認識という、一種の後戻りをしなければならない。その認識の結果、全面的な神への従順を呼び起こす、いわば尋常以上の「純粋な」宗教が出てくる。というのも、人間ひとりひとりは、自分が、全面的に神を必要としており、至高の道を知ることはできないことを悟るからである。そして、ついには、崇敬と宗教的畏怖、つまり被造物であることを受け入れることが、宗教的知恵の特徴となる。

真のキリスト教が、狂信や迷信という、全く反対の方向に向かってしまうことの根拠は、世界を真二つに分けてしまうことにある。第一の次元は、水平面で、歴史的または世俗的なものである。つまり人間の活動の場である。今一つ、これと平行して、垂直面、聖なる次元がある。そこでは、神が、神ご自身の神秘的な仕方で行われる。このようにして、人間の人生は、その人間的な部分は予見できるものとして、またその神の治められる部分は予見できないものとして現れるのである。

この観点からいえば、豊かな者と貧しい者との間の不公平は、神の神秘的な摂理の結果として、あたかも健康と病気でともいうように生ずると考えられる。カトリックにおいては、上のような考えから、キリスト者は、宗教的なもの、上から来るものを、水平的に、歴史的に達成されるもの——つまり、世俗的なもの——と区別する。そして、キリスト者は、その前者の事柄に、少なくとも理論の上では非常に重きをおく。生活の道德と秘跡において神に従うかぎり、その人がどう生きようとかまわない。

このようにして、真に宗教的な活動とは、司牧者のそれに関してであり、その第一の重点は聖なる次元におかれることとなる。一方、この世界における唯一の悪は、罪それ自体である。人類を苦しめる歴史的な悪は、それが表面的なものである以上、宗教的忍耐をもって耐え忍ばなければならない。

ここから出てくる霊性とは、個人主義的性格をもつ。一般信徒は、聖なる力をもち合わせていないから、祈りと個人的霊的生活と礼拝の他、宗教的行ないに何の参加の可能性ももたない。

残りの宗教的要素は、神の意志の受容として表される。すなわち、天からふってきたばらばらの出来事は、霊的指針、啓示、あるいは神の意志のさまざまな「しるし」と理解される。要するに、このような宗教の認識の基本的性格は、「受容性」と特徴づけられる。

セグンドは、そこで、個人主義の強調を実存主義の基本的欠点であると指摘して、キリスト教の原点において、この弱さを超越しなければならないと強調する。「キリスト教の自由とは、根本的に社会的である。人間性は、それが自発的に、愛の内に他者に認められる時に、自由である¹¹⁾」。

マルクス主義もまた実存主義を拒否しているが、それは実存主義を結局、ブルジョア主義の概念にとらえているからである。つまり土地をほんの少しでももっているなら、革命は達成できないとマルクス主義者は考えるからである。このように、人間性の社会的性格を強調する点で、明らかにキ

リスト教に近い。しかし、それについてセグンドは、個人の自由の概念に立ち戻って、マルクス主義者に鋭い質問を投げかける。「こんな全く等質な社会構造の中では、人間の創造的力が失なわれる。こんな最も大きな疎外をあらかじめ考慮に入れずに、革命が成就されえようか¹²⁾」。このような質問が、問題をわざわざこしらえるために出されたのではなく、議論をより深めて、より豊かで複雑な次元に導くためであるということは、指摘しておく必要がある。

宗教も含めたすべての隷属からの自由、愛の奉仕と兄弟姉妹との和解への自由、これらの仕事を全うするために、まず人間は自由でなければならない。それはまさしく、「キリストはわれわれを、自由な者とされた」（ガラテヤ書、5の1）という時の自由であり、「真理があなたを自由にする」（ヨハネ、8の32）という時の自由である。セグンドの定義を借りれば、「人間の自由は、創造的である。ただし、その自由な共同体に自己の捧げ物として与えられ、愛の内に実現される時にのみ、真に意味をもつ」。また同時に「人間は、基本的に社会的存在であるが、そのような仕方ではじめて、社会の分野で自由で、そして創造的になれる¹³⁾」。

このような自由の理解は、教会の実践において明白ではないと、セグンドは考えている。その理由を、コンスタンチヌス帝以来ヨーロッパの教会が、われわれがキリスト教王国と呼ぶ、巨大な「信者製造マシン」に変貌してきたことにみている。その過程で、社会的な圧力と、個人がそのよりのたむ深いものをもたないことが、人がキリスト者になること、キリスト者でいつづけることの一般的な理由となってしまった。

セグンドの北アメリカの状況に関する考察のうち、最大の貢献は、「キリスト者であること」の本質についての断固たる主張にあるといえよう。かれによれば、イエズス・キリストの内に現れた神は、ギリシャ哲学の「不動の動者」ではなく、その本質は愛にあるのである。さらに、ただ他者への自己を超越した愛によってこそ人間は、キリスト教の神の真の生に

あずかり、身をもって表すことができる。キリストの福音は、このようにして、キリストの生と死、復活が人間を罪と疎外、利己主義の奴隷から解放し、そして奉仕と正義と愛の生活へと導くことを知らせてくれる。

結論として、われわれが今日の状況に対応する拠りどころは、教理学、典礼、説教、カウンセリング、霊性、行動計画、社会活動、そして恐らく最も重要になるだろうが、神学といった、それぞれの教会の営みの領域における「機能それ自体」へとつながってゆく、キリスト教の基本的本質に拠るということである。言いかえれば、他の分野を調査し、その問題を解決する急務にかまけ、キリストの内に示された神の解放の業を知らせる福音の、逆説としての単純さ、深遠さをそこなったり、覆い隠してはいけないのである。

この意味で、解放の神学はあくまでも、キリスト教の原点、福音の原点に立ち帰ることを呼びかけているのであり、過去においてキリスト教の理念をゆがめ、今後もそうすることになってしまう自己中心的、利益集团的イデオロギーを鋭く識別する役割を、どこにおいても今日の状況において果たしてゆくであろう。

欧米など先進諸国の大部分の人にとっては、神の愛の表現として隣人愛を中心におくことは、不遜な大風呂敷と映るようにみうけられる。しかし、そうした態度こそがまさに、今日の状況における基本的概念の重要性を指摘する理由を、ますます与えるのである。それが解放の神学の先進諸国への挑戦である。

この隣人愛の問題に対するすぐれたとらえ方は、クィンラン (Kieran Quinlan) の挑発的なタイトルの書物に見出せる。「人間の愛だけが神に至る道なのか?」。かれは言う、「ここ数年、ラーナー (Karl Rahner) をはじめ高名なカトリック神学者は、『隣人愛だけが、神を愛する道である。他に道はない』という理論を進めてきた¹⁴⁾」。聖書的論証と、体系的神学においてテーゼが提示する問題の検証の後、クィンランは、こう結論す

る。「ラーナーにとって、隣人愛はまず、実践の内にあるだけではなく、それ自体神の愛の基本的業であるのだ。しかも、隣人愛を実践する人の、心理的にそうであるだけでなく、存在論的にそうなのだ¹⁵⁾」。結論においてかれは、ラーナーらの説の新しさを指摘する。「それは新しい。それはチャレンジを提示する。たぶん、解答と反論を不安に満ちて探し出そうとする傾向にとってよりも、われわれの魂の真の安住の地を求める行為にとってであろうが¹⁶⁾」。

今日の状況における隣人愛についての、この項での最後の観点は、隣人愛と正義の追求との関連性についてである。ここで取りあげた著作の中で、セグンドは詳しくは分析していないが、かれの選んだ具体例の内に、その緊密な相関関係が暗示されている。また、1971年のシノドス（世界代表司教会議）は、その声明文でこの緊密な相関関係をうたっている。「キリスト教の隣人愛は、正義と切り離せない」。「愛は、正義への全き献身を意味する」。「正義は、愛の内にその実質を完成する」。

福音宣教の本質的なものとして、愛と正義の実践について、声明文は次のように述べている。「正義のための闘いと世界の改革への参加は、福音宣教の本質的な構成要素である」。「愛と正義というキリストのメッセージを、世界の正義のための行動において実現してゆくことがなければ、キリスト教が現代人の信頼をかちえることはできない」。「われわれが人間の全人的自由と解放のために働くのでなければ、今日、福音を宣べ伝える使命を果たすことはできない」。

6. 現代において教会とは？

教会がその世界への奉仕と宣教において、実際どのように役割を果たすのだろうか、という観点で、セグンドは現代における教会の使命を論じている。かれの見解は、ティヤール・ド・シャルダンの提唱した進化論（発展観）の内に教会の役割を明確に位置づけ、最終的には第二バチカン公会議

に採用されている。またかれは、制度の批判と改革における教会の役割と同等に、「解放の環境」を醸成する特別機関の役割を非常に重視している。ここで「教会」という時、それは位階制や聖職階級を指すのではなく、神の民全体を指す。信徒こそ、創造的な諸制度の改革の中心となるであろう。かれらは、すでにあらゆる制度の内に現れている。例外的な環境の外側に出れば、位階制は一般的な線にそって、神の民に対する真の奉仕精神において、教育と指針の役割を果たすであろう。

セグンドは「正義のためのロビー」をつくるようにすすめる。たとえば、カトリック正義と平和協議会のように、全世界的・全国的・地域的な「正義と平和」に関わる諸機関や、アメリカ合衆国におけるセンター・オブ・コンサーン (Center of Concern) やカトリック女性ネットワーク (Network of Catholic Religious) などのようなものである。セグンドの見方が正しければ、これらの機関ないしグループは、今や教会の真に本質的な役割を満たすものとして現われよう。すなわちその役割とは、この地球上のすべての人びとの生に深く影響をおよぼす地域的、国家的、国際的諸制度——社会的・経済的・政治的・文化的諸制度——を人間のものとする闘いに参加することである。このような組織はもはや、「片すみの一団」や「ささやかな活動者」、教会の真の務めのおまけとみなされることがないばかりか、人間の発展に占める教会の役割の中心的要素と認められるであろう。言いかえれば、そうした組織、機関、グループがなければ、教会は真に教会にはなりえないのである。

通常のカトリックの教区での草の根レベルでは、前述のような参加の努力は片すみでの出来事のようにみえるが、その活動を支える公式の文書によれば、かなりの数のグループの記録がある。それにしても、現代における教会全体の動きをみるならば、司牧者と信徒の大部分の状況は、まだまだパウロ・フレイレ (Paulo Freire) の言う「沈黙の文化」の域を脱してはいないといえるであろう。

「われわれが学ばなければならないのは、教会が宣教する資格を『持っている』のではなく、全くその反対である、ということだ。キリストの宣教によって、教会がつくられるのだ¹⁷⁾」。

7. 先進諸国における解放の実践

この項で議論する問題としては、司牧の実践とキリスト教の道徳性、あるいは先進諸国の教会の正統的实践などであるが、それらを支える基本原理のためにセグンドは数多くの材料を与えてくれる。それらの内、いくつかを要約してみたい。司牧の実践についていえば、セグンドの分析は、あらゆる司牧的戦略の下に横たわる最終的な目標の識別をより明快にすること、そして限られた資源と人材にかんがみ、決定を下さねばならないことの強調を、優先している。

現代社会は、世界史においてかってない消費社会の様相を呈している。「豊かさ」からの挑戦を受けて、目的喪失の無神論的、唯物論的社会をなす先進諸国において、果して消費社会を超越できる人間の育成に可能な道を開き得るだろうか？

非キリスト教的な宣伝のおかげで、キリスト教の行き先は、良くて他の価値に結びつけられるか、下手をすればそこに埋もれてしまうだろう。わずかに「大人」だけがその自由な決断によって、諸価値のいたるところでの集中砲火を食い止める望みを与えてくれよう。

先進諸国において、現在提示されている正しい行い、あるいは道徳とは、創造的、発展的、社会的、有意義なものであろうか？

どちらかと言えば、安全確保への要求が強い。道徳的決断を訓練して、時にその人の責任感を悩ますよりも、その人が責任をとるのにより安全な方法をとることにおさまっている。

先進諸国における教会のおもな務めとは、そのような幼稚さを追い払い、道徳的大人の育成に全力を集中することであろう。セグンドをはじめ解放

の神学者たちは、福音の原点に立ち帰ったキリスト教の本質的理解と、教会の世界への関わりについての成熟した理解とを、必然的に含んでいる道徳性を、先進諸国のキリスト者に向かってあますところなく示しているといえよう。

今日の実践の模範は、個人間よりも、広く社会に関わるものに認められる。その一例に合衆国における堕胎に関する問題がある。堕胎をなくするための構造的改善のキャンペーンである。かつて、教会の名を高めた「わが国は正か邪か」という審判の態度が、今でははっきりと、国を断罪し、悪を正す組織的な方法を企てている。

ここに、大きな成果をあげうる巨大な「意識化」(Conscientization)の過程が生ずる。というのは、生まれる以前の胎児の生命を支持する態度は、論理的にすでに生まれた者にまで拡大されるのである。つまり、貧しい者、抑圧されている者、苦しむ者、落ちこぼされ、切り捨てられている者、差別され、搾取されている者、「豊かな社会」にとって目に見えない者、非人間的な扱いをされている者である。

第三世界の民衆の飢餓問題解決のためのキャンペーン行動が、単に「世界のパンかご」地域の市民にとって、時のしるしの最も適切な読み方、実行であるだけでなく、より大きな意識化に、潜在的に大きな力をもっている。もし、効用最大化の原理が世界の食糧資源の公正な分配の「倫理」の不充足さを覆い隠すためのものであるなら、そこから地球の他の資源の分配は十分に公正であるかという疑問にいたるのは、さほど時間はかかるまい。たとえば、もしひとりひとりが食糧を十分に受けるべきであれば、その人が病気で死なないように分配されている現在の医療とその施設は果してどうだろうか？あるいは、もし医学が有効であるとして、もし人が掘って小屋で生活していたら、それでも効果はあるだろうか。

疑問は次から次へとつづいて出されよう。それこそ「豊かな社会」、先進諸国に生きる者にとって重大な意識化である。つまり、ある一つの具体

的な問題に関わることによって、次第に問題の根、「弱肉強食」の構造的な問題に迫るのである。これが「一点突破全面展開」の意味である。問題をどうみるか、その人の立つ立場によって、すでに問題にどうこたえるかを決めているのである。

現に合衆国においては、ラテンアメリカで生まれた解放の神学のおかげで、キリスト教基礎共同体、意識化の影響を受け、かれらの挑戦に基づいて、アメリカ司教団は政府に大きな影響を与えた「平和教書」につづいて「経済教書」、「女性教書」を作成している。世界の飢餓問題解決のための運動を契機に、次から次へと出された疑問とそれにこたえようとする運動が、アメリカのカトリック教会の再活性化に大きな力をもつことを如実に示している。セグンドの言葉を借りれば、それは創造的で社会的、有意義な道徳の、一言でいえば、キリスト者としての行動の具体的な体験を与えるものである。

さらに、正義、人権、連帯、平和、分かち合い、貧しく苦しんでいる人びとへの関心などの宗教的価値の注入は、高度経済成長をとげた「中流社会」、「豊かな社会」、基本的に消費社会の自己中心的な価値、欲望に没り切った——時には明らかに、はまりこんだ——先進諸国の社会にとって、きわめて健康的な解毒剤となりうる。

ともかく議論はやめて、実際に抑圧され、非人間的な扱いを受けている貧しい人びとの現場に出向き、直接にその人びとに出会い、体で経験することである。傍観者的評論、第三者的議論は尽きない。それらはやめて、上に述べた人びとの政治的権利をフルに高める努力によって、はじめて先進諸国のカトリック教会は、次の成熟段階に進むであろう。それは、成熟した道徳と成熟したキリスト者のあり方の理解から真に論理的に導き出される。そしてその形態は、実に深い意味で、政治的成熟である。

8. 解放の神学への取り組み

現代世界において教会は、古くて新しい問題を自問する。教会は完成された社会で、それ自体で完結しているのか、それともむしろ、「対話における相互依存」が、その本質を世界との関係であると定義するのか。さらに、神の国の到来に向かう人間の進歩とその歴史の関係に関する疑問である。「現代世界憲章」(Gaudium et Spes)の異なる箇所、異なる応答がなされている。

ところで、セグンドによれば、図式的聖書解釈のアプローチは、「聖書時代と根本的に異なる現代」の状況を照らし出すことはできない、とみなす。その根拠として4点をあげている。

第一に、われわれは現実の体験によって、イデオロギー的疑念に導かれる。第二に、イデオロギー的疑念の適用は、全イデオロギー的上部構造一般、特に神学におよぶ。第三に、新しい神学的現実の体験によって、われわれは聖書解釈学的疑念、すなわち、現代の聖書解釈は重要なデータを考慮にいれていないのではないか、という疑念に導かれる。第四に、われわれの新しい聖書解釈——すなわち、われわれの信仰の源泉の新しい解釈——は、われわれの対処すべき新しい現象を伴った聖書なのである。

ここで、具体的問題との関連で、アメリカ合衆国におけるキリスト教の位置づけ、その中での神学、聖書解釈を少し取りあげてみたい。

黒人神学者、ジェームズ・コーン (James Cone) によると、アメリカ白人神学 (American White Theology) は基本的に白人抑圧者の神学で、インディアン虐殺や黒人奴隷制も、宗教的に認められたものであった。そのおこりから現在にいたるまで、合衆国における白人の神学的考察は、黒人の苦しみに関わりなく神学的務めを定義すること (リベラルな北部のアプローチ) によってか、またはキリスト教が人種差別主義と矛盾しないと定義すること (保守的な南部のアプローチ) による「愛国的」なもので

あった。いずれの場合でも神学は、国家のしもべとなってしまった。これは黒人にとって死を意味するのである¹⁸⁾。

新約聖書を正しく読むと、イエズスの復活は、神が今日この社会の中に存在して、しいたげられている人びとの解放を成し遂げられていることを意味するのがわかる。イエズスは紀元一世紀の中だけにとどまてはいない。実は、昔のキリストについて語ることは、それが今日、われわれがイエズスに出会うよう導くものとなる限りにおいてのみ重要なのである。黒人神学者については、黒人共同体が解放を得るための仕事に加わってきた時、今ここで、神の啓示が何を意味するのかを考察する時、重要な存在となる。

セグンドは、コーンの一連の考察について、たとえば、苦しむ者の救いの仕事の聖書的可能性から、黒人が締め出されている理由などについては、若干異論を唱えているが、基本的には、コーンの著作を、聖書解釈の体系の方法論の、優秀な例であると評価している。

神学的議論を刺激する、方法論における多くのニュアンスから離れて、「変革の神学」(Theology of Change)、もしくは、より特定すれば「社会変革の神学」(Theology of Social Transformation)の立場から、今少し考察してみたい。

教皇パウロ6世の回章「諸民族の進歩推進について」(Populorum Progressio)が国家そして国際的秩序の両面に求めるものは、確立された秩序の徹底的な破壊、つまり社会の根本原理そのままの完全な変革である。

この回章をもって、教会はその社会のありふれた価値観と目的による、無批判的な自己確認の姿勢から、預言者的な批判の姿勢へ極めて重要な転向を行ったのである。しかし、パウロ・フレイレの言葉を引用すれば、現代社会との対話においては、「告発」だけではなく、「告知」しなければならない。つまり、社会変革のためには、現存の秩序を批判するだけでなく、新しいビジョンと実際的な提案がなされなくてはならない。この時代の人

びとがよりよい人間社会を建設するという共通の事業への照らしと助力のために教会を求めたとしたら、やがて、あさがしの好きな否定主義と絶え間ない弾圧とにうんざりするだろうからである。

ところで、提示する解決においては、より明確に独自の積極的路線を維持しながら、この重要な急務をつづけなければならない。そこには望まれる変革を実現するための具体的な歴史的選択に伴う、リスクを覚悟しなければならない。その務めを全うするためには、基本的に、教会がその規範となる公式文書、聖書に対して抱く意識的な関係が、反動的、麻痺的な保守主義ではなく、社会に開かれたものである必要がある。換言すれば、社会的教えと行動が長期的に有効であるためには、創造的かつ想像的な変革を育む聖書解釈に根ざさなければならない。

セグンドの聖書解釈体系が未来に大いなる展望を与えていると思われることは、この基本的な神学的方法において、きわめて緊要なことである。ちょうど、ブルトマン (Rudolf Bultmann) が、個人個人の信奉者に「実存的予備理解」(Existencial preunderstanding) を与えるように、セグンドの解釈体系は、今日、非常に悪い形で出ている聖書への疑問に対して、ある種の「社会的予備理解」(Social preunderstanding) を与える。方法論は、当然神学者の鋭い批判にさらされる必要があろう。しかし、この体系の唯一の終局的反論とは、より効果的、創造的、解放的な代替によってしかなされない。それが登場するまでは、この聖書解釈体系は、教会に、その直面する歴史上で最も重要な時期の変革への挑戦において、最上の希望をもたらしてくれるであろう。

9. キリスト教とイデオロギーの問題

信仰はイデオロギーであるか、という問題は、正義のための闘いを現実的に「神の福音を宣べ伝える本質的な次元」ととらえる考えで、あらゆる現代の神学にとって、核心的な問題である。

「オクトジェシマ・アドヴェニエンス」(Octogesima Adveniens, 邦訳は浜寛五郎訳, 中央出版社, 1975年を使用)においてパウロ6世は、すべての社会的政治的イデオロギーの両義性を指摘している(同書26~29)。そして、社会主義者、マルクス主義者に鋭い批判を浴びせる(30~34)。同様に、自由世界の資本主義も批判している(35)。

キリスト者個人に関して、パウロ6世は、「あらゆる思想体系を越えて、しかも兄弟たちへの奉仕を怠ることなく、自分が選んだ道によって、社会の改善に独自の貢献をすることができる」と指摘する(36)。「市民社会の種々の組織の代わりをしたり、独自の領域を越えたりすることなく、人間社会の正しい変革に必要なキリスト教信仰の要請を表明しなければならない」(51)。

そして、もし、この奉仕が空虚な奉仕精神を越えて行われるならば、明らかにそれは変革のための独自の計画と戦略を創造するものでなければならない。要するにそれは、その目指すところと意義において、よりよい新体制——つまり、よりよい新しいイデオロギー——に導くものに違いない。

「良心に対する忠実ということにおいて、キリスト者は他の人びとと結ばれて、共に真理を追求し、個人生活と社会生活の中に生じる多くの道德問題を、真理に従って解決するよう努力しなければならない」(「現代世界憲章」16, 邦訳は長江恵訳, 中央出版社, 1969年を使用)。「信仰はすべてを新しい光をもって照らし、人間の十全な召命についての神の意向を現し、したがってほんとうに人間的な解決に精神を向けさせる」(同書11)。

現代世界において、教会、キリスト教信仰とイデオロギーの関係が問題とされる場合、特にこの項で論じる内容を吟味する必要がある。まず、教会は過去、現にある価値を、それが自明のもので、自然である——つまり「常識」である——という理由で、考慮することもなく受け入れる傾向にあった。現代では、特に、社会科学の影響を受けて、既存の秩序を偽っ

たり奉ったりすることによって起こる危険が存在するようになった。

こうした時代に、「非イデオロギー化」という作業は緊急を要する。しかし、この大仕事は、まだ、その生成時期にあるにすぎない。ここで重大なことは、ヨーロッパ社会において、解放の神学の真の主題（表立ってはいないが）が、全き至福千年とコンスタンチヌス大帝期のキリスト教の断片は、強大な特権の利益を擁護しながら、徐々に福音を大きくイデオロギー化させてゆくということである。したがって、もし、ヨーロッパの神学者たちがこの点に深い関心と応答を与えるならば、非イデオロギー化の本質的過程は、大きなはずみをえるであろう。

しかし、この意識変革は、今すぐに教会の態度を、すべてのイデオロギーを拒否する方向にしむけるのではない。というのは、もしこの項での議論が正しければ、そうした企ては実現不可能だからである。すべてにおいて、非政治的であれと要求することは、すでに、そういうイデオロギーを受け入れることである、しかも、それはまた、権力と富をもち、現状維持を図る人びとに、断然受け入れられるであろう。

また、すべてのイデオロギーを拒否するなどという逃げ口上は、司牧レベルで最終的に混乱を引き起こすであろう。もし教会が、非イデオロギーの側の支持者となれば、それはすなわち「個人生活と社会生活の中に生じる多くの道德問題を真理に従って解決する」道を求める他の側の人びとと連帯しない、道德的幼稚症と断罪されよう。そうして、それは、ノスタルジックな博物館入りの代物か、未来に対する大人の責任からの有害な逃避と、ますます思われるようになるだろう。もし、他のイデオロギーが、現代の思想状況を撃つ多様性から、そのようなイデオロギー的真空に走り、現実的かつ機能的な価値体系をその成員に果すことになったとしても、それは驚くべきことではない。

今ここで、取り入れるべき特定のイデオロギーとは何かを論じるつもりはない。その作業は、歴史の不意の出来事に開かれたままであるべき、現

在進行形の仕事であろう。しかし、ここで述べた考え方は、歴史的に直面しなければならない二者択一の事態で、判断を下す助けとなるであろう。

もし教会が、福音がイデオロギーにまみれるのを嫌って、その「王国」ないし「なわばり」に引きこもるのを選べば、教会は歴史のはきだめとなる運命をたどる保守反動の砦にすぎなくなるであろう。その一方で、もし教会が、つねに新しくよりよいイデオロギーの内に福音を受肉させる、前者とは著しく異なる挑戦的な、そして恐しい冒険を選択するなら、神の民は、第二バチカン公会議が推める「新しい人類の働き手」たる運命を全うすることができる。

10. マルクス主義の挑戦

セグンドの見方にこたえる上で必要なことは、第一にかれの社会主義の選択が、ラテンアメリカにおいて特殊なものでも異常なものでもないことである。このような選択を支持するすぐれた解説として、『キリスト者と社会主義——ラテンアメリカ・キリスト者社会主義運動の記録』[John Eagleson ed., *Christians and Socialism: Documentation of Christians for Socialism Movement in Latin America* (N.Y.: Maryknoll, 1975)]がある。

「政治的局面において、かれらはより客観的な社会現実の分析からはじめようと決意し、この決意は、これらのキリスト者がプロレタリアートないし一般民衆出身である時に、殊に豊かに結実するであろう。……かれらの革命的闘いにおける個人的発達に加えて、社会主義者のキリスト者 (Socialist Christians) の政治的務めは、第一にイデオロギーの分野に見出せよう」(前掲の *Christians and Socialism* より)。

第三世界諸国の選択は、なにもラテンアメリカに限られるわけではない。たとえば、過去数十年にわたって独立を達成したアフリカの新興諸国の多くは、社会主義モデルの政府を採用している。さらに、このアフリカ

の立場を能弁に物語る者として、カトリック者であるタンザニアの大統領、ニエレレ (Julius K. Nyerere) は、20年近く前にこう指摘している。

「“ウジャマア” (Ujamaa=共同農場)、あるいは家族主義という言葉で、われわれの社会主義を言い尽くせるだろう。それは、人間による人間からの搾取の上に幸福な社会を築こうという資本主義と正反対のものだ。それは同等に、人間と人間との間の抜きがたい闘争という哲学の上に幸福な社会を築こうという、教条的な社会主義とも正反対のものである。……誰しもが属している家族というものの概念は、より広く、部族、共同体、国家、あるいは大陸にまでおよび、全人類社会を包含するものでなければならない。これが真の社会主義にいたる唯一の論理的帰結である¹⁹⁾」。

そこで、セグンドの、そして第三世界民衆の選択に対するわれわれ先進諸国国民のこたえは、第一に、かれらが自分の運命を自分で開き、自国の政府のモデルを自分で選ぶ政治的自由の尊重でなければなるまい。前述の文章の中で、セグンドは、いつの日か、アメリカ合衆国との間に「卒直な対話」を確立する必要を指摘している。

1. なぜ、合衆国世論は、合衆国内における社会主義への傾斜の動きを、そしてマルクス共産主義をソ連圏への親善関係と取り違えてしまうのか？ 2. どうして合衆国の政策がラテンアメリカにおいて求めるような友好国や同盟国が、合衆国の最も誇り高い完成という真の理想に対して、一貫して最も敵対する人民、グループでありえようか？ 3. どうして合衆国の世論と政策は、ラテンアメリカの革命的行動をすべて、合衆国に対する敵対の方向にみなしてしまうのか？ 4. 合衆国の国民はいったい、トラスト反対法が合衆国で制定されることの不正義が、同じ法案がラテンアメリカで成立する場合よりも、世界の——ひいては合衆国自身の——平和に対する脅威となる度合が少ないなどと、本気で信じているのだろうか？ 5. なぜ合衆国の有権者は、ワシントンの対ラテンアメリカ政策を、ラテンアメリカにおける巨大な利益と軍事機構に関心を抱くグループのい

うがままにしておくのか？

アメリカ合衆国において、たとえばエネルギーや食糧の分野のように、その所有形態で社会全般の利益のために強力な統制下において個人の所有の破棄を余儀なくさせるという、侵害行為が明確にみられるものがあることを信じている人は少なくない。さらに、過去数十年にわたる多国籍企業のはばみきれない力の驚異的な増大によって、国際的な支配の強要が生み出されてきた。そしてそれは、利益追求の動機の上に成り立ち、共通善への疑問さえ表面化させてゆく。国際貿易における異常なまでの利益追求が、上記のセグンドの5つの質問のどれにこたえる際にも心にとめておくべき鍵となる要素であろう。

「トインビーらが指摘したように、すべての大帝國は、大勢のプロレタリアートの汗の上に築かれてきた。しかし、今世紀初頭とは異なり、今日では、大帝國の生活と富をあらしめるプロレタリアートは、たいがいその生活や富とは無縁であるのだ。つまり、かれらは大都市の最先端からは、はるか外で生活しているのだ。ロシアもそれ自体、世界的なパワーとして生き残るために、以上のような仕方を取り入れる必要があったのだ。そして、合衆国——つねに最大、最強、最高に富める帝國もまた、そうせざるをえなかったに違いあるまい。……すべての合衆国国民は、金持ちも貧しい者も、かれらの安住と前進の本当の源なるものを、永続させることに関心を寄せている。その源とは、原材料輸入価格と製品輸出価格の不均衡を助長する、国際経済の構造なのである²⁰⁾」。セグンドは、かすかな希望を、合衆国国民がその「経済—政治帝國の再編」を引き受けることに見出す。その目論見は、実際、「全人類にとって、かつてない困難な挑戦」となるであろう。

アメリカの社会学者、ロバート・ベラー (Robert Bellah) は「アメリカの、社会主義タブー」と呼ぶ問題について、短い鋭い分析を行なっている。かれは、そのタブーの根本原因を記述して、こう提示する。「われ

われの困難は、ほどなく重大なものとなり、尊敬する政治家でさえ、過去のタブーを無視して、アメリカ社会主義について語り、その姿を明確に描こうとするようになる²¹⁾」。そのような動きを成功させるために、かれは「社会主義者のビジョンが、かつてのヘンリー・ジェームズ (Henry James, Sr.) やユーゲン・デブス (Eugene Debs) らのように、政治と同様に道徳・宗教のビジョンと結びつかなければなるまい」と指摘する。

かれが、その序文で述べているように、それは「20世紀末にわれわれを襲うであろう嵐をしのぐことは、科学とテクノロジーの宗教的、道徳的、社会的な、新しい想像力に富んだ解釈だけに可能なのである」。筆者の見解では、その代替案は、合衆国社会の破壊か、「すばらしい新世界」の変種の独裁制によって、その破壊を食い止めるかのどちらかである。

イエズス会の社会学者、ジョン・コールマン (John A. Coleman) は、結論として簡潔にこう述べている。「わたしは、アメリカ合衆国における解放の神学の基本的な務めは、人間の顔をもった社会主義というものを成し遂げることだと思う。19世紀の、個人主義の偽りの二元論と、一元論の社会主義に代る、実行可能な道を見出すことである。そして、正義と自由の諸々の善を合わせて、新しい統合へと導くことである²²⁾」。コールマンは、その務めとして、国家の社会・経済倫理、政治的自由、そして市民的自由の伝統の間で調停役を果たすことを、強く、正しく論じている。

そこで、「アメリカ合衆国での文脈における唯一可能な社会主義の形態は、明らかに社会民主主義であろう」とA. ヘンネリーは結論づけている²³⁾。しかし、それがどうやって、どこまで達成されるかは、現時点では決して明らかとはいえない。少なくとも、この中枢の分野での選択は、今後合衆国が建国第三世紀目に向かって引き継いでゆくユダヤ・キリスト両教徒の共同体の直面する決定的な問題のひとつであることに違いはあるまい。

(筆者は上智大学社会正義研究所員、経済学部経営学科助教授)

注

- 1) 相馬信夫, A・マタイス, 酒井新二共著『日本にとって 解放の神学とは——現代から未来への提言』中央出版社, 1986年, 63—70頁参照。さらに, 1985年度上智大学学内共同研究「解放の神学」報告書参照。
- 2) 筆者が1982年9月より1年間アメリカ滞在中ジョージタウン大学のウッドストック神学研究所での「アメリカ合衆国経済倫理研究会——カトリック司教団の『経済教書』作成部会——」に参加し, 討議し合った内容を, この機会にまとめてみたい。したがって, この小論は, おもに Juan Luis Segundo, S. J. を取りあげた。Alfred T. Hennelly, S. J. をはじめ当神学研究所の神学者たちに負うところが多い。
- 3) Alfred T. Hennelly, *Theologies in Conflict* (New York: Orbis Books, 1979) p. xxi.
センター・オブ・コンサーン (ワシントン D.C.) 所長 Peter Henriot, S. J. は解放の神学のアメリカ合衆国における意義を次のように要約している。「カトリック司教団によってつくりあげられた『平和教書』, 今準備されている『経済教書』, 『女性教書』は, まさに中南米におけるキリスト教基礎共同体(BCC)を基盤にして生まれた解放の神学の先進国におけるシンボルともいえる」。
- 4) Juan Alfaro, *Theology of Justice in the World* (Vatican City: Pontifical Commission on Justice and Peace, 1973).
- 5) Leonardo Boff, *Jesus Christ Liberator: A Critical Christology for Our Time* (N.Y.: Orbis Books, 1978).
- 6) Jon Sobrino, "El conocimiento teológico en la teología europea y latino-americana," in *Liberacion y cautiverio* (Mexico City: Comité Organizador, 1975) p. 207.
- 7) Robert McAfee Brown, "Reflection on 'Liberation Theology,'" *Religion in Life*, Autumn 1974, p. 273.
- 8) Seldio de Torres ed., *The Third World Theology* (N.Y.: Orbis Books, 1979) 参照。スリランカで開かれたこの会議には筆者も出席した。
- 9) Robert M. Brown, *op. cit.*, p. 279.
- 10) Juan Luis Segundo, "Etapas precristianas de la fe: Evolución de la idea de Dios en el Antiguo Testamento," *Cursos de Complementación Cristiana*, 1962, p. 6.
- 11) Juan Luis Segundo, "Concepción cristiana del hombre," *Mimeografica "Luz"*, 1964, p. 7.

- 12) *Ibid.*, p. 28.
- 13) *Ibid.*, p. 31.
- 14) Kieran Quinlan, "Is Love of Man the Only Way to God?" *Catholic Mind*, February 1978, p. 29.
- 15) *Ibid.*, p. 37.
- 16) *Ibid.*, p. 38.
- 17) Jürgen Moltmann, *Church in the power of the Spirit* (N.Y. : Harper & Row, 1977) p. 10.
- 18) James Cone, *A Black Theology of Liberation* (Philadelphia: Leppincott, 1970).
- 19) Julius K. Nyerere, *Ujamaa: Essays on Socialism* (Oxford: Oxford University Press, 1968).
- 20) Juan Luis Segundo, "Has Latin America a Choice," *America* 22, February 1969, p. 12.
- 21) Robert Bellah, *The Broken Covenant: American Civil Religion in Time of Trial* (N.Y. : Seabury Press, 1975), p. 138.
- 22) John A. Coleman, "Vision and Praxis in American Theology: Orestes Brownson, John A. Ryan, and John Courtney Murray," *Theological Studies* 37, March 1976, p. 40.
- 23) Alfred T. Hennelly, *op. cit.*, p.170.

The Challenge of the Theology of Liberation to Industrial Countries

—The Evangelization in the Modern World—

Keizō Yamada

SUMMARY

Since the Congregation for the Doctrine of the Faith published "The Instruction on some aspects of the Theologies of Liberation"

in September 1984, the Theology of Liberation has been widely paid attention in the world as well as in Japan. This congregation published again "The Instruction on Christian Freedom and Liberation" on March 1986.

The reaction of ordinary Japanese to the Theology of Liberation can be said to be rather positive. At the same time, here are some questions like "How can we apply the Theology of Liberation to Japanese society which is so different from the countries of the Third World where the Theology of Liberation was born?" and "How can we create our own Theology of Liberation here in Japan?"

In answering these questions, I would like to introduce here the following contributions from U. S. Theologies.

1. The meaning of the Theology of Liberation in the USA.
2. Faith, Justice and Liberation.
3. The Theology stressing the solidarity with and option for the poor.
4. The Theology of Liberation as different from the European Theology.
5. What is a Christian in the Modern World?
6. What is the Church in the Modern World?
7. The practices of Liberation in Industrial countries.
8. The struggle for a Theology of Liberation.
9. Is Christianity an ideology?
10. The Challenge of Marxism.

Principles of Science and Technology Cooperation in Asia*

Hidetake Kakihana**

(I) Introduction

Now, close to the last decade of the 20 th century, one important and urgent problem still remains unsolved: how to set up policies which will work successfully and effectively for *true* development of developing countries.

To approach this difficult problem, two fundamental concepts:

1) Necessary steps for development
and

2) Regional cooperation

will be analyzed in this paper. A logical approach with a sense of ethics will be used, based on reconsiderations of human history and on some views of the present multi-directed and rapid development of science and technology.

(II) Necessary Steps for Development

Through human history, no nation has ever jumped directly up to its present stage of civilization, culture and economic prosperity. Each nation has its own long history and each advanced

* This Paper was originally presented at the First Asean Science and Technology Week (April 29, 1986, Kuala Lumpur).

** Hidetake Kakihana is Professor, Sophia University, Member, The Science Council of Japan, Former Deputy Director General, International Atomic Energy Agency (Vienna), and Professor Emeritus, Tokyo Institute of Technology

nation has its own history of development during which every effort was made to overcome various kinds of severe difficulties.

Some nations in Europe started their present form of development early in the 16th century; the U. S. A. had its start around the end of the 18th century. Japan and Finland started their development only 100 years ago. The century in which each nation started its movement toward its present form of development is different from the 16th century to the 19th century. Nevertheless, there is a common factor for all of their developments; the development was stepwise.

The steps observed through the histories of all the developed nations are common: there are four.

- 1) Establishing a good balance between demand and supply of foods within the domestic area, or if that was not possible, in the region, more precisely in a regional group of countries.
- 2) Fostering agro-industries and industries for processing natural products, to meet the domestic and the regional demands and to enlarge the domestic and regional markets. At this step, some countries in Europe and Japan started their invasions of other nations to expand their markets.
- 3) Finding and building up a few 'column' industries with some advanced technologies, based on human capabilities and economic circumstances within the country and in the region, again to enlarge the domestic and the regional markets. I am sorry to say, at this stage, many European countries, Japan and even the U. S. A. started to resort to the occupation and colonization of other nations.
- 4) Based on results, experience and capitals accumulated through the preceding 3 steps, each nation could plan to build up a big pyramid of systems of industries with advanced technologies. European countries, the U. S. A. and Japan established this type of pyramid not only on the sound basis of enlarging domestic

and regional markets but also on the basis of Machiavellian politics and of criminal market controls over colonized nations, aiming at further expansion, producing severe friction, and resulting in the 2nd World War.

Now how is the present situation of the developing countries, which has been freed from criminal occupation and Machiavellian colonization after the 2nd World War?

Even in Asia, some countries are facing the first step with severe bitterness. In order to establish a good balance between demand and supply of foods, three items should be considered.

a) Increase of food production is the most important at this step. A starving country can accept some food donation from the outside only on the basis that every effort would be done to improve the total system of food production by the country itself. The majority of technical assistance funds should be used for improvement of crops and animals, for protecting the land against the desert, and for constructing irrigation water networks throughout the country.

b) Improvement of food preservation and transportation system can be more effective than we imagine. In the world, more than 30% of the crops are spoiled and dumped after their harvest. This figure is much higher in the developing countries, because of the absence of effective storage systems and of inadequacies of transportation system. This is the reason why hundreds of thousands of persons are starving in one city, while at a place only 100 km away a big accumulation of crops are left out only for spoiling.

c) Birth control should be carefully considered. If we simply consider the balance between demand and supply of foods, birth control is without doubt the most powerful policy. However, abuses and misuse of the policy will damage persons fatally in their spirits as well as in their bodies. Based on each nation's modest and sound policy, some birth control looks necessary and

will need medical support from developed countries. In other words, a birth control law in force only in a limited period of time is necessary to overcome the situation of ever-lasting starvation in some developing countries.

The effort to establish this balance should, of course, be done mainly by the country itself. However, support from developed countries and cooperation with the neighboring countries are essential to overcome the severe difficulty at the earliest chance. If the money given to developing countries for buying weaponry or a few percent of the money spent by powerful developed countries for their armament races is transferred to a program to improve a balance between demand and supply of foods, all the nations now facing the first step without hope will step up to the second step within a few decades. If one tenth (or even less) of the future budget for the SDI is spent studying desalination processes of sea water to irrigate the desert and for improving plants, with or without mutation, so that they can be grown in the desert, the severe ethical problem of starvation in Africa will be completely solved.

The majority of Asian countries are at the 2nd step. To enhance this step, two items should be carefully considered.

a) Transfer of science and technology from developed countries and cooperation regarding science and technology with the neighboring countries, as is the case at the first step.

And in addition,

b) The young agro-industries for processing natural products that have been just developed in a certain developing country must have a regional market in some way such as a most-favored-nation treaty. This is because, in most cases, the domestic market of only one country is not enough to foster the young industries and of course the country has no possibility of occupying the neighboring countries to enlarge its market, as was done in the

18 th, 19 th and 20 th century by some European countries, the U. S. A. and Japan. Without a steadily enlarging regional market, most of the young industries of the developing country will be severely attacked, controlled and even overwhelmed by heavy economic pressure from the side of advanced countries with high technology, advanced management and huge amounts of capital.

Profits obtained from the 2nd step, I would like to recommend, should be used for three different purposes to provide the further steady development of the nation and the region ;

a) Investments for the build-up of educational systems: starting from schools for teachers who will teach pupils at primary schools, finally terminating in a pyramid of which the basis is a large number of primary schools accepting all boys and girls at each corner of the country and of which the top is a few universities with good staff and facilities for teaching and researching. Here we should not forget the fact that a pyramid can be build only from the base, the primary schools, not from the top (cf. Figure 1).

b) Investments for economic development: first those for further

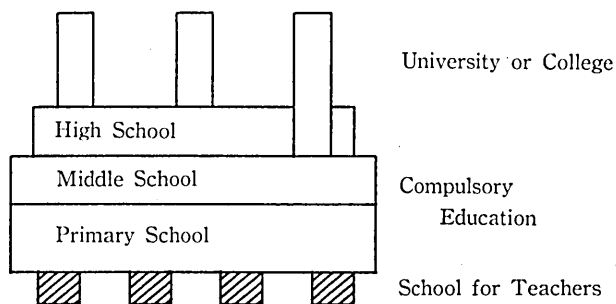


Figure 1. System for Education.

development of agro-industries and industries for precessing natural products to enlarge their profits as well as to enlarge the domestic and regional markets and, secondly, investments for researches necessary for the next (3rd) step.

c) Investments for social stability, social stimulation and social welfare. For social stability the first item that I would like to recommend is to build up a system of laws; a judicial system not only for the ruler, but also for the majority of the nation. For that purpose it is necessary to learn legal practices from developed countries, and then to adjust what was learned to the local and historical situation through wide and enthusiastic participation from all sectors of the nation. The second is to maintain and functionalize the judicial system without major change at least for a few decades to stabilize the society and to govern the country in a democratic way. After social stability is established to some extent, investments for social stimulation, for example, to be a host country for international or regional meetings like the First Asean Science and Technology Week or even for the Olympic Games are very effective. Investments for social welfare are, of course, the most important and the most desirable from the human point of view, but again effective only in a society stabilized at least to some extent.

Only a few developing countries are at the 3rd step. The success of the 3rd step is not easy. At the start, the selection of column industries is the most important and the most difficult. The factors to be considered for the selection are:

- a) Column industries work of course for their own profits, but should work as the structural columns for the future development of the nation and the region as a whole;
- b) Science, technology and engineering required for the column industries will educate and develop the human capability in the coutry and in the region;

- c) Within a decade, the column industries will be able to be operated effectively, mainly led by managers and engineers from the country or the region;
- d) Products produced by the column industries should have some markets in the country and/or in the region.

Considering these four factors, each country will select and build up a characteristic assembly of different kinds of the column industries (Fig. 2).

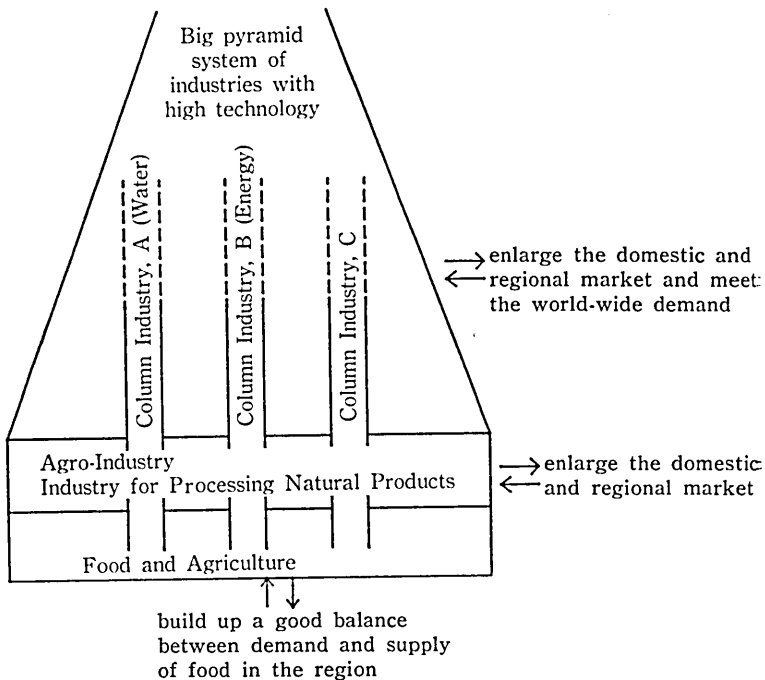


Figure. 2 Necessary Steps for Development

However, three column industries are common to all the nations at the 3rd step; the first is the energy-producing, the second is the water-supplying and waste water disposal industries and the

third is the civil engineering and construction industries. In addition to these three, material-producing industries (for example, iron, copper, aluminium and their alloy industries) would be the fourth column industry, possibly for some developing countries and without doubt for the region or the group of the countries.

Before the energy crisis, many engineers and economists in developed countries did not consider the importance of energy, feeling that energy, like air, would be automatically supplied. They forgot that their grandfathers had devoted efforts to build up steady systems of energy industries.

Even at the 1st and 2nd step, the stepwise development of energy-production and energy supply systems is necessary, however, at the 3rd step, the energy industries are the most important; the cheap production and steady supply of energy is the essential factors for all industrial productions, just as a good circulatory organ with healthy blood is essential to the human life.

The system of energy industries should of course meet the national and the regional demands at the present situation. However, it should be well-planned for development over a longer term to provide good, cheap and steady energy thanks to the use of advanced science and technology; since the dispersed use of oil and natural gas in each family is not enough, gas-producing and supply system should be constructed; starting from precise investigation of water resources, dams should be constructed at proper positions to establish a clean system of hydroelectric power generation and supply; starting from use of fossil fuels like coal and oil, with good care of the environment, accumulating scientific knowledge and technological expertise, a challenge to reach a system of atomic energy should be well planned; such a system now gives the cheapest electricity in the advanced countries and would be the best one in the 21st century, if care for safety and for waste would be much more intensively and internationally taken than now

and if a new system for nonproliferation of nuclear weaponry would be set up by scientific and technological development.

Water is of course the very basis of food and agriculture; this means that, if a developing country has moved successfully up through the first and the second steps, it is sure that some effective networks of water storage and supply already have covered the agricultural part of the country. Based on these networks, well planned new water storage and supply systems for clean drinking water and for industrial uses should be established at latest at the 3rd step. Treatment of waste water should carefully be considered both for economical uses of recycling water and for protecting each citizen's life against pollutions from industries and from daily living disposals.

Industries for water storage and supply and those for waste water treatment are essential for agriculture, industry and rural, urban living. Water industries should be built up as one of the column industries in each developing country at the 3rd step.

Civil engineering and construction industries are the third column industry common to all of the developing countries. Especially at the early stage of development, how to construct a network of transportation and by what means to transfer raw materials, products and people in and through the country and the region are the key for future development. Developing nations should feed their own civil engineering and construction industries through construction of national roads and railways even in the case when foreign aid is accepted.

Compared with energy, water and civil engineering (and construction) industries, which are essential for development of each of the developing countries and should have a good balance between demand and supply within the country, industries producing structural material like steel, copper, aluminium and their alloys need a bigger market than any single developing country

can provide. Inter-regional division of work is absolutely necessary to foster material producing industries in developing countries against the overwhelming pressure from those of advanced countries. Only on the basis of inter-regional division of work can the material producing industries remain and grow up as one of the essential column industries for the future development.

Using the properly planned and well-implemented system of energy, water, civil engineering and structural material industries as the main columns, fostering an assembly of further well-selected column industries with the help of the regional most-favored markets, and having well developed food and agriculture and effectively enlarging agro-industry and industries for processing natural products as stable bases, the country and the region can build up a big pyramid of industries with high technologies. Without the basis and the columns, the pyramid will remain an imaginary one.

(III) Regional Cooperation

More than 100 countries in the world are called developing countries. It is ineffective or even impossible to set up policies meeting the developing countries' needs as a whole. Some kinds of grouping are necessary.

From my experiences, mainly as Deputy Director General of the International Atomic Energy Agency (IAEA) in Vienna to promote technical transfer programs in the field of atomic energy, I have become convinced that the Regional Grouping of Developing Countries is the best way for promoting programs with results and with efficiency. Perhaps 5 regions, in more practical words, 5 regional cooperations can cover all of the developing countries:

- 1) Asia,
- 2) the Middle and and Near East and the North Coast of Africa,
- 3) Africa,

- 4) Latin America, and
- 5) the Balkan Peninsula.

Confining our discussion in Asia, from the west to the east, we find developing countries with varying levels of industrialization: Pakistan, Afganistan, India, Bangladesh, Sri Lanka, Burma, Vietnam, Laos, Cambodia, Thailand, Malaysia, Singapore, Brunei, Indonesia, the Philippines, Mongolia, North and South Korea, the Pacific Islands and China. Developed countries like Japan, Australia and New Zealand are in this region and the U. S. A. and the U. S. S. R. have strong influences on this region, at least on some parts of the region.

Setting-up of three or four sub-groups is necessary for actual promotion of regional cooperative programs in Asia. The Asean countries (Thailand, Malaysia, Singapore, Brunei, Indonesia and the Philippines) have good records of mutual cooperation in the past and have good reasons to expect successful regional cooperation in the future. Trying to overcome political and religious conflicts, the nations like Pakistan, Afganistan, India, Bangladesh and Sri Lanka have a strong intension to set up a regional cooperation group in West Asia.

Everyone knows that there are severe controversies and political conflicts between South and North Korea, among Vietnam, Laos, Cambodia, the Asean countries and China, and between Mongolia and China. The controversies and conflicts look impossible to be solved at a political level. Nevertheless, in some fields of science and technology it is possible to build up a regional cooperation group, in which both sides of politically conflicting countries are glad to participate and to send experts for obtaining key knowledge and practical expertise for true development. Through such scientific and technological cooperation, mutual understanding and respect will surely be fostered among the experts, which will after all give some good influence even on the

long lasting political controversy and conflict.

Early in 1978, I had allocated \$ 100,000 within my department of IAEA to initiate a regional cooperative program of Asia and the Pacific in the field of biological, medical, agricultural and industrial applications of isotopes and radiation. At the start, actively participating countries were only 9: India, Bangladesh, Sri Lanka, Thailand, Malaysia, Indonesia, Singapore, the Philippines and Australia. Since then, this regional cooperative program has grown up and now the number of participating countries has almost reached 20. Its annual budget, supported by IAEA, UNDP (United Nations Development Program) and participating countries, had expanded to \$ 1,700,000 in 1985. Each member country of the program is a donor. Among them, the main donors are Indonesia, Japan and Australia.

At some scientific and technological meetings, the experts from the Asean countries, China and Vietnam sat together around a table to discuss, not politically but in a scientific and technological way, how to achieve, the true development of Asia. At another meeting, the experts from South and North Korea, who looked at the start as if they had forbidden themselves to have any direct talk with the Koreans beyond the artificial border of the 38th parallel of latitude, started to chat in Korean at the end of the meeting.

Based on my experiences in Vienna, I am convinced that true development of developing countries has its basis above all in realizing the spirit and infrastructure of self-reliance through the stepwise implementation of development as mentioned in (II). However, almost all developing countries at the present situation need some kinds of collaboration. Bilateral collaboration, especially between a developing country and a developed country, is of course very important and could be valuable if the developing country can keep independent in the political, economic and

spiritual senses from the developed country. The regional multilateral cooperation could be free from direct influence of any of the developed countries. Furthermore, it will act as an incentive to create movements both of cooperation and competition among the experts of different countries in the region. As is well known, good cooperation and fair competition are the father and the mother of science and technology, the parents of development.

To implement the multilateral cooperation with success, the establishment of regional centers is the key. I believe that the Asean countries will be the first to have a regional center, a pure scientific and technological organization for their common use. The center should be protected against direct influences of any politics, especially from outside of the region, by not being fully supported by any government.

About a half of budget of the center should come from international funds or organizations like UNDP, UNIDO (United Nations Industrial Development Organization), UNU (United Nations University), IAEA and others, and the remainder should be covered with contributions from the countries in the regions or even from outside the region. Contributions in kind, like manpower and facilities in developing countries, should be welcomed.

The majority of the staff of the regional center should be the scientists, engineers and economists from the region. Some, if necessary, can be invited from the outside but with a shorter term than those from the region.

Programs will be carefully selected by a group of senior experts in and outside the region. The current step of development and the needs and capabilities of the region should be carefully considered by the group.

One of the programs having priority at the start of the regional center is without doubt a program for analyzing the real situation of the science, technology and educational systems of each of

member countries. Another one will be programs concerning network studies on energy, water and transportation in the region. Considering the column industries of each country, the regional center will work for a few programs to support them and will select other programs to build up a total system for development of the region as a whole. Furthermore, a risk-sharing concept may be helpful to select a bigger program that would be too risky to be implemented by one country.

At the start, the regional center need not exist in full scale. The research institutes, laboratories and some sectors of universities of each member country can receive some funds from the center for implementing cooperative works planned by the center.

The programs selected can be led at the start by an expert who might even be a person of a developed country in the region. However, in such cases, the leader is obliged to select a few deputy leaders from the specialists of the developing countries in the region. The leadership of the program should be transferred to one of the deputies at the earliest chance.

Evaluation of the program performance should be done by analyzing in three different dimensions:

- a) educational contribution,
- b) economical contribution, and
- c) social contribution.

The details of these three directions I have already discussed in (II).

Enlargement, continuation or phasing-out of the programs should be carefully discussed by the group of the senior experts with the program leaders and with ordinary citizens in the region. The persons who belong to a phased-out program should be transferred to other programs.

Profits obtained by implementing the programs with success,

by patents and by any other means, should be accumulated in the center: this makes it possible to be at least partially free from direct influences of short-term politics.

(IV) Conclusion

a) A developing country will be able to build up a pyramid of industries with high technologies only through the stepwise development. The necessary steps are:

1) Establishment of a good balance between demand and supply of foods within the country or in the region.

2) Fostering agro-industries and industries for processing natural products to meet and to enlarge the domestic and regional markets.

3) Finding and building up a few column industries with some advanced technologies. The column industries common to all developing countries are energy, water and civil engineering industries. The column industries should have educational, economical and social contributions to the country and the region.

4) Based on results, experience and capital accumulated through the 3 steps, the nation can plan to build up a pyramid system of industries with advanced technologies to enlarge the domestic and regional markets and to meet the world-wide demands. The pyramid should be built up and be operated not only for further economical development but also for giving educational and social contributions to the country and the region.

b) Cooperation among neighboring countries is important at each step. In Asia, setting-up of three or four sub-groups (or regional groups) of nations is necessary for actual promotion of cooperation programs; and the Asean group is certainly one. A regional market based on the spirit of regional cooperation and opened in a most favored way for each member country will foster the young industries just born in the region and will protect

them against the overwhelming pressure coming from the very advanced countries in the world.

c) Regional centers are the key for regional cooperation. Each region should have at least one regional center, a pure scientific and technological organization free from any direct influence of politics. Considering the column industries of each member country, the regional center will implement a few programs to support them, and on the other hand the center will have own program to build up a total system for development of the region as a whole. At the start the regional center need not be in full scale. The research institutes and universities of each member country can receive some funds from the center to work partially and temporarily as a cooperator of the center.

d) Through scientific and technological cooperation, mutual understanding and respect are fostered among the experts, which will be after all a strong incentive to overcome the long-lasting political controversy and conflict.

e) True development has its basis above all in the spirit of self-reliance fostered through steady implementation of each of the steps of development. True development can be realized only by the building-up of regional infrastructure for self-development; the most essential factors for the self-development are human capability, science and technology, capital and market, and the peace in the country, in the region and in the world.

アジアにおける科学・技術協力の原則

垣 花 秀 武

発展途上国が正しく発展するためには科学・技術・経済の、1) 段階的発展、2) 地域内にある国々への協力が必要である。健全な農業、天然物加工工業を基礎として、エネルギー、水理・水道、土木などの基幹技術をうちたて、国、地域の市場を拡大することによって、はじめて真の発展を実現することが出来る。

得られた利益は、1) 教育システムの充実、2) 経済の一層の発展、3) 社会の安定、活性、福祉に分配し、発展の次の段階にそなえねばならない。

科学・技術の地域センターをもつことは、地域内の国々への専門家達に有効な協力、公正な競争（科学・技術発展の最重要な2要因）を教え、相互に理解し、相互に尊重する専門家集団を生みだし、やがて、国々への間の相互理解、相互尊重の要因となる。

真の発展のためには、地域内の、1) 人間の能力、2) 科学・技術、3) 資本と市場を段階的に発展させ、4) 国、地域、世界の平和を守りぬくことが最重要である。

（筆者は上智大学社会正義研究所員、理工学部化学科教授）

Work in the Modern World*

—Towards a Theology of Work

Keizō Yamada**

Introduction

The late twentieth century is a time of traumatic transformation of our civilization. The two modern ideologies, industrial capitalism and scientific socialism, are now clearly threatening our ecological, social and spiritual life. To counter these threats and heal the damage already wrought, a new form of civilization not only is needed but, as many thoughtful people believe and hope, is already in the making. We call this new form of civilization “post-modern.” A key theme in the emergence of this healing post-modern civilization is the *meaning of work*. Modern civilization has been degrading work, organizing it more and more for the destruction of life. A fundamental task for post-modern civilization is to recover the religious meaning of work as the expression of human creativity.

So a theology of work takes on great importance. It should be a leading guide for Christians in the midst of this crisis of civilization.

I. The Modern Degradation of work

1. The root metaphor of our present civilization—the machine.
The crisis of late modern civilization is that it is effecting the

* This article was presented at the Forth Plenary Assembly of the FABC (Federation of Asian Bishops' Conferences) (September 16~25, 1986, Tokyo).

** Keizō Yamada is Assistant Professor of Economics, Sophia, University.

destruction of life's creative holistic communion. The reason for this destruction is found at the root of modern culture. The root metaphor of our present civilization is the machine or mechanization. This root metaphor tends to shape people's ecological, social and spiritual experience according to its image.¹⁾

The modern understanding of science until very recently saw all reality as something to be measured, weighed, separated into its distinct parts of a machine. This mechanistic vision comes to us from the foundational thinkers of the modern world, especially René Descartes in Philosophy, Isaac Newton in Physics and Charles Darwin in Biology.

Within this modern vision, work becomes the construction of a great machine intended to produce progress and freedom. Our work is organized according to the criteria of the mechanistic vision. The resulting social machines envelop more and more of our life. But while mechanistic civilization grows, a paradoxical thing happens.

As the social machines become powerful, life is threatened. Our ecological foundations are undermined. Social community erodes. And spiritual meaning is converted into hollow secularism. Ultimately we are threatened with destruction—slowly from the ecological crisis or rapidly from nuclear holocaust.

2. Effects of this mechanization

We now live in a world of great social machines—massive multinational corporations, giant government bureaucracies, and ever more centralized churches, trade unions, and so on. But fundamental contradictions call into a question about the stated purpose of these social institutions.

Corporations often turn workers, including white collar workers and even managers, into cogs for their economic machine. Human needs and dignity do not seem to count much. They become tools for the maximization of profit. When these tools are viewed as

“unprofitable,” they are abandoned. All over the world governments spend more and more money on arms for national security. Some even “govern” by repression and torture, in the name of the national security. But the humanity and the earth became desperately insecure.

In the midst of all these institutions, people feel powerless. They feel like minor parts of a giant machine. In effect, the machine built by their work now controls them.

One way in which the modern social machine destroys life is by making people work so much — not only in their jobs, but even when they are consuming. We call this a “rat-race.” There is no time to enjoy life. We are always in the run. Our work and our possessions consume us. As a result, there is little room in life to help marriages grow, to bring children into the world, to care for the elderly, to build up the local community. Everything becomes work, but a work that extinguishes life.

Thus modern work crushes life by depriving the rest. Without its basic rhythm work becomes slavery instead of creation. Rest is essential to the purpose of work — ecologically, socially and spiritually. It keeps nature fruitful, prevents humans from being slaves, and taps into divine energy. Without rest there is no room for new life. That is why our rat-race civilization crushes the life of unborn, poisons the earth, and now threatens to blow the world up. Unless balanced and renewed by rest, constant work only brings death.

3. The priority — Not of Person, but of Capital.

While some work too much, others are not allowed to work at all. — i. e. “unemployed.” The other side [of the rat-race is the pit of unemployment. The curse of unemployment is a fundamental assault on human dignity. It denies for the jobless the image of God the creator. It refuses to fire them a social place to exercise their co-creativity with God. Unemployment should be a great

moral concern for Christians.

In his encyclical "Laborem Exercens," Pope John Paul II calls this degradation of work by a mechanistic civilization the inversion of the priority of labor. He means that work should be a process consciously and creatively shaped by the workers themselves. But modern materialistic ideologies have reduced workers to instruments of production. Sometimes they are "paid off" by being enabled to participate in excessive consumption. Other times they are abandoned entirely — i. e. unemployed. In both cases their divinely rooted creativity is denied.

Our modern ideology of capitalism only makes workers tools of the "free market." Workers are seen as commodities, whose labor is to be bought like raw materials or energy. When a lot of labor is needed, the free market buys a lot. When a lot is no longer needed, the free market makes them go into unemployment. If there are many extra workers, labor can be bought at a cheap price, no matter what the workers need.

The above pattern is considered the scientific law of the free market. It is given the same indisputable, absolute character in modern times that the divine right of kings had in the Middle Ages.

Marxism rebelled against this domination of labor by capital through the free market. But when Marxism tried to restore the priority of labor — that is, the participation and creativity of workers — it largely failed. Because it only built up the priority of the state. Rejecting the free market, it elevated the state as the organizing principle of the economy. The workers were still reduced to tools of production. Capital still dominated labor. The domination of labor only shifted from the private sector to the public sector.

The kind of society we built out of the mechanistic model under the principles of either capitalism or Marxism militates

against human community. We see the effects every day in the epidemic break-up of family, in mass technological abortion, in the decline of neighborhoods into lonely isolation, and in our deepened alienation from nature.

What kind of work is it that makes human beings into manipulated objects, reduces them to temporary tools for profit or power, isolates them one another by competition and fear, and uproots us all from the natural world? It is a degraded expression of human work.

All of these worries climax in the great concern over the fate of the earth itself. As pope John Paul II constantly points out in his speeches and writings, life on earth is now threatened with extinction. We face the risk of ecological suicide through slow contamination of the subsystems of air, earth, and water, or through rapid holocaust by nuclear wars. This risk of destruction comes not from nature, but precisely from the modern form of human work.

II. Works as Co-creation

1. Distorted and reductionistic interpretations of work.

Religious versus secular work; this distortion causes us to consider that only the works done by priests, sisters or brothers are religious. Religious work is limited to the work done in "religious" institutions. Other work places are called "secular."

Often we refer to people who do these "religious" works as having "vocations" from God, as if other forms of work were not vocation from God. Thus when we use the language of "praying for vocations," meaning these "religious" vocations, we fall into the trap of this first distortion of work.

A second distortion sees work as a distraction from spirituality. In this view, work is necessary because of our bodily or "earthly" nature. We have to work, but it would be better if we didn't. If

we didn't, we could be busy with "heavenly" things. Here prayer and spirituality begin only when work ends. By setting up such a radical separation between work and prayer, we say that religious meaning is found only outside of our work in the world. Work becomes part of our exile, our vale of tears.

In this distortion, work gains status to the degree that it is removed from the material world. Thus, jobs that get our hands dirty or require physical labor are seen as inferior to jobs that keep our hands clean and require only mental labor. Mental labor becomes more "heavenly," while manual labor remains "earthly." Our educational system reinforces this dichotomy. A more intense version of this distortion is to see work simply as a curse for original sin.

In this distortion work is simply the activity by which we earn money in order to buy consumer goods. This can lead to the "rat-race" of consumerism, which becomes a false religion.

To heal the destructive effects of both the classical, spiritual degradation of work and its modern secularization, we need to recover the religious depth of work itself.

2. The spiritual meaning of work

As creation-centered spiritual writers like Mathew Fox and Thomas Berry have reminded us, the starting point for spirituality is the affirmation of creation.²⁾ Creation is the fundamental doctrine of theology. Without creation there is nothing to theologize about. It is in this context of continuing creation that we need to understand the spiritual meaning of human work.

It should be clear that all authentic work is profoundly religious, even if we are not conscious of the fact. Work is meant to be the cultural way in which we reveal God's actively creative love. Work is meant to be the cultural place where we come together with the Creator to continue the process of creation.

How absurd then to suggest that only certain works are reli-

gious, that work is a distraction from knowing God. Or that work is a curse from sin, or that work is only a means for buying things. Such religious and secular distortions of work ultimately deny the religious significance of creation.

Work is meant to be a fundamental religious act. It is a basic source of dynamic unity with the Creator.

But all work is not so clearly our participation in the divine creativity of the universe. The creativity of work may be blocked by structures that disfigure its meaning. Thus work may be reduced to oppression by slave labor, or work may be denied entirely to people through unemployment. So it becomes necessary to distinguish between authentic — *holy* work and degraded — *evil* work.

3. Holy work and evil work

Holy work opens the work process to the creativity of the human species, of the rest of the universe, and ultimately of the divine Creator. By contrast evil work blocks all the interrelated sources of creativity. When this threefold creativity of work — i. e. human, ecological and divine is blocked, work becomes destructive. Destructive work is anticreative.

Of course, evil work may not be the fault of the actual workers who perform the work. It may not be their fault if a work situation stifles human creativity, injures the natural ecology and shuts out the image of the divine Mystery. Such workers may be the victims of evil work, rather than the cause. The work may be imposed on them by a larger institution, much as slavery was imposed on slaves against their will.

Three criteria flow from the three dimensions that constitute work — i. e. human, ecological and Divine.

One way in which institutional structures repress participation is becoming too large and centralized. Participation becomes feasible only to the degree that the institutions of work reorganized

smaller — scale units.³⁾

Just as much contemporary work treats workers as objects to be controlled, so too it often treats the earth as an object to be plundered. The end result is an ecological crisis. Work becomes evil when it treats the earth as something to be manipulated and used with no respect for its interval value.⁴⁾

The final criterion for holy work is that it should be self-consciously religious. To the degree that we consider most work secular, we deny its religious depth and block its creative energy.

How often do we hear in sermons on Sunday that the liturgy is the celebration of the religious depth of our work during the week? Many church ministers consider it important to visit the homes of their fellow Christians, but how many have ever tried to visit their work places?

These criteria — conscious participation, ecological wholeness, and religious celebration — are three of the norms by which we distinguish structures of holy work from structures of evil work. The healing transformation of the blockages requires a spirituality that understands the religious depth of all work as our participation with the rest of the universe in God's creative love.

III. Toward a holy economy.

1. The exploitation and fragmentation of labor.

The work process was scarred by fundamental and antagonistic divisions based on sexes, classes, races, and geography. These divisions caused many oppressions that came to mark human labor — the patriarchal domination of men over women; the class domination of masters over slaves, lords over serfs, and capital over labor; the racial domination of lighter-skinned peoples over darker-skinned peoples; and the geographic domination of colonizing centers over colonized peripheries. Further, the work process was increasingly polarized so that human community began to erode,

especially in the modern context.

The another violence was the alienation from nature. — i. e. The humanity tried to break its organic ties with wider ecology.

2. The Post-modern recovery of holism.

Post-modern culture is based on an intensified network of communications and transportation. The creative challenge for the post-modern world of work is to direct control of information toward nonviolence and the healing of the wounds caused by the three fold violence of the post stages of human culture.

The challenge is (1) to reintegrate human work within the ecological rhythm: (2) to recover the priority and solidarity of labor; (3) to rediscover the profound spiritual meaning of work.

(1) In his encyclical "Laborem Exercens", Pope John Paul II effectively places the liberating and creative interpretation of human work at the core of his social teaching.

(2) The two modern ideologies, capitalism and socialism, both liberated and degraded human labor.

(3) A mediative introduction to the new cosmology and the excellent sketches of the post-modern fusion of the scientific and spiritual traditions, and a scientific introduction to the new physics are found in following books: Brian Swimme, *The Universe is a green Dragon: a cosmic Creation Story* (Santa Fe: NM: Bear & Co., 1984). Fritjof Capra, *The turning Point: Science, Society, and the Rising Culture* (N. Y.: Simon & Schuster, 1982).

Now we'll elaborate the second point. Capitalism proved incredibly able in organizing labor for higher productivity and in unleashing the modern technological imagination, but it degraded labor by viewing it only as an objective factor of production, to be hired and fired like so much merchandise, the value of which rose and fell according to the law of supply and demand. Capitalism failed to recognize fully the subjective meaning of labor, what Pope John Paul II calls its "priority and solidarity" — Meaning

that all labor workers are the subjective source of creativity in work. Capitalism only honored this subjective dimension for the entrepreneurial and managerial classes.

By contrast, socialism stressed the subjective dimension of labor — namely, that it is the workers who create the economy. Hence it mounted a program to challenge capitalism's doctrine of workers' control — i. e. socialism's version of the priority and solidarity of labor. But socialism mediated workers' control and solidarity exclusively through a centralized scientific state, which simply repeated the anti-communal models of industrialization in capitalism, left the workers with a new form of social domination i. e. the state, and stifled creative imagination in all realm, including technological innovation.

Thus both modern capitalism and socialism, despite their contributions, cannot provide the social vision for a post-modern holy or holistic economy. Rather we need to create some new way of imagining the social structure of the work process. We believe this way is coming to us from two key sources — one is the movement called "Economic democracy," the other the movement called "appropriate (or alternative) technology."

Economic democracy means to pioneer new forms of worker participation, from the most extensive form of a renewal of the cooperative movement to lesser forms of worker cooperation in mixed or privately held enterprises.⁵⁾

Appropriate technology refers to technology that is consciously and artistically shaped to promote cooperation among workers and cooperation between all people and nature. Technology can be shaped in any number of ways, depending on the values that are brought to it. Much of modern technology is aimed at supporting the concentration of power in large transnational corporation or state bureaucracies, as well as at the mass control of workers and citizens.

We need to learn how to shape technology in service of the priority and solidarity of labor. This means first of all using technology in service of labor and not the reverse. It also means developing small-scale technology that workers can own and control, at least as a cooperative.⁶⁾

3. The importance of Unions.

In late modern industrial society a prejudice against trade unions has been increasing. This is true in both capitalist and communist societies, as we now see a worldwide attack on labor, one which crosses ideological boundaries. However Catholic social teaching has consistently upheld the right and importance of workers' organizing into unions. In his encyclical "On Human Labor," Pope John Paul II calls unions an "in-dispensable" element of modern industrial life. Why does this Catholic stress the importance of unions?

From the viewpoint of contemporary Catholic social thought, where workers do not themselves own the means of production, unions are necessary in order that workers may have some decisionmaking power within the work process. Prior to the period of industrial capitalism, when the production process was simpler, many workers were self-employed. But the industrial revolution stripped many workers of the ownership of the means of production. Hence a new institution was needed for their defence, as well as to enable them in some measure to participate in the decision-making process concerning their work. Thus the emergence of modern unions.

The Catholic affirmation of unions is rooted in the theological affirmation that workers are not simply instruments of the production process to be hired and fired according to the laws of the market, nor simply to be scientifically managed without participation based on the power of their own organization. Rather, they are to make their voices felt in shaping the funda-

mental design of the work process. In an industrial system, where capital is largely controlled from outside the workplace, be it by corporations or by the state, workers need such organizational strength to realize the religious depth of their work.

Pastorally this would mean that the Christian Community cannot be neutral on the principle of the rights of labor, any more than on the rights of the poor, the handicapped, the unborn, or anyone else.

Of course this does not mean that we need endorse every policy of every union, but that we are called to defend the foundational rights of these organizations. Support of workers' organizations in turn needs to be built into pastoral strategy, liturgical celebration and preaching.

Notes

- 1) Cf. Gibson Winter, *Liberating Creation: Foundations of Religious social Ethics*. (N. Y.: Crossroads, 1981). This paper owes to the cooperation of Joe Holland (Center of Concern, Washington D. C.).
- 2) Cf. Mathew Fox, *Original blessing: A primer in creation Spirituality* (Santa Fe, NM: Bear and Co., 1983).
- 3) Cf. E. F. Schumacher, *Small is beautiful: Economics as if people mattered* (N. Y.: Harper & Row, 1973).
- 4) Cf. Cerolyn Merchant, *The death of nature: Women, ecology and the Scientific Revolution* (N. Y.: Harper & Row, 1980).
- 5) Cf. Martin Carnoy and Derek Shearer, *Economic democracy: The Challenge of the Eighties* (Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe, 1980).
- 6) Cf. E. F. Schumacher, *Good Work* (N. Y.: Harper & Row, 1980) and George McRobie, *Small is possible* (N. Y.: Harper & Row, 1981).

現代世界における労働

——労働の神学をめざして——

山 田 経 三

1986年9月16～25日、東京カトリック神学院で、司教ら144名参加のアジア司教協議会連盟（FABC）総会「信徒の召命と使命」が開催された。この研修会の一部門「労働問題」のポジション・ペーパーの依頼を司教団より受け、それにこたえたのがこの小論である。

その内容は次のとおりである。

I 労働の現代的墮落

1. 現代文明の比喩——機械
2. 機械化の結果
3. 人間に対する資本の優位

II 共同創造としての労働

1. 労働のゆがめられた解釈
2. 労働の霊的意味
3. 聖なる労働と邪悪な労働

III 聖なる経済をめざして

1. 労働の搾取と分裂
2. 全体論の再発見
3. 労働組合の重要性

（筆者は上智大学社会正義研究所員，経済学部経営学科助教授）

<特別寄稿>

フィリピン民衆の選択*
——フィリピン二月革命とアキノ新政権——

ホアキン・G・ベルナス
(フィリピン，アテネオ・デ・マニラ大学学長)

はじめに

今日ここに皆さんと一緒にいることは、私にとってうれしいことで、光栄なことでございます。先ほどマタイス神父も指摘されたように私は非常に疲れてますけれども、皆さんの顔をこうやって拝見して、非常にリフレッシュされた気分になります。

私達フィリピン人は今、世界中の注目の的になっているようで、例えばニューヨークとかスペインでもいろんな人が、「私はフィリピン人である」という黄色いTシャツを着ている風景が見られます。

それはなぜかと申しますと、フィリピンでは最近ご存知のように、人間の歴史、世界の歴史において非常にユニークな出来事がありました。それは私達が革命を起こしたことでしたが、その革命においては市民の方が軍人を守ったというような逆の革命でありました。この革命にも同じように戦いもあったわけですが、非武装の市民達が武装した軍人と戦い、それはロザリオ、あるいは花、歌、スマイル、そして市民達が軍人達に差し出したサンドイッチのようなものを武器としての戦いでした。

* 本稿は、1986年5月2日，上智大学社会正義研究所主催の講演会での講演内容である。

大統領選挙の経緯

私達がこういう状況に至ったということも、私はそれを非常に不思議な思いで見えております。なぜならば、3ヶ月ほど前まで、私はコラソン・アキノ現大統領と一緒にキャンペーンとかいろいろな市民運動に関わっておりましたけれども、その時には私達は非常に多くの問題に直面していて、こういうところにこんなにはやく至るということはその時には夢にも思っていなかったということです。

ご存知のように今年（1986年）の2月7日にフィリピンでは大統領選挙が行われました。その時、私達はちょうどその選挙に挑んだわけですが、その選挙の立候補の締切までは私達は誰が立候補するのか知りませんでした。そしてその時にフィリピンの人びとは結局は、20年間大統領を務めてきたマルコス大統領に挑戦する唯一の人物となるのは、殺されたベニグノ・アキノ上院議員の未亡人であるコラソン・アキノのほかにはないと決めたわけです。そしてそのキャンペーンの中で私達は一つの確信に至りました。それはこの選挙が本当に公正で正当な選挙として行われるならば、コラソン・アキノ夫人がマルコス大統領に勝つという希望といえますか、そういう可能性が大いに見えはじめたわけです。長い話を省略して申し上げますと、その選挙は決して公正なものではなく、むしろ不正に満ちた、そしてマルコス側からの暴力を使った選挙でした。そしてご存知のように2月15日、フィリピンの国民議会はマルコス大統領を勝利者として宣言した、という段階に至ったわけです。

選挙後の運動

そこで私達反対側にいる人びとは一つの選択に迫られました。それは国民議会の宣言に従順に従うか、それとも戦いを続けるか、という選択でありました。そして私達は戦いを続ける決心をしたのです。

コラソン・アキノ夫人個人は非暴力主義の支持者ですので、私達がその戦いを続けるということは非暴力的な戦いでなければならないということでした。そういう意味で私達は、経済的な、そしてマス・メディアに対するボイコットを打ち出すことにいたしました。数十万人の人びとの前でコラソン・アキノ大統領候補は、その経済的なボイコットの計画を明らかにしました。それは主としてマルコス側近の人びとの握っている銀行に対するボイコット、そしてそこからさらにマルコス側近によって支配されるあらゆる企業のボイコットです。その中で最も中心になっていたのは、サン・ミゲルという会社でした。これは私達フィリピン人にとって非常にむずかしいことであつたと言わなければなりません。なぜならばフィリピン人にとって、ビールを飲まないということは非常にむずかしいことだからです。そこで私達は、幸いにもフィリピンにはサン・ミゲルとアジアビールという二つのビール会社がありまして、その一方だけをボイコットすることにいたしました。なぜならば両方ともボイコットしてしまったならば、そのボイコット運動全体が成功しないという可能性もあったからです。そして結果としては、サン・ミゲル・ビールの売上げは非常に暴落してしまい、会社側は恐れてこれに対して大きな宣伝キャンペーンを行いました。もちろんすべてのフィリピン人はこのボイコットがはやく終わるように祈っていました。なぜならばみんなビールを飲みたかったからです。それでそのフィリピン人の祈りが、2月22日にかないました。それは、エンリレ国防相とラモス将軍がマルコス大統領に対して彼らがもう従順でいられないと、決起したからです。

二月革命

私達にとっての最初のその決起への反応は、これは軍人同志のことですから私達は市民として関わらないことにしよう、という決断でした。その時エンリレ国防相とラモス将軍の部隊というのは、クラメ基地の一部で数

十人の兵士が守っていたような小さな部隊であったわけで、マルコス大統領がその時彼らを潰そうと決めたならば、すぐにでも、簡単にそれができたはずだったのでした。

しかしながら、その22日の午後10時、シン枢機卿がラジオ・ヴェリタスの放送を通じて、人びとに一つの訴えをしました。それは、「皆さん、私達の友人であるエンリレ国防相とラモス将軍がマルコスの軍隊によって殺されるような危険性にさらされています。彼らを助けようではありませんか」というものでした。エンリレ国防相はアギナルド基地を、そしてラモス将軍はクラメ基地を支配していて、その間にエピフィアニョ・デ・ロス・サントス (Epifanio de los Santos) という大きな道路が通じていました。その夜10時にシン枢機卿が人びとへアピールをして、その同じ日の11時にはもうその道路が市民達によって満たされたわけです。

そこでマルコス軍はいろいろな方面から迫ろうとしたわけで、実際には既に戦車や装甲車が出動していて攻撃しようとしたわけですが、しかし、マルコス軍が行こうとしたところに、人びともそれ以前に行ったという現象だったのです。つまり戦車とか、武装した車などが動きだそうとした時に、人びとはただその前に横たわっただけだったのです。そして特にシスター達や司祭、あるいは神学生、一般市民のみんなが、武装した軍人達に対してただ、「ピース (平和), ピース」ということだけを言い続けたのでした。これは土曜日の夜に起こったことでしたが、それから引き続いて日曜日1日、そして最も大きな出来事は月曜日の朝に起こりました。

これにはヴィリャモール (Villamor) 基地の第15攻撃部隊が非常に大きな役割を果たしました。この第15攻撃部隊はアギナルド基地とクラメ基地の両方を朝6時に攻撃するようという命令を受けていました。従って彼らはそういう「飛びたつ」という口実を完全に持っていたというわけです。ただしその第15攻撃部隊の司令官であるソペロ大尉はもはやその決起したグループ、ラモス将軍の側に入ることを承諾したということ、マルコス

大統領は全く知らなかったわけです。そこでその月曜日の朝6時、私は何人かの友人と一緒にいまして、まわりはもう既に人びとでいっぱいだったわけですが、マルコス軍が催涙弾を使い、上空から飛行機で人びとを攻撃するだろうというわさが人びとの間で流れはじめました。そして朝6時には私達は催涙弾が投げかけられるという予想をして、ぬれたハンカチやタオルを用意していましたが、そこへヘリコプターがやってきたのでした。ヘリは上空を1回旋回してそれから白旗とピースとLサインを出して、また1回旋回してからクラメ基地の方へ降りました。降りてきた軍人とそこにいた人びとはみんな抱きあい、そして多くの人が、泣いたり叫んだりしはじめました。なぜなら、私達はもう攻撃を受けるという覚悟でいたところへ、結局は軍人達が私達の側についたからです。これは大きな転換点でした。それは月曜日の朝のことでしたが、その時から実際にマルコス政権が崩壊したと言えます。

翌日、2月25日の火曜、朝10時に、コラソン・アキノ夫人が大統領として就任式をあげたということは皆さんご存知でしょうけれども、同じ日の正午にマルコス大統領はまだマラカニアン宮殿にいて大統領就任式を行いました。従って、フィリピンの歴史において非常に珍しいことが起こったわけで、フィリピンには短い期間でしたが、二人の大統領が同時に存在していたのでした。しかし同じ火曜日の夜、マルコスとその一族はマラカニアン宮殿を飛びたって、クラーク・アメリカ空軍基地に向かいました。これについては一つの小ばなしがあります。フィリピンのルソン島北部に第二のマラカニアンと呼ばれている大統領官邸があります。この地域はパワイというところなのですが、それでマルコス大統領がアメリカの軍人からこれからハワイに行くということを言われたのをパワイに行くというのと聞き違えて、それで承諾してしまったのだ、というものです。このようにして革命は結末を迎え、それでコラソン・アキノ大統領が新しい政権をつくろうという段階に至ったわけです。

アキノ政権の正当性

ここで最初に浮かびあがってきた問題は、どういう権威で、どういう法律的な基盤をもって、アキノ政権が成り立つのか、ということでした。これは非常にデリケートなことです。なぜかと申しますと、従来のフィリピン憲法では大統領選挙を行ってその勝利者を国民議会が宣言し、そして大統領が就任するというような規定がありました。そしてご存知のように選挙後国民議会は、コラソン・アキノ夫人ではなくマルコス氏を大統領に宣言したのでした。この問題——どういう権威でコラソン・アキノ夫人が大統領に就任したのか、という問題に対しては、しかし非常に簡単な答ができました。それは、コラソン・アキノ夫人はフィリピンの人びとの直接の選択を得て、現憲法に対して、あるいは現憲法を否定して、大統領に就任したという答であります。

この点は非常にデリケートで微妙なところです。皆さんもお聞きだろうと思いますが、ここでコラソン・アキノ大統領が就任式の時に語ったことに注目したいと思います。本来ならば、大統領が就任する時には、国民によって選ばれた憲法を守るというような規定があり、それを従来の就任式では新大統領が誓うのでありましたが、コラソン・アキノ大統領の就任式に彼女が発言として選んだ言葉は、この国の基本法(Fundamental Law)を守る、というものでした。そこで、その基本法とは何か、というある人の質問に対して彼女はこういう答を出しました。その答は彼女自身が最初に言ったというよりも、クラウディオ・ティーハンキーという現在フィリピン最高裁の主任となった判事の答でもありますけれども、それは、この基本法とは正義と自由に基づいた法である、ということでもあります。しかしこの答——正義と自由という基本法ということは、残念ながら弁護士達とか法律好きの人達には充分ではないということで、3月25日にそれを拡大して、その基本的な規定を出した大統領令第3号が宣言されたわけです。

それは今のフィリピンの暫定憲法に相当するものであり、これが今のフィリピンの基本法となっております。

この基本法の具体的な規定とはどういうものかと申しますと、次の四つの点に分けることができます。第1に、法律を規定するという権限は、もはや国民議会ではなく大統領だけに与えられました。そこで彼女自身が絶対的な独裁者になるという危険性を防ぐために、第2の規定として、その大統領の権限はまず人権法によって制限される、ということを決めたわけです。それは旧憲法と同じ人権法の規定であるはずですが。しかし人権法を執行するという機関がなければそれも無用になるということです。第3の規定として、大統領から独立した裁判機関を置いた、ということです。しかしあたり前のことですが、こういう状態は誰もが認めるように「非常事態」であるわけで、そういう「非常事態」において結局は暫定憲法をたてているのに過ぎないわけですから、第4の規定として、1年以内に新しい憲法をつくる、というような規定もその中に含まれたわけです。

アキノ政権の課題

そこでこれは暫定政権の二つの目的とされるわけですが、第1には、今までの政府の機関の改革を行うということです。そして第2には、平常の憲法に基づいた政権に移るという目的を持っております。そこでこの政府機関を改革する、変革するということは非常に大きな課題ですので、その権限を支えるために第5のポイントとして、大統領令第3号の暫定憲法の第5の規定として、あらゆる政府の高官、政府の役人を解雇し、そして1987年2月25日までにそうしたポストに別の人を任命するという権限を彼女に与えられたということです。そこで先ほど申し上げましたように、この二つが現政権の目的であると理解することができます。そしてこの二つの規定というのは、その手段、その目的に達するための道でもあります。

今のところみんなが待望しているのはこの第4の新しい憲法であります。

なぜかと申しますとこのこれからつくられる新しい憲法が、これからのフィリピンに新しい基盤を与えるものであるからです。これからのフィリピンはこの新しい憲法に基づいて成り立つということだからです。私達が今どういう段階に至っているのかと申しますと、まず6月2日に新憲法委員会が成立する予定になっております。この委員会は50人のメンバーによって構成される見込みです。予定といたしましては、何か非常な事態によって彼らの仕事が遅れるという場合を除いては、9月2日に彼らの仕事が完成する予定です。そしてその憲法の骨組みが60日以内に人びとに承認されるかどうかという国民投票に出される予定であります。従って私達が希望しているのは、今年（1986年）の11月までには新憲法を成立し、そしてまた11月の半ば頃には選挙を行うということです。そこで元のパターンに戻ることになるのではないかと思います。

アキノ政権の今後

以上説明しましたようなところが私達の現在の段階でありまして、私達はこのような暫定憲法の下に政権を営んでおります。それでこの暫定憲法の中味を見ますと、現在コラソン・アキノ大統領はマルコス大統領よりも非常に大きな権限を持っているということがわかります。そこで人びとは、独裁者マルコスと同じように彼女も独裁者になり得るのか、と尋ねます。それに対する私の返事は、「まだです」ということです。そこでこの「まだ」ということを本当に言うことができるためには、私達は新しい憲法づくりを急がなければならないわけです。よく言われることで、権力は人びとを腐敗させる、ということがありますが、彼女自身が腐敗するというとはなくても彼女のまわりにおいて今、彼女の下で多くの権限を発揮しているその人びとが腐敗するような危険性はないとは言えません。そこで人びとは、独裁者マルコスより大きな権限を持っているコラソン・アキノ大統領の、マルコス独裁政権との違いは何なのか、と尋ねるのです。その第1

の答はまず、「時間」ということです。腐敗するというのは時間がかかることであり、マルコス大統領が腐敗するという段階も20年間かかっているわけですが、彼女自身はまだまだ大統領になってから3ヶ月にしかならないということで、そういう意味でまだ腐敗する時期にはなっていないと言えると思います。しかし、第2の点として、最も大事な違いはその動機ということです。その自由と言いますか、それはマルコス大統領が1972年に戒厳令を布告した時に、言い換えればそういう絶対権限を自分に与えた時に、口実として発言したのはある人びとの決起、革命を潰そう、というものでした。ところがコラソン・アキノ大統領が現在政権をつくろうとし、そしてそういう形で自分に大きな権限を与えたというのは、マルコス独裁政権の下で奴隷化された人びとを解放するためであり、そういう動機から彼女は非常宣言を発令する権限を自分に与えたのであります。そして第3の違いというのは、コラソン・アキノ大統領は一つの反省事項と言いますか、一つの教訓を常に自覚しています。それはマルコス独裁政権の下で彼女自身が犠牲をはらった一人であって、その犠牲者であるという経験を彼女が常に持っていて、それが一つの反省事項となって彼女を支えているのです。これはマルコス大統領が1972年に戒厳令を布告した時に、全然そういう反省点がなかったのと、大きな違いであります。そして最後に最も大切な違いと私が見るのは、今フィリピンの市民が非常に高い政治的な意識に至ったということがあります。1972年にマルコス大統領が戒厳令を布告した時に、一部の学生達はそういう高い政治的意識を持っていましたが、大体の国民はそこまで至っていませんでしたが、今では、中流の人びと、あるいは上流の人びとさえそういう高い政治的意識を持つようになった、という違いがあります。そこでもう一つの違いとなるのは、軍隊も、マルコス政権の時にはなかったような能力、つまり、「なぜ」と問いかけるような能力を持つようになったということです。それはマルコス大統領の時にはただ上からの命令を鵜呑みにして執行するというだけだったわけ

ですが、今では軍隊自体が「なぜ、何のために自分達は、あるいは指導者はこんなことをするのか」という問いかけを、自分で行える能力を持つようになったということなのです。

以上で私達がどういう状況にあるかということをご説明したわけですが、私達は経済的にも政治的にも困難な問題を多く抱えており、そのためにも、こういう非常事態を長びかせることがないように、はやいうちに新しい憲法をつくるという課題に取り組んでいるわけです。そういう私達にとって一つの誘惑は、コラソン・アキノ政権に対して忍耐を切らしてしまうというような誘惑が時々私達に襲ってくるということです。しかしコラソン・アキノ大統領に対して私達はもっと特別な時間を与える必要があると、みんな理解しております。なぜならば、普通の状態であるならば選挙が終わって3ヶ月ぐらいの間、就任するまでの準備を新大統領に与えるわけですが、コラソン・アキノ大統領にはそういう期間は全くなかったということは、皆さんご存知のとおりであります。従ってコラソン・アキノ大統領が置かれた状態は、そういう政権の任務を担うと同時に、彼女はまたその政権の基盤自体をつくらなければならないという非常に複雑な状態に直面したわけです。またもう一つのポイントは、彼女は全くこういう政治的なことに経験がないということです。つまり彼女は今、政権をつくる作業と同時にどのように政治をやっていくのかということを学んでいるのです。従って彼女は今、非常に忍耐強いフィリピン国民からの支持を必要としております。またそれはフィリピン国民だけでなく、自由世界のすべての人びとからの支持もまた必要としております。従って私達が日本の皆さんから、コラソン・アキノ大統領に対するそういう温かい支持と眼差しをいただいているということは、私達にとって非常にうれしいことであります。

以上が、フィリピンはどのような状況にあるのかという問いに対する、一つの非常に簡単な形で鳥瞰図でございます。これでいったん私の話は終わりにして、あとは皆さんからのいろいろなご質問に答えることができ

ば、とても幸いに存じます。どうもありがとうございました。

(通訳者からの補足説明)

先ほどのベルナス神父の話の中に、現在のフィリピンの暫定憲法というものがありました。これはフィリピンでは公なことでございますが、この憲法はあるところでは、ベルナス憲法と呼ばれることもあります。なぜならば、ここにいらっしゃるご本人が、ご自分のコンピューターの中から出してつくったと言われているからです。ちょっとした裏話ですが、ぜひとも申し上げたかったので……。

質疑応答

Q：共産主義者達はこの度のフィリピン革命においてどのような役割を果たしたのですか。

A：共産主義者、あるいはフィリピン共産党とか、あるいは武装した革命家達は、ほとんど二月革命には役割を果たさなかったと言えます。ただし彼らと結びついている多くの市民団体、あるいはそういう彼らの影響力を受けている多くの市民運動団体が、コラソン・アキノ大統領に対して非常に支持的な活動をし、そして大きな役割を果たした、ということは忘れてはならないことです。

Q：「解放の神学」はフィリピンの中で影響力は大きいのですか。

A：「解放の神学」にはいろいろな種類がありますので一概に言うことはできませんけれども、大体においては、影響力はあるということだけは言えるのではないかと思います。フィリピンも南米の解放の神学者達の考え方の影響を受けていると言えると思います。

Q：フィリピンの経済再建のことについてですが、現在アキノ政権の大蔵大臣であるハイメ・オンピン氏は、フィリピン国民（や外国政府）の支持をどの程度受けているのでしょうか。

A：オンピン氏は、アテネオ・デ・マニラ大学の理事長でした。ですから彼が大蔵大臣に任命されたことは、彼をアテネオの理事長の席からはずさ

なければならなかったということで、アテネオにとっては非常に打撃で残念だったわけです。が、それはそれといたしまして、彼が支持を受けているかどうかという質問に対しては、イエスとノーの両方の答がございます。彼はどちらかと言いますと、伝統的な経済学の支持者であって、従って現在もっとナショナリストの、あるいはそういう市民運動に基づいた新しいフィリピンの経済計画を支持している人びとからは、批判を受けている人であります。しかし今、大体フィリピンの財界では彼は多くの人の支持を受けているということもあって、機能するにはそれで充分だと思われます。ただもちろん先ほど申しましたように、一部のそういう徹底的な変革を目指す人びとからは批判的となっております。彼はこれからのフィリピンの経済再建に非常に大きな役割を担う人物であって、決してうらやましいとは言えないような使命でありますけれども、そういう意味で彼は非常にデリケートなポストにいる人間です。

Q：アキノ大統領がたてたスケジュールは、スケジュール通りに行われているのでしょうか。

A：まず新憲法委員会のメンバーを選ぶのに、選挙ではなく大統領任命ということにしたのは、まず選挙をするにはまた新たな費用がかかり、現在のフィリピンの状態ではそれどころではない、ということです。そして第二に時間的にも選挙をしていますと正常化が遅れてしまいますので、最も安く最もはやい方法で憲法をつくるということで、大統領任命という方法を選びました。

まず新憲法委員会の50人を選ぶには、あらゆる国民、あらゆる市民団体などからの推薦を待つという段階を踏まえる予定です。それはあらゆるところからの推薦者を5月5日までに出すということで、私がフィリピンを出国した頃には、もう既に1000人ぐらいの名前が推薦されていた段階でした。そこで5月10日にその推薦された人びとの名前があらゆる新聞に報道されます。それはなぜかと申しますと、誰もが、例えばこの人に対してど

うのこうのという文句、要するにそういう人びとに対して石を投げる余裕を与えるためであります。そして5月25日までには、その最終的な選択を表明する予定になっております。そしてさらに6月2日にはその委員会が機能しはじめ、先ほど申し上げましたように11月までに仕事を終える予定です。仕事が予定通りに行くかどうかは、彼らが長い演説をするかどうかによると言えるかもしれません。というわけで、御質問に対する答としましては、今のところはまだスケジュール通りに動いております。

Q：まず「二月革命」というふうに言われますが、私達南米の人間から見ますと、「革命」と言えるかどうかは非常に疑わしく思え、その点フィリピン人の皆さんは「革命」をどのように理解しているのか、ということです。そしてもし本当の「革命」だったなら、なぜ以前民衆を抑圧した人びとがまだまだ権力側にたっているのかと、要するにエンリレ国防相とラモス将軍がまだ政権についているということは、果たして本当の「革命」が行われたと言えるのかどうか、ということです。

A：この質問に対して、まずもちろん私が申し上げたのは、二月革命は、そういう銃とか暴力をもって戦ったというような革命ではなかったということです。つまりフィリピンのいわゆる「二月革命」というのは非常にユニークな革命であったと言わなければなりません。それは、銃をもって戦ったのではなく、花とスマイルとそしてサンドイッチとロザリオをもって戦った革命であるというユニークなもので、私達はそういうふうに「革命」を行ったと言うしかないわけです。そこでエンリレとラモスが今まだいるじゃないかということに対しては、私達フィリピン人は「回心」ということを信じると申し上げたいです。彼らは以前はそういう弾圧者、抑圧者であったわけですが、そういう革命のプロセスを経て、彼らも若干民衆のためになるような存在になるんじゃないか、という「回心」を私達は彼らに期待しております。そして今のところ彼らはそういう the benefit of the doubt（疑わしい点を善意に解釈する）ということですが、

彼らのほうにそういう期待をもって、回心するようなそういう余裕を私達は彼らに与えております。

Q：米軍基地の問題について、アキノ大統領はどのような考えをお持ちなのでしょうか。

A：コラソン・アキノ大統領が今までに公に発言しているのは、これまでの米軍との契約を1991年までは尊重するということです。つまり1991年以降のことは何にも限定できない段階である、という姿勢をとっております。なぜかと申しますと、今世界中のあらゆる出来事が非常にはやいペースで動いておりまして、例えばその前の年の1990年にフィリピン国民全体が基地についての何らかの決定をするかもしれませんし、それ以前に決めるというような段階を経るかもしれません。そういうわけで、アキノ大統領は現在のような姿勢を示しているわけです。

Q：あなた（ベルナス神父）のような神父が、いつからマルコス政権を倒すというような運動に関わりはじめたのですか。

A：私自身は1972年にマルコス大統領が戒厳令を布告した時になってはじめて、そういう運動に参加したわけです。それで質問の意図を読み取りますと、なぜ、私のような神父とか宗教者が政治的な運動に関わるのか、ということをおそらく皆さんがお聞きになりたいだろうと思います。その答としましては、それは決して政治的な活動をしたいからということではなくて、むしろ私達宗教者としてしましては、正義、そして人権に関わる事柄には宗教者だからこそ関与せざるを得ない、ということです。ですから多くの神父とかシスター達が、そういう多くの人びとを弾圧する政府に対して宗教者として関わりはじめたということは、フィリピンの歴史に見られることであります。それは他の国においても同じことで、そういう歴史的な必要性の時にそれに応じて宗教者が政治的な関わりを持つというのは、それは決して政治的な関心からというだけのものではありません。むしろ、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世もいろいろところで発言しておりますよ

うに、人間の生きる権利、人間の尊厳が関わっている時に、キリスト者、特にそういう宗教者、修道者などのような人びとが、それに関わらざるをえないというのは、福音的な司牧的な関心からなのです。

Q：今度の新憲法委員会がつくる新憲法には、農地改革の規定は含まれるのでしょうか。

A：憲法自体にはそういう具体的なプログラムを入れるということにはならないだろうと予想されます。それは、旧憲法には農地改革ということが名目上入っておりましたが、それは実現されなかったし、実現しようとはしなかったからです。ところで、現在のアキノ政権の企画の中でなされようとする農地改革とはどういう原則の下でなされるかと申しますと、第1にまず、生産の能率をはかるといこと。そして第2に、その生産の収穫を最良な形で公平に分配することです。従って例えばコメとかココナツとかそれぞれその土地の生産物が違うなどのいろいろな違った状況がありますので、すべてにあてはまるような一般原則をつくろうとするよりも、結局はそれぞれのケース・バイ・ケースの中で、前述の二つの原則に基づいて農地改革を行っていけば良いのではないか、ということです。

(訳者＝ルーベン・アビト、上智大学東洋宗教研究所助教授)

People's Power and the Filipino February Revolution

Joaquin G. Bernas
(President, Ateneo de Manila University)

SUMMARY

The so-called February Revolution of 1986 in the Philippines is a unique event in the history of humankind, as it was brought about in a situation where it was the unarmed populace that protected a heavily armed military, and won them over not by weapons but by smiles, rosaries, flowers and sandwiches.

In understanding this event, one must look at the background of the so-called "snap elections" that took place on February 7, 1986, which was characterized by massive cheating, fraud, and violence on the part of Marcos advocates. The people thus saw the moral bankruptcy of the dictatorial regime of Marcos, and with the decisive leadership of the Catholic Church, became convinced of the necessity of change.

The opportunity came when a group of soldiers led by then Minister of Defence J. P. Enrile and Vice-Chief of Staff Fidel Ramos declared a break with the Marcos government. The rest is now history.

The first task of the new government of President Corazon C. Aquino was to establish the foundations of its legitimacy, and it thus went about to promulgate an interim "Freedom Constitution" pending the drafting and ratification by a plebiscite by the whole nation of a new Constitution that would replace that imposed by the Marcos dictatorship.

This Freedom Constitution had four main traits. First, it gave the President very wide-reaching legislative as well as executive powers, to give her a strong hand in the reconstruction of the nation ravaged by the economic mismanagement and exploitation wrought by the previous administration. Second, it limited these wide ranging powers of the President by a Bill of Rights. Third, it assured the enforcement of this Bill of Rights by setting up a judiciary independent of the President. And fourth, it stipulated the setting up of a new Constitution within the period of one year that would be presented to the whole populace for approval in a plebiscite.

To summarize, the one-year period between the ascendancy of the Aquino government through the Philippine February Revolution of 1986 and the ratification of the new Constitution in February 1987 was characterized by the enforcement of the Freedom Constitution as described above, which gave the rational and legal basis for the new government during that crucial interim period.

(Note by the translator : The author of this present paper, presented at a public lecture at Sophia University on May 2, 1986, is himself the chief architect of this Freedom Constitution, also called the "Bernas Constitution" in some circles, and gives a first-hand view of the behind-the-curtain discussions that went on in this crucial period of Philippine history.)

<特別寄稿>

コミュニケーション、文化、宗教*

——フィリピンの経験——

ハイメ・L・シン**

はじめに

今回のUCIP第14回大会¹⁾のテーマが「コミュニケーション、文化、宗教」となっていることは、神の摂理というか、不思議というか、そんな風に私には思われるのです。どうしてこんなことを言うのかと申しますと、このテーマは今年（1986年）2月フィリピンで起きたあの運命的な出来事にまさに当てはまるように思われるからなのです。が、このテーマは2年前に既に決まっていたそうです。

これが、私がこの大会へのご招待をお引受けしたおもな理由なのです。このため、私はローマで開かれるある重要な会議には出席を辞退しなければなりませんでした。

私はフィリピンの民衆があゝの無血革命で経験したこと²⁾をみなさんと分かち合わなければならないと思っています。この経験は、コミュニケーション、文化、そして宗教が適度に混じり合い、そしてそれらが調和するならば暴力を使わず、そして一滴の血も流さずに頑強な独裁政権を倒すという天地を揺るがすほどの結果をもたらすのだということを決定的に、しか

* 本稿は1986年10月22日インドのニューデリーで開催されたカトリック国際出版連盟第14回世界大会における枢機卿の特別講演である。

** ローマ・カトリック枢機卿、マニラ大司教。

もほとんど疑いなく証明したのであります。

このことがいかにして起こったのかを説明する前に、独裁政権が戒厳令を布告して見せかけの民主主義ですら放棄してしまってから後、フィリピンの情勢がどうだったのかをお話しましょう。

葬り去られた民主主義

一夜にして、東南アジアにおける民主主義の手本（ショーケース）として誇りを持っていた我が国は、全体主義国家になってしまったのです。一夜にして、我が国民はその尊い人権が踏みにじられ、自由が奪われたのです。何ら警告もなくアジアで最も自由だとの名声を博していたマス・メディアが閉鎖されてしまったのです。ジャーナリストたちは裁判も受けられずに投獄されてしまいました。

このようなあらゆる抑圧的手段のために、国中に恐怖が広がりました。軍部は民衆を威圧し、民衆はひそひそ声でしゃべるのがやっとでした。「息子が大きくなったら大統領にしたい」などと言おうものなら政府転覆のかどで投獄されてしまいそうでした。

しばらくして、新聞、ラジオ、テレビは再開されることになりました。けれども、それらのメディアはすべて独裁者自身や親族、そしてその仲間たちの専有物になってしまいました。新聞は政府が許可した記事しかのせることができませんでした。放送局は独裁者を都合のいいように仕立てた番組しか放送することができませんでした。

これが、11年間という長期にわたるフィリピンのマス・メディアの状況だったのです。メディアは真実を伝える手段ではなくなりました。すなわち、恥知らずな当局の宣伝媒体となってしまったのです。真実を書きたくとも、ジャーナリストにはそれが許されませんでした。

民衆の真実に対する飢え

こうした絶望的な状況で、人びとはニュースに飢えざるを得なかったのです。事実立脚し、独裁者が言いふらした見えすいたうそではない真実を伝えるニュースに飢えていたのです。真実に対する飢えは、海外からのニュース・レポートをうまく内密に持ち込まれたときにしばしばいやされました。そうしたレポートは何度も繰り返しコピーされ、極秘のうちに人から人へと渡っていったのです。コピーがみつければ危険きわまりないのですが、人びとはあえてそうした危険を冒しました。それほどまでに人びとは真実を知りたがっていたのです。

こうした困難な時期にも、勇気を持って抗議する声があったのです。それは教会でした。フィリピンの司教団³⁾は、何度も自由の喪失、拷問、不法な拘禁を非難する司牧教書を発表しました。この教書は日曜のミサで朗読され、そのメッセージは語り継がれて広がり、自由の精神を息絶えさせなかったのです。

そうした中、1981年ヨハネ・パウロ2世はフィリピン司教団の訪比招待を受理しました。このことによって、独裁政権は規制の緩和や1972年以来の戒厳令を解除しなければならなくなったのです。それは独裁者がフィリピン国民に対し従属を要求した「穏やかな戒厳令」が実はひどく残酷で抑圧的なものであることをローマ教皇に気づかせないための措置であったのです。

さらに戒厳令がしかれなかったため、新聞もラジオ局も政府の検閲を受けずに再開することができました。こうして、教会所有のラジオ・ヴェリタス⁴⁾はかつてはほとんど当たりさわりのない音楽番組や宗教番組だけを流していたのが、あえてニュース番組を報道することに踏み切ったのです。このように、反体制派のリーダーであるベニグノ・アキノが亡命先の米国から帰国に踏み切った1983年8月21日にマニラ国際空港で暗殺された

そのショッキングな事件を現場から、正確にかつ迅速に全国に報道したのがラジオ・ヴェリタスだったのです。

一方、政府系のメディアはこの暗殺事件の真相を明らかにすることなく沈黙してしまいました。しかし、ラジオ・ヴェリタスは徹底的な追求を続けました。政府からはば継続的に妨害を受けましたが、ラジオ・ヴェリタスは閉鎖の脅しが繰り返されるのを無視して放送を続けたのです。それはフィリピン国民の希望や恐れ、不満や怒りを表したものだっただけです。

私の決断・真理の声を

アキノの葬儀が行われたとき、200万人もの民衆が参列しました。しかし政府の監視を受けたメディアはこの模様について報道はしませんでした。ある新聞は、実際に落雷による事故死の方が重要であるとみなしていました。

この時点で私は決意しました。教会は独自の新聞を発行すべきだと。すなわち、どんなに独裁者を傷つけたとしても真実を伝える勇気を持った新聞を発行すべきだと。そのとき、（そして今でも）感じたのは、民衆は真実を知る権利があるということでした。私の意見に賛同し、真実のためならばその仕事を犠牲にしてもと考えてくれる数多くのカトリックの実業家たちがいました。私たちは自分たちで資金をたくわえました。

そして、1983年暮れに『ヴェリタス』というニュース雑誌が誕生しました。

『ヴェリタス』のスローガンは聖ヨハネの福音に由来するものでした。すなわち、「真理はあなたを自由にするだろう」というものでした。そして、『ヴェリタス』は創刊号からそのスローガンに従って行動しようと努力しました。その報道は恐れを知らず、しかも非常に正確でした。社説は痛烈で容赦のないものでした。

名誉毀損の訴訟やほぼ継続的な匿名の電話による脅迫、2年間で26名のジャーナリストが死亡ないし行方不明という事態にもかかわらず、『ヴェリタス』は頑張りました。そして非常によく資料に裏付けられた記事によって、独裁者の（第二次大戦の）戦歴がにせものであることを暴露したのです。また、アキノ暗殺に関与した被告全員が無罪⁵⁷になったことで、正義が踏みにじられたことを明るみに出したのです。

試練と勇気あるペン

今年2月大統領選挙が行われたとき、『ヴェリタス』は持ち前の真実に対する情熱と勇気を持って、独裁者が選挙結果を操作し、不正行為を企てたことを非常に詳細に、またできる限り写真による報道でそれを暴露しました。

いま、フィリピンの民衆は『ヴェリタス』の編集長がいかにして独裁者を批判した他のジャーナリストたちの運命と同じ運命を辿らずに済んだのかを不思議に思っています。彼自身が言うには、それは教会の保護を受けていたからだという。私は個人的には彼が生き残れたのは彼の奥さんが献身的な祈りを捧げていたからだと思います。彼女はしばらくして、彼の書いた社説は読まなくなったのですが、祈りを捧げることは決してやめなかったのです。

革命後明らかになった文書のひとつに、アメリカでは「暗殺者リスト」と呼ばれている、2月25日に抹殺されるしるしがつけられていたリストがありました。そのリストでも目立っていたのが『ヴェリタス』の編集長の名前でした。幸運にも革命が起こったのは2月22日で、逮捕はとうとう実行されなかったのです。

私はUCIPが編集長の勇気と努力で、この試練の時期にフィリピンにおける報道の自由を守り抜いたことに対し、彼を表彰すると聞いて非常に嬉しく思います。私の友人であるフェリックス・パウティスタ編集長にお

立ちいただき、盛大なる拍手を贈りたいと思います。そして奥さんのネナさんにも。どうかお立ち下さい。奥さんも表彰を受けるにふさわしい人です。

多少背景説明が長くなってしまいましたが、今度は「コミュニケーション、文化、宗教」が組み合わさり、いかにそれが独裁者を倒し、フィリピンに民主主義を復活させたのかを説明したいと思います。

教会の二つのメディア

まずはじめに、コミュニケーションについてとりあげたいと思います。1983年から1986年2月の革命に至るまで、ラジオ・ヴェリタスと、『ヴェリタス』誌はフィリピンで発生したさまざまな事件を忠実に伝える最前線の役割を果たしました。不正選挙の報道はその例と言えますが、司教団が果たした役割に関する報道はさらに模範例となりました。

司教団がいかにその不正選挙に断固とした態度をとり、いかに勇敢に、前代未聞のごまかしで独裁者が道義上統治権を失っているかを主張したのか、民衆は知ったのです。この二つの教会のメディアのおかげで、民衆は司教団のとった強固な立場は派閥争いの政治には一切関わりがないことを理解したのです。それはむしろ善の力と悪の力との闘いの中では味方となりました。だから司教団は、悪の前では中立的にはなれなかったのです。

革命が起こり、ちっぽけな反乱軍が圧倒的優勢を誇る政府軍にせん滅されそうになったとき、いやが応でも何らかの非常手段をとり反乱軍を守らなければならなかったのです。

反旗をひるがえした指導者たちは私に連絡してきてこう言いました。「あなたが助けてくれなければ、私たちは1時間以内に殺されてしまう」と。私はひざまずき、今まで経験したことがないほど一心に祈りました。私は神のお導きがあるようにと祈りました。そして、私は答えを得たのです。人びとに向かって、家から出なさい、そして反乱軍が立てこもってい

る陸軍キャンプに向かうように呼びかけるのだ、大多数の民衆だけにしか前進してくる戦車を止めることはできないのだ、と思ったのです。

だから、革命の最初の晩、私はラジオ・ヴェリタスで繰り返し呼びかけたのです。「包囲された兄弟たちを助けに行くように」と。

民衆はそれに応えてくれました。最初は少しずつ、そしてやがてそれは文字通り洪水のように民衆は繰り出しました。翌日になると、現場には200万人もの人びとが集まっていたのです。そのときには、独裁者の軍隊がラジオ・ヴェリタスの放送局を破壊していました。しかし、そのラジオ局はそのときには既に使命を果し終えていたのです。

民衆の宗教心と実践

なぜ民衆は私の呼びかけに応じてくれたのでしょうか。なぜ民衆はあれほど熱狂的に、あれほど勇氣と信念を持って応えてくれたのでしょうか。答えはこの会議のあとの二つのテーマ、すなわち宗教と文化の中にあるのです。

フィリピンの状況では、この二つは不可分に結びついており、どちらかを抜きにすることはできないのです。ですから、フィリピンの文化をみるなら、どれほど深く宗教的シンボルがしみ込んでいるのかを見落としてはいけないのです。またフィリピンのカトリシズムをみるならそれがフィリピンの習慣や道德観にはっきりと表れていることがわかるでしょう。

司祭というものは、どこのカトリック諸国においても権威のある存在ですが、フィリピンでは特にそれが顕著です。このイメージは戒厳令がかけられた直後からは一層高まりました。独裁政権の下では、フィリピンの民衆は困ったときにかけ込んでいける人が誰もいませんでした。手紙を書く国会議員もいなければ相談にいく首長もいませんでした。独裁者は議會を廃止してしまい、首長たちはみな彼の言いなりでした。貧しき人びとが行けたのは誰のところだったのでしょうか。それは司祭のところでした。司祭

は心から同情的で、人びとを決して軍部には引渡したりしませんでした。それ以外に、不正をすすんで非難しようとする者は司祭や司教たちだけだったのでしょうか。

司教が呼びかければ、人びとがそれに応えるというのはまさに文化が命じるところでした。そのまさに同じ文化こそ、民主主義に根ざすものであり、戒厳令という束縛に怒ったのです。そして人びとがそれらの束縛を取り除く手段としての確な判断で司教の呼びかけに応じたのです。だから、私の訴えに対する人びとの応答が熱狂的で電撃的なものになったのです。

パキキサマの価値意識

フィリピンの文化にはもうひとつの側面があります。これは昔のキリスト教徒たちのならわしですが、それが革命では表面に表れました。これはフィリピンでは‘パキキサマ’(pakikisama)として知られているものです。残念ながら、それを正確に伝える訳語はないのですが、それは分かち合い、隣人意識、兄弟意識、連帯そして一体感といったものが結びついたひとつの価値であります。

その価値によってフィリピン人は、たとえ個人的な好みというものを忘れてしまわなければならなかったり、あるいは境界線を越えなければならなかったりしても、必要なときには特に他人と手をたずさえるのです。

だから、人びとがバリケードを築き戦車の前に立ちただかって兵士たちに向かって戦車から降りてきて仲間に加わるよう呼びかけたとき、そうです、「我々は同じフィリピン人同志じゃないか。けんかなんかよせよ」と呼びかけたとき、兵士たちも共同戦線をとりざるを得なかったのです。

兵士たちは、長年にわたる訓練のことも、兵士として命令には絶対に服従しなければならないと教えられた厳格な規律のことも忘れ、武器を捨てたのです。

それにしても、民衆はなぜそれほどまでに恐れを感じなかったのでしょうか。

うか。なぜ民衆は暴力は起こらないと確信して子供たちを連れ出してきたのでしょうか。その答えは宗教心にあるのです。すなわち、聖母マリアのとりつぎによる力と神なるキリストへの深い信仰の中に。

みなさんも、革命の写真をご覧になったでしょう。男も女も、そして子供たちも手にはロザリオ、そして唇には祈りの言葉以外のものは何の武器も持たず、戦車を止めている写真をご覧になったでしょう。また若い男たちが聖母マリア像を抱きながら戦闘態勢の兵士たちと対決しているのをご覧になったでしょう。

奇跡が起こる

何が起こったのでしょうか。戦車は向きを変え、兵士たちも仲間に加わったのです。独裁者は見捨てられ、裏切られてしまったことを知り、不名誉な亡命を求めて逃走してしまったのです。

革命の後、外国人記者団は私にインタビューをし、フィリピンの民衆がいかにして一発の弾丸も発射せずに抑圧的な体制を打倒したのかを尋ねました。説明はできませんでした。なぜなら、奇跡が起こったことをどうやって説明できるのでしょうか。

それは奇跡だったのです。なぜなら、寝不足で疲れ、空腹の人びとが何十万人もそこにいたのですから。疲れきった一市民が兵士めがけて石を投げつけたり、あるいは極度に緊張した兵士がたまたま発砲してしまったなら、流血の惨事となっていたでしょう。

でも、誰も石を投げたりはしませんでしたし、兵士も誰ひとり引金を引かなかったのです。その代わり、喜び抱き合って涙を流しました。愛と善意、喜びと歓声に満ちあふれました。

私が奇跡だと言ったのはそういう理由からなのです。

今日、革命から8か月が過ぎて、私は事態を違った意味でとらえようとして始めています。私はまだ奇跡を信じています。でも今は、神の恩恵はさ

ておき、無血革命を可能にしたものが他にあったということが私にはわかります。革命をもたらしたのは、コミュニケーション、文化、そして宗教の見事な調和であったのだということを。

そして‘民衆の力’、今はそれが‘非武装フィリピン軍’をうまく言いあてたものとして引き合いに出されいますが、この民衆の力があの記念すべき革命の4日間、司祭や修道女たちのはっきりと目に見える存在によって方向づけられたのです。どこに行っても司祭はミサを行い、修道女はギターをかなで、民衆を歌に導いたのです。司祭や修道女は人びとから尊敬されていました。これは宗教家が権威ある人物と認められている文化のおかげなのです。

そして、あのとき、民衆の宗教心はどこに、最もはっきりと表れていたのでしょうか。それは現場にいた人びとが全く無私であったことに見出されるのです。あえて言うのならば、誰ひとりとして抗議に参加することで一体どんな得があるのかを考えていた人がいなかったということです。考えていたことは、どうしたら敵が英雄的反乱軍の立てこもっている孤塁を押しつぶしてしまうのを防げるのかということだけだったのです。そしてひとりひとりが他人にだけ気を配っていたために最も有意義なやり方で自分の宗教心を実践していたのです。なぜなら、他者への奉仕というこれこそがキリスト教の本質なのではないでしょうか。

だから、これが、今大会のテーマに沿ったフィリピンの経験なのです。西洋、いわゆる第一世界に住むみなさんがテレビや新聞などで報道されたためにあの革命のことをずっとよくお知りになっていることを私はうれしく思います。革命を経験した私たちはみなさんと同じテレビや新聞といったメディアによる利益が全く否定されていたからです。監視下に置かれた新聞やテレビはごく限られた役割しか果たせませんでした。ラジオ・ヴェリタスはこのときには既に破壊されていました。『ヴェリタス』誌は果敢にも民衆に情報を伝えようと努力していましたが、残念ながらその設備

というのはニーズに応えられるだけ十分にはそろってはいなかったのです。

革命の経験から得たもの

しかしながら、あの革命の経験によってフィリピンは全世界から注目を集めました。私たちはもはや独裁者の虐待を甘んじて受けるようなおとなしい国ではなく、非暴力の原則を固く信ずる国、英雄の国としての評価を取り戻しました。そして、私たちがそれをうまく成功させたために、新たな尊敬と称賛をもって全世界の人びとから見なおされるようになったのです。

みなさんに私が今伝えたいと願っているあの経験は、フィリピンの人びとにもまた何かをもたらしたのです。それは私たちに自尊心を呼び戻させ、自分たちへの自信というものを取り戻させてくれました。20年ぶりに、私たちは、世界の人びとに自慢することができました。

私たちは今誰もが享受している民主主義というのを勝ち得たのです。そうして勝ち取った自由を与えられるのにふさわしい人びととなっているのです。

そして私は神に祈ります。どうかみなさんも祈って下さい。この民主主義が保たれ自由が守られるように。独裁者が残した経済的壊滅の灰の中からまるで不死鳥のように、我々の国家を再建するために私たちは闘っているのだから。

みなさんに神の祝福がありますように。

(訳者＝保岡孝頭、上智大学コミュニティ・カレッジ東南アジア政治講師)

訳者注

- 1) カトリック国際出版連盟、本部ジュネーブ、UNION CATHOLIQUE INTERNATIONALE DE LA PRESS の略、3年毎に世界会議を開催している。第14回大会は1986年10月21～25日、インドにて開催された。日本を含む49カ国のカトリック出版・編集・新聞人多数が出席して、「コミュニケーション、文化、宗教」

のテーマのもとに、カトリック・メディアのソーシャル・コミュニケーションにおける役割と責任について広く意見交換がなされた。訳者も UCIP・ASIA のメンバーとして会議に参加した。

- 2) 1987年1月12日、フィリピンのアキノ大統領（革命暫定政権）は、1987年度のマーチン・ルーサー・キング平和賞を受けた。授賞のおもな理由は、アキノ大統領（暗殺された故ベニグノ・アキノ氏の夫人）に象徴される非暴力行動がほとんど流血を見ずして、平和的にマルコス長期独裁政権を倒し、フィリピンの変革を達成するための原動力となったことにある。アキノ大統領は「フィリピン民衆を代表し、感謝の気持ちで受ける」と喜びを表したのである。
- 3) 1972年以来、フィリピン・カトリック司教団（110名の司教）は毎年定例会を開き、社会、政治、経済諸問題についてモラルの面から問題提起を行い、フィリピンのカトリック教徒の福音宣教の指針を示してきている。特に1984年の同司教団司牧教書「生命の尊重」において、抑圧政治の状況下で国家秘密警察による人命軽視の暴力不正行為（1972年以来の戒厳令下で7万人の尊い生命が犠牲となっている）を糾弾し、大統領非常大権措置に警告を発した。さらに、1986年1月、「我々は人間に従うより、神のみ旨に従わねばならない」という声明を発表。民衆に來たる大統領選挙には棄権することなく、良心に鑑み、投票するように諭した。未曾有の独裁者による、不正選挙結果となった同年2月、フィリピン・カトリック司教団は「選挙後の声明」として異例の特別アピールを発表し、その中で、「もはや民意を全く反映しない独裁政権は道義上、統治権はあり得ない」と真正面から独裁政権を断罪することになった。その後まもなく2月22日～25日、‘民衆の力’による独裁政権打倒の無血革命は、まさに同司教団声明を裏書きする出来事となったわけである。
- 4) 1958年のアジア司教協議会において、アジア地域における福音宣教としてのメディアを開設することが決定され、翌年4月、フィリピンの当時の故サントス枢機卿（マニラ大司教）の尽力により、マニラにラジオ・ヴェリタスが開局された。現在は13の言語で放送されている。日本語放送は1976年12月より開始されている。正式名称は RADIO VERITAS ASIA である。
- 5) アキノ暗殺事件について、マルコス大統領によって設置されていた民間人5人からなる真相究明委員会は、1984年10月、「軍人たちによる陰謀」と断定する報告をまとめて、大統領に提出した。これを受けてマニラ公務員犯罪特別検察庁はフィリピン国軍参謀総長ら軍人25人、民間人1人の26人を起訴した。これに対し、フィリピン公務員犯罪特別裁判所は、1985年12月2日、「暗殺事件は新人民軍＝フィリピン共産党の軍事組織に雇われた者の犯行」と判決を下し、軍の関与を否

定した。同裁判により被告全員の無罪釈放が命じられた。

このアキノ事件の全員無罪判決には、米国政府、議会上院外交委員会では「判決はフィリピン政府の信頼度の改善に役立たないものである」と批判声明や強い不満が表明されていた。

Communication, Culture, Religion

—The Philippines Experience

Jaime L. Sin

(Cardinal, Archbishop of Manila, Philippines)

SUMMARY

I feel I have a duty to share with you the experience that the Filipino people went through during the bloodless revolution, an experience which proved, conclusively and beyond the slightest doubt, that communication, culture and religion, if blended correctly and made to work harmoniously, can bring about the results as earth-shaking as the toppling of a well-entrenched dictatorship ...without violence and without shedding a single drop of blood.

Overnight, my country, which prided itself in being the showcase of democracy in Southeast Asia, became a totalitarian state. Overnight, my countrymen saw their precious human rights being trampled upon, their freedoms taken away. Without any warning, the print and broadcast media, which had enjoyed the reputation of being the most free in our part of the world, found themselves closed down. The media ceased to be instruments of the truth; they had become shameless purveyors of propaganda. Under these impossible conditions, the people could not but be starved for news, real news based on fact and not on the blatant lies peddled by the dictatorship.

All through this difficult time, there was only one voice that dared to protest. This was the voice of the Church. Time and again, the bishops of the Philippines issued pastoral letters denouncing the loss of freedom, the tortures and the illegal detentions. These letters were read in churches during Sunday Mass, and their message spread by word of mouth, keeping the spirit of freedom alive.

On August 21, 1983, when Benigno Aquino, the opposition leader who dared to return from exile, was assassinated at the Manila International Airport, Radio Veritas, Church-owned and Church-operated Radio was there, giving the whole country an accurate, on-the-spot-coverage of the entire shocking affair. The government media were silent about -or made light of- the assassination. But Radio Veritas persisted.

It was at this point, that I decided that the Church should publish its own newspaper, a newspaper that would have the courage to tell the truth no matter how much it would hurt the dictatorship.

I felt then...as I still do now...that the people had the right to be told the truth. There were a number of Catholic businessmen who shared my view and who were willing to risk their business for the sake of the truth. We pooled our resources.

And that was how, in the last quarter of 1983, "Veritas," the newsmagazine, was born. Its slogan was taken from the gospel of Saint John, "The truth shall set you free." Its reporting was fearless, but it was scrupulously accurate. Its editorials were incisive and hard-hitting and they were even more fearless.

When the presidential elections were held last February, "Veritas," with its customary courage and passion for the truth, disclosed, in great detail and exhaustive pictorial coverage, the attempts of the dictatorship to manipulate the results and steal the election.

The people knew how uncompromising the bishops were in their stand against electoral fraud, how brave they were in saying that because of the unparalleled cheating, the dictatorship had lost its moral right to govern. Thanks to the two Church media, the people understood that the strong position the bishops adopted did not constitute interference in partisan politics. And the bishops, they saw, could not be neutral in the face of evil.

When the revolution broke out, and when the rebel leaders contacted me and said that they would be dead in an hour unless I helped them, I knelt down and prayed as I had never prayed before. I prayed for divine guidance. And I got the answer. I should call the people to go out of their houses and to come to the army camp where the rebels were entrenched. Only large masses of people, I thought, could stop the tanks from advancing.

I repeatedly went on the air over the Radio Veritas. The people responded first in trickles and then in a veritable flood. The question has been asked. Why did the people respond to my call, and why did they respond with such enthusiasm and with such courage and faith? The answer can be found in the two elements of the Congress (UCIP) theme: religion and culture.

In the Philippine context, these two are so inextricably intertwined that one cannot be taken without the other. And when you examine the Catholicism of the Filipinos, you find it invested with distinctly Filipino mores and practices.

The culture dictated that when the bishop called, the people should answer. There is another aspect of Philippine culture, this one in keeping with the practices of the old Christians, that manifested itself during the revolution. This is what is known in the Philippines as *pakikisama*. It is a value that combines elements of sharing, of neighborliness, of brotherhood, of solidarity and oneness. It is a value which compels a Filipino to join hands with others particularly in time of need, even if that joining

necessitates forgetting personal preferences or crossing party lines.

After the revolution, foreign journalists interviewed me and asked me how we Filipinos managed to do what we did, topple an oppressive regime without a shot being fired. I said there was no explanation for it, for how do you explain a miracle?

Today, eight months after, I am beginning to see things in a different way. I still believe in the miracle, but I now realize that, aside from God's grace, there was something else that made the bloodless revolution possible. It was the artful blending, the harmonious combination of communication, culture and religion that brought it about. That experience, I wish to tell you now, did something for the Filipinos also. It gave us back our self-respect, it restored our confidence in ourselves.

And I pray to God...and I urge you to join me in my prayers... that we shall preserve this democracy and that we will keep this freedom as we struggle to make our nation rise, like a phoenix, from ashes of the economic devastation that the dictatorship left.

<特別寄稿>

日本の解放の神学を求めて I

——解放の神学における「貧しさ」および「貧しい者」の意味——

ホアン・M・リベラ

解放の神学は「信仰において受容され、生かされる主のみ言葉と対決しながら、歴史的なプラクシスに関する批判的な反省¹⁾」であるとすれば、そのプラクシスの中心である「貧しい人びとを優先するという選択」を十分明確にしなければならない。しかしながら、「貧しさ」の基準こそ、現在において問われているので、まずその基準の考察から出発しなければならない。いうまでもなく、そのテーマに関するすべての論文を調べること自体が不可能なので、グティエレス (Gustavo Gutiérrez), ボフ (Leonardo Boff), エヤクリア (Ignacio Ellacuría), ソブリノ (Jon Sobrino), およびセグンド (Juan Luis Segundo) のおもな書物に限定して論を進めたいと思う²⁾。

1. グティエレス

彼の最初の関心は、「貧しさ」という一つの言葉で指摘される全く異なった二つの意味にあった。その一つは、「物質的貧しさ」という言葉で表される「人間生活の名にふさわしい生活に必要な、経済的財の欠如である³⁾」。もう一つは、人間のおよび宗教的な意味で理想だと思われる「霊的貧しさ」である。前者が非人間的であるのに対して、後者が「幸い」だといわれている。1967年にその二つの概念に「連帯性と抗議としての貧しさ」が加えられた⁴⁾。グティエレスは、1971年に、その三つの概念の相互関係と、第三の概念の神学的な意味を深める。すなわち、1) 霊的貧しさ

が物質的（または事実上の）貧しさにおいて具体化されなければならない、2）連帯性と抗議としての貧しさは、貧しい者のために貧しくなる（連帯性）と共に、彼らの経験している不正な貧困と闘う（抗議）、3）闘う貧しさは必要であるが、十分ではないので、それに霊的貧しさ（または精神的幼さ）を加えなければならない⁵⁾。

1972年にグティエレスは、さらに貧しさの意味を深める。われわれは、貧しい者になっただけで、道端で自然に貧しい者に会えるのではなく、彼に近づかなければならない。彼に会いにゆくこと自体が、ある社会階級を捨てることであり、別な階級に入ることである。したがって、貧しい人びとを選ぶということは、政治的な経験であるといわなければならない。しかし、それと同時にその選択が新しい霊的経験一つまり、他者である主にその貧しい者において会う一の母体となるのである⁶⁾。

1969年から1973年までにおもに「貧しさ」の意味について神学的な反省をしてきたグティエレスは、「貧しい者」を考察し始める。その考察のおもなポイントは次のようである。1)「貧しい者」は、ある階級を意味するだけでなく、「差別を受ける民族」と「軽蔑される文化」をも意味する。2) 現代の西欧の神学の相手が無神論者であり、世俗者であるのに対して、解放の神学のそれは、「貧しい者」であり、「搾取された者」であり、「非人間」「非人格者」である。3)「貧しい人びと」が、歴史および教会の周辺から中心へ移動する。「貧しい人びとまたは民衆」、「軽蔑された民族」、「無視された文化あるいは性別」等が、歴史を変える力であり、解放のプラクシスの主体である⁷⁾。

1979年から1986年までのグティエレスの神学的な反省は広がりと共に深まりも表している。たびたび取り扱った「貧しさ」の三つの意味とその関連性を深めながら 究極的な貧しさは死—それは、「自然な死」ではなく、飢餓、抑圧等による死—である⁸⁾と主張される。そのような死は、命の神に反すると同時に 神学的用語の問題になる。グティエレスの1986年の本

『無実の者の苦しみから神について語ること』(*Hablar de Dios desde el sufrimiento del inocente*, Salamanca, 1986) はヨブ記を通じてその新しい神学的用語を試みているのである。

グティエレスの長くかつ多元的な考察を、次の三点にまとめることができる。1)「貧しさ」および「貧しい者」の概念は、経済的・階級的な定義から民族、文化、性別を通して「死」まで広がる。2)「貧しさ」は自然現象ではなく、歴史的、弁証法的な結果つまり、人間の意志と自由によるもの一であるため、その反対の現象一富、生一をふくむ。3)「貧しい者」は、一見したところで福音の聞き手と思われるが、実はその福音の語り手である。

2. ボフ

ボフは、解放の神学の第二世代だといわれる。彼の神学的な反省は、確かにグティエレスの「解放の神学」とほぼ同時であるが⁹⁾、明確な形でその思想を表し始めるのは、1975年ごろだといえる。1976年の、彼の「貧しさ」に関する論文¹⁰⁾を読むと、グティエレスの「物質的な貧しさ」、「霊的貧しさ」、「抗議する貧しさ」という分けかたを、そのまま受け入れているように見える。しかし、それらの「貧しさ」に、「霊的貧しさ一あるいは謙遜の貧しさ」を生きるための、苦行としての「物質的な貧しさ」を加える。

1976年以降の「貧しさ」に関するボフの考察をまとめてみると、次の「五つの顔」が見える。1)「欠如としての貧しさ」。この「欠如」は、必ずしも抑圧から生まれるものではない。言い換えれば、これは「災害」あるいは、自然の変化による可能性がある。しかしながら、「生命を妨げ、人生を縮める」という理由から、それは否定されなければならない。この貧しさの反対の現象は「豊かな富である¹¹⁾」。2)「不正の罪としての貧しさ」。これは、剥奪から生じる物質的な貧しさである。この貧しさは、「貧

しい人」を指すより、「貧しくさせられた人」を指しているのです、真の意味での「社会的な罪である」。したがって、この貧しさの反対の現象が正義である¹²⁾。この「不正な貧しさ」に近づくには、四つの、すなわち直観的、分析的、倫理的および神学的レベルがある¹³⁾。3) 全面的な待命 (disponibilidad) としての貧しさ。これは「霊的貧しさ」と同じ位の意味を持つ概念であるが、ボフは「霊的貧しさ」という概念をできるだけ避けようとする。この「貧しさ」の反対の現象はイエズスが絶えず闘った「ファリサイ派主義、からいばり、傲慢、うぬぼれ」である¹⁴⁾。4) 「苦行としての貧しさ」。これは、1976年の論文にあげられた貧しさであるが、その目的が「霊 (espíritu) に属する業—自由、寛大さ、祈り、創造」を保つことにある。反対の現象は、浪費と放蕩である¹⁵⁾。5) 「貧しさと闘いながら貧しい者への愛の表現としての貧しさ」。これは聖なる怒りと愛から生まれる貧しさで、その反対の現象が利己主義と無関心である¹⁶⁾。

1986年に、ボフは、「プエブラ会議決議文書」(第3回ラテンアメリカ司教会議、1979年1月)の指摘にあわせて、物質的な貧しさ、政治的な貧しさ、文化的な貧しさと、霊的貧しさについて書く。彼の使う「霊的貧しさ」は、グティエレスと異なって、「生存のための闘いから生じる鈍感さと心のすさみ」である¹⁷⁾。別な箇所でも、同じことを、次の言葉で表している。「貧しさを非人間的にさせるのは生活の基本的ニーズを満たせないことだけ(大体そうであるが)ではない。それに、... 権力者の作った否定的なイメージの、貧しい人びとの取り入れも加わる。貧しい人が自分を卑しく、軽蔑すべき者として見てしまうのである¹⁸⁾」。

これは、ある意味で、グティエレスの指摘した「白人の手による歴史」に似た恐ろしい心理学的現象である。この自尊心を失わされたあるボリビアの女性が明らかにした。彼女は、拷問を受け、その結果として流産したのち、仲間に救われて休養のために山に行った。その時、彼女はこう言った。「私は自分が罪人のように感じた。... D I C (犯罪調査局) の監房

で、私は自分がたいへんな罪を犯したと思いこむように仕向けられていた。…私は大きな罪を犯したという気持ちをもって暮らしておった¹⁹⁾。

しかし、グティエレスと同様に、ボフも「貧しい者」は、全く無力な者で、被抑圧者だけではない、ということを知っている。「貧しい者は、単なる何も持っていない者であるだけではない。彼は、他人と共に、より豊かな命と集合的な幸福をもたらす共同生活の建設のおもな行為者でもある²⁰⁾。

3. エヤクリア

解放の神学の流れを汲んでいる神学者たちの中で、「貧しさおよび貧しい人びと」に関して神学的な反省を加えるエヤクリアは、最も近づきやすい神学者である。彼の長期の研究の真髓が1983年に発表されている。しかし、それに触れる前に、その時までの彼の主張の要点を取り上げてみたいと思う。

エヤクリア（彼も第二世代の神学者である）の1974年から1979年までの業績は、「神学の間」と「精神を持つ貧しい人びと—pobres con espíritu」でまとめることができる。後者は以下で詳しく取り上げることにして、まず先に前者を簡単に紹介することにする。1) ラテンアメリカの教会は、貧しい人びとのものになることを自分のカリスマにしなければならない²¹⁾。2) 聖書上、貧困と富を理解するには、それを歴史的・弁証法的に考えなければならない²²⁾。3) 聖書の啓示に現われる「貧しさ」は、「神の啓示および救いの場」または「それにおいてのみ神が現われる命への条件」として考えるべきほどの、特有の認知的な性質を持っている²³⁾。4) このような「貧しい人びとの教会」は、富んでいながら貧しい者を心配したり、または競争的な歴史から離れて貧しい人びとに「寛大に援助を与えたりする」のではなく、その教会において貧しい人びとが主体者であり、真の行為者であり、内的構造の原理となっているのである²⁴⁾。

1983年にエヤクリアは「貧しい者」を五つの観点から見ることによって、その多様性と複雑さを明確に表そうとする。1) 社会・経済的に、貧しい人びとは歴史的・弁証法的な事実であり、政治的な意味を持つ競争のおよび集合的な主体である (sujeto colectivo y conflictivo con significación política)。2) 神学的に、貧しい人びとは、神の啓示の場であり、イエズスへの信仰とそのプラクシスの場であり、信仰の反省と神学の場である。エヤクリアがいうように、「場」(lugar)と「源泉」(fuente)とを区別しなければならない。「場」は、体験または神学の行なわれる「ところ」であるのに対して、「源泉」は、なんらかの形で信仰内容を保持するものである。3) キリスト論的に、貧しい人びとが本質的にキリストであるイエズスと結ばれている。「福音」は、まさに貧しい人びとへの福音であり、そして「しるし」そのものである。4) 救済論的に、貧しい人びとは、救われるものであると共に救済をもたらすものでもある。エヤクリアによると、その能動的な救いは、まず十字架につけられた貧しい民衆に現われる。しかし、そのような救いを最もよく表すのが、「霊を持っている貧しい人びと—pobres con espíritu」である。彼らは、神の国のために働く人であり、その国の生きた証である。5) 教会論的に、貧しい人びとは、教会の本質である。教会の柱は二つある。すなわち、貧しい人びとに属することと、神の国を伝えることとである。その意味では、教会は貧しい人びとの教会でなければならない。

エヤクリアの神学的な思想において、貧しい人びとは、救済的な観点から見て、二つの役割を演じているようにみえる。その一つは、能動的、半自動的、部分的である。貧しい人びとは、貧しさのもとで苦しむだけで、歴史に訴え、解放を呼びかける。もう一つは、受動的でありながら能動的である。物質的な貧しさ—受動的な貧しさ、耐えられる貧しさ—に霊(espiritu)が加わると、それが解放をもたらすエネルギーに変わる²⁵⁾。

4. ソブリノ

ソブリノの神学的反省は、彼も指摘しているように²⁶⁾、根本的にエヤクリアのそれと一致しているにもかかわらず、他の解放の神学者との関連性を表そうとしている。その意味では、総合的なヴィジョンと呼ぶことができる。

1. 「貧しさ」の諸概念とその相互関係

ソブリノにとって、「貧しさ」の基本的な意味が二とおりあり、すなわち「物質的」または「事実上—real」の貧しさと「福音的」または「精神を持つ—con espíritu」貧しさである。前者は、「歴史において脅かされた命」であり、「抑圧的制度によってゆっくりと、圧迫的制度によって暴力で突然奪われる命」である²⁷⁾。いうまでもなく、その貧しさは、人間の偶然性（contingencia）に属する「形而上学的貧しさ」と異なるのである²⁸⁾。

後者の概念に関してもソブリノの考察がエヤクリアのそれと一致しているが、彼より「連帯性および抗議」である貧しさとの関係を強調しながら「霊的貧しさ」—それは「霊的幼さ」と物質に対する内的無執着をふくむ—と苦行的貧しさと関連をつける。福音的な貧しさは、単なる意向によるのではなく、貧しさの真の霊的、教會的な意味を見つけることによって生かされる。しかしながら、貧しさの霊的な変容は内的次元だけに限らない。本当の意味での変容に三つの条件が伴う。1) 信仰をもって事実上の貧しさを自分の身にすること²⁹⁾。2) 解放のプラクシス³⁰⁾。3) 霊をもって物質的貧しさを生かすこと³¹⁾。この「霊」に、確かに連帯性と抗議が伴うが、ソブリノがたびたびあげている“anawim”の場合には、それより「霊的幼さ」の響きが強く聞こえる³²⁾。一見しただけでは、矛盾があるように見えるが、その貧しさが「単なる感情による無執着」ではないし³³⁾、そして「神に頼る」こと自体が、その「神」は、イエズスの神であるゆえ

に、貧しい人びとの媒介なしに考えられないのである³⁴⁾。

2. 死をもたらすものとしての貧しさ

グティエレスと同様に、ソプリノにとっても、貧困と死が強く繋がっている。しかし、それに触れる前に、その繋がりは第一世界に当てはまらないということをいわなければならない。第一世界における貧困の照合極 (polo referencial) が「福祉」であるのに対して、ラテンアメリカのそれは「死」である。貧しさとは、死へ近寄る貧窮であり、貧しい人びととは、生き残るようにつとめようとしている人びとである³⁵⁾。その貧しさは、「本質的に死を愛する (necrofílico) 制度」によるのである³⁶⁾。しかし、構造的弁証法によって貧しい人びとは、その不正に気づき、それと闘い始めると、新しい死との関係、つまり暗殺、が出現する。貧しい人びとは、貧しいからこそ暗殺されるのである³⁷⁾。

このような複雑な反省の結果を単純にまとめると、一つの結論を導き出せる。つまり、未熟な死、不正な死の観点から、神を見直すことができる。歴史的に存在する貧しさが死と繋がっているなら、歴史の神—われわれの歴史の神—は、単なる形而上学的貧しさに対する命の無限性でもなれば、その超越を可能とする存在でもない。神は、基本的なレベルにおいて不可能となっている命の保護者であり、そして貧しい者であるというだけで命を奪われかけている人びとに—一方的な愛を示す。それゆえ、貧しい人びとの生き方は、信仰への第一媒介となるのである。

5. セグンド

解放の神学に触れる時に、セグンドの名はあまり表に出ない。理由はいろいろあるようだが、その一つは、おそらく解放の神学に対する彼の批判である。もう一つは、逆に彼に向けられる「エリート主義」という批判である³⁸⁾。しかし、それらの批判は、この論文のテーマと関係のないことなので、無視することを許していただくことにする。

「貧しさ」および「貧しい人びと」と密接な関係を持っているセグンドの神学的な反省は、彼の「神の国」についての説明において表されている³⁹⁾。そして、その考察を、次の三つのポイントでまとめることができる。1) イエズスの生涯を解く一つの鍵としての政治、2) 神の国の相手、3) 回心。

1. イエズスの生涯とメッセージを政治的な鍵で解くということは、彼を政治的な権力を求めた者として解釈することではない。以下に述べられるように、イエズスは、イスラエルの群衆を潜在的に抑圧していたイデオロギー的・宗教的制度のとりやめを狙っていた。これは、早急の政治的権力に対する「長い目で見える権力」である。言い換えれば、これは、やがて権力者を倒す不可逆な過程をもたらすことである⁴⁰⁾。

2. 福音 (buena noticia) の相手としては、三つのグループが現われる。a) 「自然」な相手である貧しい人びと。b) それを聞いて「悲しむ」抑圧者たち。3) 彼に従って同じ福音を述べ伝えようとする「弟子たち⁴¹⁾」。「貧しい人びと」は、単なる物質的貧困を味わっている人びとだけではない。福音によると、イエズスが受ける批判的なのは、「貧しい」人より、「取税人と罪人」である（ルカによる福音書7章34節、マタイによる福音書11章19節）。そして、貧しい人びとと社会的な否定を受けている人びとを、共に表す共通の言葉があると思われる。それは、「土の民—'am-ha'arez, el-pueblo-de-la-tierra」である。この「民」は、経済的な貧しさと道徳的な拒否を混合した、相手にされない (marginada) 群衆であった。したがって、「貧しい」人びとでありながら「罪人」でもあった。物質的な観点から見れば、彼らが貧しい人びとであった。その貧しさの理由を求めれば、彼らが罪人であった、という結論に至るのである⁴²⁾。

3. 「罪人」でありながら—あるいは、またであるからこそ—貧しい者である人に、イエズスになんの要求もしない⁴³⁾。神の国は彼らのものである。その理由は簡単である。彼らは貧しい者だからである。「回心」しなけれ

ばならないのは、彼らではなく、イエズスの言葉を聞いて悲しむ人たちである。第三グループに対するイエズスの要求は—それは、彼らがイエズスとすでにいるので、神の国に入るためでなく、彼に従うため、またはイエズスの福音を伝えるためであるが—意識化と勇気である⁴⁴⁾。

セグンドの考察において、第二グループと第三グループは、他の解放の神学者の「富のある人」と「霊を持つ貧しい人びと」に相当すると思われる。それより、彼の試みは、経済的な貧しさと宗教的な制度の繋がりを明確にしようとすることである。彼のいっているイエズスの政治的な意味は、そこにある。貧しい人びとは、そのままでイエズスの父である神に受け入れられているという事実によって、現状の宗教的制度が崩れざるをえない。それは、イエズスの時代に限られる問題ではなく、現在の世界—特にラテンアメリカにも当てはまるようである。

ま と め

1. 「貧しさ」

物質的または事実上の貧しさは、他の面をふくみながら、おもに経済的・社会的（人間的生活に不可欠なもの—衣食住—の欠如および社会の周辺にいること）という面を持つ。

貧しさは、運命あるいは偶然の、必然的な結果ではない。根本的に、それは人間の自由による社会的、政治的および経済的な構造と状況の結果であり産物である。現代の社会に現われる貧しさを、その反対の現象である富との関係を無視して理解することは不可能である。これは、いわゆる貧しさの「弁証法的な」次元である。

欠如であると共に剥奪であるこの貧しさは、非人間的なものとして「制度化された不正」（プエブラの文書）と呼ばなければならない。したがって、倫理的には、誰からも否定されなければならない。信仰上では、つまりきであるから許してはいけない、神の歴史的な計画に背く「悪」として闘

わなければならない「社会的な罪」である。それゆえに、貧しさは非福音的なものである限り求めるべき理想として考えてはいけないものである。

貧しさは、個人としてではなく、ある具体的な集団に属している人たちに限られるので、集団的な事実である。そのような貧しさは、ある社会的な階級、民衆、民族、文化、性別に伴うものである。

このような現実には直観のだけではなく状況分析をとおして気づくことは、連帯性と貧しい人びとの解放への闘争に導く。これは、グティエレスとボフが連帯性と抗議としての貧しさと呼ぶ貧しさである。

この「連帯性と抗議としての貧しさ」に二つの段階がある。まず、社会的な着生 (*inserción sociológica*) は、社会的に貧しさを知らない人びとが、物質的な貧しさを耐え忍んでいる人びとと共に、または彼らのように、生活しようとするものである。第二の段階は、歴史的・政治的な着生である (*inserción histórico-política*)。これは、貧しい人びとと共に貧困と闘うことである。

霊的、または福音的な貧しさに関しては、意見が分かれている。グティエレスは、そのような貧しさが物質的な所有の有無と関係のない次元に属するといっている。ボフは、根本的にグティエレスと一致しているが、できるだけそれをさけて「謙遜である貧しさ」 (*pobreza-humildad*) という用語を使う。エヤクリアもそれをさけて、「霊を持つ」 (*pobreza con espíritu*) という表現を使う。ソブリノは、「霊的貧しさ」を使う時、「霊的幼さ」も「霊を持つ」ことも意味するのである。セグンドだけは、「霊的貧しさ」の概念を否定する⁴⁵⁾。彼によれば、そのような貧しさは福音に現われない。マタイ福音書に現われる「心の貧しさ」(5章3節)は、「柔和な心」と同義語である⁴⁶⁾。

苦行としての貧しさは、物質的なものに対する無執着とそれらの最低限の使用である。しかし、その無執着の意味は、行動自体にあるのではなく、イエズスに従うことにある。そして、待命は貧しい人びとに福音を伝える

ためにあるように、無執着の窮極的な意味が貧しい人びととの連帯性にあるのである。

解放の神学者たちは、形而上学的な貧しさについても語ることがあるが、それは歴史に現われる弁証法的な貧しさを説く鍵として使わないことにしているのである。

2. 「貧しい人びと」

社会学的な観点から見て貧しい人びとは、根本的に社会的・経済的な現象である。貧しい人びとは、何よりもまず物質的、または事実上の、貧しさを耐え忍ぶ者である。誰でも「透明な目」で現実を見るかぎりでは、その「なまの事実」(hecho bruto)を認めざるをえないのである。

貧しい人びとの政治的な意味については皆一致しているが、それを最も強調するのが、グティエレス、ボフ、セグンドである。前者の二人の主張は、次のところにある。1) 現状を理解するには、倫理的だけでなく、政治的な読み方が必要である。それは、貧しい人びとという概念を、階級と結びつけることによって、象徴的な意味を持つ聖書的な概念は、歴史的な変化をもたらす社会的・政治的な概念になる。2) 貧しい人びとは、単なるかわいそうな者、権力者の外的、親切的な援助なしに何もできない者であるのではなく、自分たちの解放をもたらす「歴史的な力」である。セグンドの見方は、多少違うように見える。第一は、イエズスの時代の宗教制度には、一つの政治的な力があつたゆえに、貧しい人びとという概念に宗教的な意味合いが伴っている。第二は、貧しい人びとは、解放の主体者であるという考え方が著しいあいまいさをもたらす⁴⁷⁾。セグンドによれば、この「歴史的な力」を認めるか、認めないかによって、解放の神学の流れが二つに分かれてしまったのである。

貧しい人びとの神学的な概念は、貧しい人びとと関係なしに、神の本当の顔を見つけない、ということの意味する。しかしながら、それと同時にイエズスに現われた神との関係なしには一信仰の観点から一

貧しい人びとの本来の意味も理解することができない。どの場合でもそうであるが、自分の条件を意識的にかつ能動的に引き受けた貧しい人びとは、独特の御父の啓示の場でありながらイエズスへの信仰の場でもあり、神学の間である。

貧しい人びとの神 (Dios-de-los-pobres) は、次の特徴を示している。

- 1) 十字架につけられたすべての人びとと連帯を示す神であると同時に、正義のある国をもたらしながら抑圧されている人びとを弁護する神である。
- 2) 絶えずご自分を小さくすることによってご自分の偉大さを示す。
- 3) 貧しくさせられた人びとをさらに死で脅かす状況において、命の神 (Dios-de-vida) として現われる。

キリスト論的な観点から見て、貧しい人びとは、歴史においてイエズスの使命が果たされる場である。彼らは、イエズスの現存の特有な秘跡である。その秘跡的な次元は、「飢えた人びと」、「渴いた人びと」、「牢屋にいる人びと」とのイエズスの同一化によってつまずきになったのである。

救済論的な意味では、貧しい人びとは救済の受け手(受動的救済)でありながらその伝え手(能動的救済)でもある。しかしながら、能動的な救済は、貧しい人びとの貧しさから自動的に生じるのではなく、彼らの不正との闘争から生じるのである。この意味では、貧しい人びとの秘跡的な意義一すなわち、そのような闘いにおいて神の救済の業が具体化されるについて語ることができる。

教会論的な観点から見て、貧しい人びとには、「貧しい人びとの教会」一つまり、自分の階級、秘跡、教義等に、貧しい人びとへの優先的選択を表す教会一が現われる。解放の神学者たちは、神、キリスト、救済の概念と同じように、教会を貧しい者との関連において理解している。教会において貧しい人びとは、その教会の一部であるというより、その中心であるといわなければならない。そして、「貧しい人びとの教会」は、「貧しい教会」にならざるをえない。弁証法的に言えば、両方の特徴が同じなのであ

る。貧しい教会のみは貧しい人びとの教会になることができるように、貧しい人びとの教会のみが自分を貧しくさせる剥奪を許せるのである。貧しい人びとの教会は、抑圧と闘争のある歴史において、必然的に迫害される教会である。

解放の神学に現われる「貧しさ」および「貧しい人びと」の概念を検討することによって、次の結論を出せると思う。

1. それらの概念は多元的であるだけでなく、それを明確にするために、弁証法および社会分析が不可欠である。
2. 貧しさを理解するには、それを個人的なレベルを越えて集団的なレベルで取り扱わなければならない。
3. かならずしもそうではなくても、物質的な貧しさは人間の自由と行為によるものである。
4. 物質的な貧しさおよび連帯性と抗議としての貧しさに関しては、この論文で紹介した神学者たちが皆一致している。
5. 「霊的貧しさ」に関しては、多くの疑問があるゆえに、それを否定しているセグンドをのぞいて、他の神学者たちは私的な解釈をする。
6. 「優先的選択」—これは別な論文で取り扱うことにするが—を行なうことにあたって、「貧しさ」および「貧しい人びと」という概念の解明と共に、現状分析は不可欠である。狭義の貧しさ—経済的な貧しさ—のみを使うことによって、広義の貧しさ—社会的、文化的、民衆的、民族的、宗教的—等を見捨ててしまう危険性がある。それと同時に、恐怖またはあせりのために、現状分析をさけることによって、たとえその現象を一時的になくしたとしても、貧しさの原因を徹底的に消すことはないのである。

(筆者は上智大学文学部人間学研究室助教授)

注

- 1) Gustavo Gutiérrez, "...reflexión crítica en y sobre la praxis histórica en confrontación con la palabra del Señor vivida y aceptada en la fe,"

“Evangelio y praxis de liberación,” AA. VV. *Fe cristiana y cambio social en América Latina*, Salamanca, 1973, pp. 231-245, p. 244.

2) 本稿で取り上げた文献は以下のとおりである。

G. GUTIÉRREZ

“Evangelio y Praxis de Liberación,” AA. VV. *Fe Cristiana y Cambio Social en América Latina*, Salamanca, 1973, pp. 231-245. (以下, EPL と省略)

Teología de la Liberación, Perspectivas, Salamanca, 1973. (邦訳『解放の神学』関望・山田経三訳, 岩波現代選書, 1985年) (以下, TLP と省略)

La fuerza histórica de los pobres, Salamanca, 1982. (以下, FHP と省略)

Beber en su propio pozo, Salamanca, 1984. (邦訳『解放の地平をめざして』日本カトリック正義と平和協議会訳, 新教出版社, 1985年) (以下, BPP と省略)

“Speaking about God,” *Concilium* 171 (1984), pp. 27-31. (以下, SAG と省略)

L. BOFF

Jesus Cristo Libertador, Ensaio de Cristologia critica, Petropolis, 1971.

(以下, JLE と省略)

Teologia do Cativo e da Libertacao, Lisboa, 1976. (以下, TCL と省略)

La Fe en la Periferia del mundo, Santander, 1981. (以下, FPM と省略)

Saint Francis, Quezon City, 1984. (以下, SF と省略)

... *Y la Iglesia se hizo pueblo*, Santander, 1986. (以下, IHP と省略)

I. ELLACURIA

“Tesis sobre posibilidad, necesidad y sentido de una teología latinoamericana,” AA. VV. *Teología y mundo contemporaneo*, Madrid, 1975, pp. 325-350. (以下, TPN と省略)

Freedom made Flesh. The Mission of Christ and His Church, New York, 1976. (以下, FMF と省略)

“Notas teológicas sobre religiosidad popular,” *Fomento Social*, 32 (1977), pp. 253-260. (以下, NTR と省略)

“Pobres,” C. Floristan y J. J. Tamayo, *Conceptos fundamentales de pastoral*, Madrid, 1983, pp. 786-802. (以下, P と省略)

J. SOBRINO

“Sobre el Documento de Trabajo para Puebla,” *Christus*. 44 (1979), pp. 42-53. (以下, DTP と省略)

“Dios y los procesos revolucionarios,” AA. VV. *Apuntes para una teología nicaragüense*, S. Jose de Costa Rica, 1981, pp. 105-129. (以下, DPR と省略)

Resurrección de la verdadera iglesia. Los pobres, lugar teológico de la eclesiología, Santander, 1981. (以下, RVI と省略)

Jesús en America Latina. Su significado para la fe y la Cristología, San Salvador, 1982. (以下, JAL と省略)

Liberación con espíritu, Santander, 1985. (以下, LE と省略)

J. L. SEGUNDO

El hombre de hoy ante Jesus de Nazaret, II/1, Madrid, 1982. (以下, HHJ と省略)

Teología Abierta. III, Reflexiones Criticas, Madrid, 1984. (以下, TA と省略)

- 3) G. グティエレス著, 関望・山田経三訳『解放の神学』岩波書店, 1985年, 287頁, TLP, “la carencia de bienes necesarios para una vida humana digna de ese nombre,” p. 365.
- 4) グティエレス, 前掲書, 301頁, TLP, “solidaridad y protesta,” p. 381.
- 5) 同上, 290—300頁参照。
- 6) EPL, p. 234.
- 7) FHP, “las clases explotadas, las culturas oprimidas, las razas despreciadas,” p. 243, “El interlocutor de la teología de la liberación es el *no-persona*,” p. 248, SAG, “...the poverty of the most despoiled groups: Indians, Blacks and their women who are doubly marginalised and oppressed.” p. 29
- 8) 「貧困が死を意味するということである」G. グティエレス著, 日本カトリック正義と平和協議会訳『解放の地平をめざして』新教出版社, 1985年, 20頁。
- 9) JLE.
- 10) TCL, p. 231, 234, 238.
- 11) FPM, p. 196, SF, p. 60.
- 12) FPM, pp. 197-198, SF, pp. 61-62.
- 13) FPM, p. 243.
- 14) FPM, p. 198, SF, p. 62.
- 15) FPM, p. 198, SF, p. 63.
- 16) FPM, p. 198, SF, pp. 63-64.

- 17) IHP, "...el embotamiento y la brutalización a que la lucha por la supervivencia condena," p. 189.
- 18) IHP, "Lo que hace inhumana la pobreza no es sólo (aunque sí principalmente) la no-satisfacción de las necesidades humanas. Es también...la introyección en los pobres de una imagen negativa de sí mismos producida por las clases dominantes," p. 200.
- 19) Moema Viezzer, '*Si me permiten hablar..*' *Testimonio de Domitila, una mujer de las minas de Bolivia*, Mexico, 1978. (邦訳『私にも話させて』唐澤秀子訳, 現代企画室, 1984年) pp. 231-232, "Me sentía una criminal...En las celdas del DIC me habían llegado a convencer en tal forma que yo era una gran culpable...que yo vivía con un enorme sentimiento de culpa," p. 174.
- 20) IHP, "...el principal agente en la construcción de una convivencia más generadora de vida y defelicidad colectiva," p. 22.
- 21) TPN, p. 349.
- 22) FMF, p. 35.
- 23) FNF, p. 34.
- 24) NTR, p. 255.
- 25) P, pp. 786-802.
- 26) JAL, p. 187, pp. 188-190.
- 27) DPR, "La vida amenazada históricamente, la vida aniquilada lentamente por estructuras opresivas o rápida y violentamente por estructuras represivas," p. 43.
- 28) *Ibid.*
- 29) JAL, p. 189.
- 30) *Ibid.*
- 31) *Ibid.*
- 32) RVI, p. 306.
- 33) *Ibid.*
- 34) RVI, p. 347.
- 35) LE, "Pobreza es una miseria que acerca realmente a la muerte y pobres son aquellos cuya máxima tarea es simplemente sobrevivir," p. 192.
- 36) *Ibid.*
- 37) LE, p. 193.

- 38) *Fe Cristiana y Cambio Social en America Latina*. Salamanca, 1973, pp. 203-210.
- 39) HHJ, pp. 155-284.
- 40) HHJ, p. 275.
- 41) HHJ, p. 179.
- 42) HHJ, pp. 172-175.
- 43) HHJ, pp. 209-220.
- 44) HHJ, pp. 204-209.
- 45) TA, "La 'pobreza evangelica' de la que tanto se habla no existe," p. 118.
- 46) TA, "Todo invita a pensar, por el contrario, que Mateo, tanto en la primera como en la segunda bienaventuranza, hace el elogio de la virtud que le es favorita: la mansedumbre," p. 119.
- 47) TA, "...las dificultades de mostrar cómo surge de los pobres-sujeto un pensamiento que se vuelve teología y comprensión liberadora de la fe, vuelven a ser causa de notorias ambigüedades," p. 135.
- 48) TA, "Dos teologías de la liberación," pp. 129-159.

Towards a Japanese Theology of Liberation I

—"The Poor" and "Poverty" in the Theology of Liberation

Juan M. Rivera

SUMMARY

If option for the poor is to be the main thrust of Liberation Theology, the one thing to be clarified before attempting a truly Japanese Theology of Liberation is the concept of "poverty" that the theologians of Liberation are using. A careful reading of the writings of G. Gutiérrez, L. Boff, J. Sobrino, I. Ellacuría and J. L. Segundo shows the following: 1) enforced poverty (material, real poverty) exists as the *dialectical* opposite of wealth; there are

poor people because there are rich people; 2) spiritual poverty (evangelical poverty, poverty with spirit) can only be accepted if understood as a means of protesting against material poverty and of helping the poor; 3) the concept of poverty goes beyond socio-economic definitions to show a situation of oppression (cultural, sexual, racial oppression) and, ultimately, death; and 5) it is only by siding with the poor (that is to say, all those suffering under any kind of oppression) that we can understand God as the Source of Life. Fighting against poverty is not so much a socio-political decision of the will as a calling of the God of Life to make the world, once more, according to His Image and Likeness.

上智大学社会正義研究所活動報告

(1986年～1987年)

I 概 要

上智大学社会正義研究所 (Institute for the Study of Social Justice, Sophia University) は、上智大学の経営母体であるイエズス会の第32回総会教令「信仰への奉仕と正義の促進」の方針に沿って、1981年4月、大学附置研究所として設立された。本研究所は、上智大学の建学理念であるキリスト教精神に基づいて、変動する世界における諸問題を社会正義の視点より学際的に研究し、その成果を教育と実践活動の用に供することを目的としている。

研究活動では、所員の専門分野からの個別研究を年1回発行の『社会正義』紀要に発表している。また上智大学学内制度を活用した所員を中心とした共同研究では、「正義」、「平和研究」、「食糧問題」、「発展途上国問題」、「難民と人権」、「解放の神学」、「カトリック社会教説と経済倫理」などの研究テーマを設定し、1～3年のプロジェクトとして行い、その成果をそれぞれ刊行した。海外調査研究では、本研究所の特色として実践活動を重視する点から、その活動のひとつである「世界の貧しい人々に愛の手を」の会（難民、貧しい人々への援助協力団体で本研究所下部組織）の援助協力先を視察し、新たな協力方法をさぐるために、1981年より現在までに4回の調査研究班（1987年3月に第4回の調査を実施）をアジア・アフリカ諸国に派遣してきた。

教育活動では、国内の専門家、研究者にかぎらず、国外からも、マザー・テレサ、レフ・ワレサ、ヘルデル・カマーラ、スーザン・ジョージ、サムエル・キム、グスタボ・グティエレス、サウル・メンドロビッツ各氏を招へいし、公開講演会、国際シンポジウムを開催している。特に毎年開催の国際シンポジウムでは「国際相互依存時代における人間尊重」（1981年）「アジアにおける開発と正義」（1982年）「世界の難民と人権」（1983年）「平和の挑戦」（1984年）「解放の神学」（1985年）「現

代社会と正義」(1986年)をテーマとしてとりあげ、多数の熱心な参加を得た。なお1987年度は「経済倫理」をテーマとして開催する予定である。

実践活動では、「世界の貧しい人々に愛の手を」の会 (Sophia Relief Service) を研究所の下部組織として設立 (1981年5月) し、アジア・アフリカを中心とした国の援助機関に、全国からの寄付金によって現在までに総額約7千万円の資金協力を行ってきた。

以上、本研究所は、研究、教育、実践の各活動の推進によって、現代社会において微力ながら社会正義の促進に寄与するべく努力するものである。

Ⅱ 所員・事務局

所 長	アンセルモ・マタイス	文学部教授 (人間学, 倫理学)
所 員	ロジャー・ダウニー	経済学部助教授 (アジア経済論)
	垣 花 秀 武	理工学部教授 (核分裂・核融合, 科学哲学)
	松 本 栄 二	文学部教授 (社会福祉論)
	緒田原 涓 一	経済学部教授 (国際経済学)
	大河内 繁 男	法学部教授 (行政学)
	渡 部 清	文学部教授 (哲学)
	デヴィッド・ウェッセルズ	外国語学部助教授 (国際関係論)
	山 田 経 三	経済学部助教授 (組織・リーダーシップ論)
客員研究員	エドワルド・ホルヘ・アンソレーナ	文学部非常勤講師 (人間学)
事 務 局	保 岡 孝 顕	
	大 竹 靖	
研究所所在地	〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学中央図書館7階 713号室	

Ⅲ 研究活動

1. 所員研究

昭和61年度の研究成果として、「低所得者層の住宅と経済開発の関係について」エドワード・ホルヘ・アンソレーナ、「解放の神学の先進諸国への挑戦」“Work in the Modern World-Towards a Theology of Work,” 山田経三, “Principles of Science and Technology Cooperation in Asia,” 垣花秀武各所員の論文を本書『社会正義』紀要6に取りまとめた。

2. 学内共同研究

1) 発展途上国の経済・社会開発の諸問題（昭和59年度～61年度）

研究代表者：緒田原涓一

研究分担者：ロジャー・ダウニー，浜田寿一（経済学部経済学科助教授），堀坂浩太郎（外国語学部ポルトガル語学科助教授），猪口邦子（法学部国際関係法学科助教授），鬼頭宏（経済学部経済学科助教授），松下満雄（法学部国際関係法学科非常勤講師），山田経三，保岡孝顕

研究助成：昭和59年度～61年度上智大学学内共同研究助成金総額

2,106,000円

研究目的：発展途上国諸国の問題は、経済学の分野で1950年代からすでにとりあげられ、さらに経済発展論というかたちで掘り下げられてきた。しかし、現実の発展途上諸国は、一部の NICs 諸国においてその成功をみるものの、南々問題といわれるような低所得発展途上国の課題をますます深刻化させている。そこでは、経済的成果があがらないままに、政治的問題に課題を転化させる傾向もあらわれている。キリスト教会も真剣な関心を寄せている。本共同研究では、上記の学内スタッフの専門領域を生かして総合的に研究を進めようとするものである。

研究発表：'86年4月25日「ブラジルの農地改革の動き」堀坂浩太郎

'86年6月27日「カダフィの政治と経済」緒田原涸一

'86年10月24日「インドネシア経済の近況」ロジャー・ダウニー

'86年11月14日「保護政策と工業製品輸出—オーストラリアのケース」浜田寿一

'86年12月19日「日本とラテンアメリカの将来」福地崇生（筑波大学教授）

'87年1月9日「社会環境に対する組織の適応」山田経三

研究成果：『学内共同研究「発展途上国の経済・社会開発の諸問題」昭和61年度』1987年5月発行予定

2) カトリック社会教説と経済倫理（昭和61年度～62年度）

研究代表者：アンセルモ・マタイス

研究分担者：エドワード・ホルヘ・アンソレーナ，ピセンテ・ボネット（文学部人間学研究室助教授），ハイメ・カスタンニエダ（文学部人間学研究室教授），ロジャー・ダウニー，今井圭子（外国語学部国際関係副専攻助教授），垣花秀武，ホアン・マシア（神学部神学科教授），デヴィッド・ウェッセルズ，山田経三，保岡孝顕

研究助成：昭和61年度上智大学学内共同研究助成金 750,000円

研究活動：月例研究会は，月一度（第三木曜日 午後5時～7時）行い，その日程は以下の通りである。

'86年4月24日「今後の研究テーマの進め方」

'86年5月22日第6章「正義と経済体制」『経済の倫理』（リチャード・ディジョージ著）今井圭子

'86年6月26日「『政治とマーケット』（リンドローム著）をめぐって」デヴィッド・ウェッセルズ

'86年7月10日「貧困者層への低利子融資と低廉住宅計画について」ホルヘ・アンソレーナ（報告者），山田経三（コメンター）

'86年11月6日「アメリカ・カトリック司教団経済教書—万人のた

「め」の経済的正義を」ロジャー・ダウニー

'86年11月28～30日

「現代社会と正義」シンポジウム参加、特に経済正義
について

研究経過：研究活動の方向として、まず経済学の基礎理論の把握に努める。研究分担者のうち、経済学専攻のダウニー、発展（開発）経済学専攻の今井、経営学専攻の山田、政治学・人権専攻のウェッセルズを中心に、適切な文献講読を一つの方法として試み、研究メンバー全員による討論を展開することに終始努めた。

報告主要：①今井報告においては、資本主義モデル（産業資本の蓄積、生産手段の私有、自由市場システム）、社会主義モデル（産業ベース、生産手段の社会所有、中央集権的プランニング）について詳細な分析があり、各モデル、体制の比較検討がなされ、最後に、経済体制と正義について、とくにモラルの観点からモデルの考察（非道徳的体制）について討論を展開した。

②ウェッセルズ報告では、米国のリンドローム教授（エール大学）の著した、*Politics and Market* をめぐって、経済体制としての資本主義の特性について論じた。

③アンソレーナ・山田報告は、経済学がどのようにして低所得層、および貧困層に重要な貢献と役割を果たすのか、という問題提起を行った。報告を特徴づけるおもな点は、(i)援助について、最も困っている人々へ直接とどくこと、(ii)少数の者に多くの援助よりも、より多くの貧しい人々にゆきわたる援助の方法を、(iii)援助のやり方は、援助側の判断のみではなく、貧しい人々が切実に何を望むかを充分考慮に入れるべきである、に要約される。また実践例として、バングラデシュのグラミン銀行の低利子融資制度（モデル）、パキスタン、フィリピンの低廉住宅計画の報告があった。報告は、スライド、OHPなどを導入して行われた。

④ダウニー報告は、カトリック社会のみならず、善意ある多くの国

際世論に影響を与えている 米国司教団の「経済教書」について、1986年11月10日～13日の全米司教会議で採択し、公表された「万人のための経済的正義を」の要点について概要を示した。報告は、(i)一般原則、(ii)雇用、(iii)貧困、(iv)食糧・農業、(v)世界経済、(vi)官民協調、(vii)教会、についての教書の組み立てを説明したうえで、貫かれている「貧者優先」の原則を明らかにした。討論においては、経済理論的に多少疑問の残る箇所も教書にはみられるとの指摘がなされたが、人間尊厳の制度としての経済活動、経済的公正、経済への平等参加について、「経済教書」は勇気と希望をもって、公的機関、民間機関でも検討されるべきである点、高く評価できるという見解が出された。

なお、本研究代表のマタイスは、同教書の解説を取りまとめ、『カトリック新聞』（1986年11月30日号）で発表した。

本研究テーマに沿って行われた上智大学社会正義研究所主催の「現代社会と正義」国際シンポジウムが11月28日～30日まで本学で開催され、各研究分担者も参加した。

研究成果：今年度研究の成果を、報告書として取りまとめ刊行し、関係者における討論の素材として配布する予定である。本研究分担者は研究の第一年度の基礎的研究活動に積極的に参加したことによって、これまでに一応の研究活動を取めることができた。

展望と課題：「カトリック社会教説と経済倫理」のテーマは、現代の国際政治経済体制の批判的考察として、重要かつ緊急を要する課題である。

南北格差の是正、人間らしい社会秩序、環境を構築すべく、そのための理論的枠組と社会運動（正義を求めて）は、今後、地球規模においてリンケージ（関連）し合いながら、具現化をみなければならぬ。こうした点をふまえて本研究は研究の最終年度（昭和62年度）に受け継がれる。

Ⅳ 教育活動

1. 講演会

1986年5月2日 「フィリピン民衆の選択—マルコス独裁とアキノ新政権をめぐる
って」 (本学中央図書館 812会議室)

講師 ホアキン・ベルナス [Joaquin G. Bernas] (アテネオ・デ・マニラ大学
学長)

1986年6月19日 「毛沢東以後の改革」 (本学中央図書館 812会議室)

講師 サムエル・キム [Samuel S. Kim] (アメリカ, モンマス大学教授)

共催 国際関係研究所

1986年10月4日 「解放の神学と現代音楽」 (本学10号館講堂)

講師 クラウス・フーバー [Klaus Huber] (フライブルク音楽大学教授)

共催 東洋宗教研究所(主管), ドイツ語圏文化研究所, 後援 スイス協会

1986年10月23日 「アウシュビッツ, 心に刻む」 (本学10号館講堂)

講師 タデウス・シマンスキー [Tadeusz Szymanski] (アウシュビッツ博物
館元副館長)

共催 ドイツ語圏文化研究所

1986年11月15日 平和を考える集い「反ナチ抵抗運動“白バラ”をめぐる」
(本学10号館講堂)

講師 山下公子 映画「白バラは死なず」を上映

共催 ドイツ語圏文化研究所(主管)

2. シンポジウム

1986年11月28日(金)~30日(日)

第6回国際シンポジウム「現代社会と正義」 (本学7号館特別会議室)

共催 国際基督教大学社会科学研究所

——プログラム——

第1日 11月28日(金)

3:00p.m. あいさつ

オリエンテーション アンセルモ・マタイス

(上智大学社会正義研究所所長)

3:30p.m. 基調講演

「正義とは何か」大江健三郎(作家)

「正義と平和を求めて—フィリピンの場合」ホアキン・ベルナス

[Joaquin G. Bernas] (アテネオ・デ・マニラ大学学長)

第2日 11月29日(土)

10:00a.m. 分科会(1) 「西洋における正義」

報告 稲垣良典(九州大学教授)

討論 ハイメ・カスタニエダ(上智大学教授)

藤川吉美(成蹊大学講師)

司会 山田経三(本研究所所員)

1:30p.m. 分科会(2) 「日本における正義」

報告 田中成明(京都大学教授)

討論 阿南成一(南山大学教授)

大輪靖宏(上智大学教授)

司会 垣花秀武(本研究所所員)

3:40p.m. 分科会(3) 「国家と正義」

報告 笹川紀勝(国際基督教大学教授)

討論 ホセ・ヨンバルト(上智大学教授)

宮崎繁樹(明治大学教授)

司会 大河内繁男(本研究所所員)

第3日 11月30日(日)

9:30a.m. 講演 「正義と平和の世界秩序を求めて」

サウル・メンドロビッツ [Saul H. Mendlovitz]

(ワールド・ポリシー・インスティテュート)

10:30a.m. 分科会(4) 「富の生産・分配の正義」

報告 西川潤(早稲田大学教授)

討論 矢内原勝(慶応義塾大学教授)

北沢洋子（国際問題評論家）

司 会 ロジャー・ダウニー（本研究所所員）

1 : 30p.m. 共同の祈り

J. ベルナス

笹川紀勝

2 : 00p.m. 総括討論 「正義の促進のために一私たちの選択」

討 論 塩沢美代子（アジア女子労働問題専門家）

J. ベルナス

神島二郎（立教大学名誉教授）

伴野雄三（上智大学教授）

S. メンドロビッツ

司 会 A. マタイス

5 : 00p.m. レセプション

V 実践活動

1. 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会

上智大学は1979年12月上旬からインドシナ難民救援のため、募金活動（街頭・新宿駅前）を開始し、さらに1980年2月から同年10月まで、タイの難民キャンプに延べ152名の本学教職員・学生によるボランティアを派遣してきた。また、1981年3月22日から同年4月7日まで、A. マタイスを団長とする4名の難民キャンプ調査団が、タイ、インド、パキスタン、ケニア、ソマリアを訪れ、現地で救援活動を行っている関係者と援助協力の可能性を検討した。調査団は帰国後、学内における報告会の開催、報告書「難民調査の旅」を作成し、1981年5月に「世界の貧しい人々に愛の手を」の会が発足した。

本会は、本研究所設立と同時にこれまで本学の外事部が主管してきた難民救援活動を本研究所の実践活動のひとつとして引き継いだ。また従来の難民救援活動の全学的とりくみの精神を生かすため、本会は本学の教職員・学生ボランティア・学外のボランティアによって構成されている。なお、評論家で『人間の大地』著者の犬

養道子氏には会のアドバイザー（1982年1月より）として協力を得ている。

1) 募金協力者 約 850 名

2) 募金総額 79,078,146円（1981年5月～1987年3月）

3) 援助協力先

① パキスタン

- ・カリタス・パキスタン

ベシャワルのアフガン難民のために、テント、医療品、食糧、教材等の援助を行った（1981年より83年まで）。援助金額 5,990,750円

- ・聖ミカエル・カトリック教会

ベシャワルの貧しいキリスト教徒のために、住宅建設資金の援助を行っている。援助金額 2,023,050円

- ・アフガン難民救済連合

ベシャワルのアフガン難民のために、小麦粉、米、食用油、紅茶、綿等の援助を行った（1982年）。援助金額 2,312,300円

② インド

- ・ムザファプル・カトリック教会（ビハール州）

バングラデシュ難民および清掃業者の子弟のための学校への資金援助を行っている。援助金額 2,107,350円

- ・デディアパダ社会奉仕協会（グジャラト州）

貧困に苦しむアディバン族の子どもたちのために教育活動等を行っている。
援助金額 3,899,800円

- ・NAYEE・AASHA（ウッタール・プラデーシュ州）

ハンセン氏病患者のため施設に対する援助を行っている。
援助金額 674,400円

③ ベトナムの医療品援助。援助金額 1,448,050円

④ フィリピン

- ・イグナチオ司牧センター（マニラ）

失業者のための縫製プロジェクトに資金援助を行った（1986年）。
援助金額 190,627円

⑤ ケニア

・カトリック救済事業団（C. R. S.）

トゥルカナ地方のカクマ、マルサビット等で井戸掘り活動、病院への水ポンプ設置、マルサビット飢餓遊牧民51世帯へ「自立のための家畜貸与」プロジェクトに1981年～84年まで援助を行った。援助金額 7,378,650円

・マリア医療援助会

トゥルカナ地方のカクマで、貧しい子どもたちのための小学校の教室建設、奨学金の援助等を行っている。援助金額 6,538,000円

⑥ ソマリア

・カリタス・ソマリア

コリオーレのエチオピア人難民キャンプでの食糧援助、浅井戸ポンプ・プロジェクトおよび難民とソマリアの貧しい人びとのために総合病院建設を行っている。援助金額 17,260,074円

⑦ エチオピア

・イエズス会救済事業（J. R. S.）

1982年より南部シダモ州ゴザで飢餓難民のための巡回保健医療活動を行っている。さらに1985年より北部被災民の再移住地である南西諸州での緊急医療を実施している。援助金額 11,547,760円

⑧ スーダン

・スーダン・エイドなど

ゲダレフのタワワ・キャンプで、エチオピア難民を対象に自立化のための職業訓練等を行っている。また、ゲダレフ地域のカトリック教会はエチオピア難民のためのアラビア語講習を開いている。南部ジュバでは貧しい子どもたち、難民のための教育を行っている。援助金額 3,945,962円

⑨ モザンビーク

・リシंगा・カトリック教会

飢餓難民のための救援物資の配布等を行っている。本会からは物資運搬のためのジープを他の援助団体と協力して送付した。援助金額 1,000,000円

⑩ メキシコ

- メキシコシティ 聖家族教会

地震の被災者のための援助活動を行っている。援助金額 1,180,000円

⑪ コロンビア

- イエズス会

火山噴火の被災者のための援助活動を行っている。援助金額 1,000,000円

⑫ エクアドル

- サレジオ会

インディオの文化的意識をまもるための教材等の作成資金に協力した。

援助金額 544,320円

4) 他の難民救援団体との交流

難民救援連絡会（難民救援にたずさわる19団体が参加）に加盟し、2カ月に1回の例会に参加している。

5) 学内外での募金活動

'86年10月16日～17日 チャリティ・バザー（上智大学） 収益金 197,400円

'86年12月13日～14日 街頭募金（国鉄新宿駅西口） 収益金 194,061円

6) ニューズ・レターの発行

会の活動は年2回「世界の貧しい人々に愛の手を」を発行し、寄付協力者への報告、難民救援へのアピールを行っている。

7) 募金の受付は――

口座名義 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会

郵便振替口座 東京 8-86078

銀行口座（普通預金） 太陽神戸銀行麴町支店 3090766

第一勧業銀行四谷支店 1310474

Ⅵ 出版活動

1. 所員研究の成果

『社会正義』紀要1, 上智大学社会正義研究所, 1982年3月

「平和と正義の実現のために」柳瀬睦男, 「ヨハネ・パウロ2世の社会教説」

アンセルモ・マタイス, 「人間の顔をもつ国際秩序」高野雄一, 「マス・メディアと社会正義—フィリピンの場合を中心に」武市英雄, 「所有についてのカトリック思想」ブルクハルト・ヴェクハウス, 「新回勅『労働』に基づく経営理念」山田経三, “Toward a Global Spirituality,” Patricia Mische, 活動報告 1981-82

『社会正義』紀要2, 上智大学社会正義研究所, 1983年3月

「『正義』に関する一考察」A. マタイス, 「コミュニケーションと民衆参加」エドワルド・ホルヘ・アンソレーナ, 「南北間の情報の流れ」武市英雄, 「働きすぎなのか？」B. ヴェクハウス, 「アジアにおける開発と人権—アジア隣人からの挑戦と日本人の責任」山田経三, 「難民救援活動のあり方—オーストリアと西ドイツ両国の『カリタス』の場合」渡部清, “The Impact of the Nuclear Age on Public Health,” Rosalie Bertell, 活動報告 1982-83

『社会正義』紀要3, 上智大学社会正義研究所, 1984年3月

「社会問題に関するカトリック教会の考え方」A. マタイス, 「貧しい人びとの住宅に関する財政問題について」E. J. アンソレーナ, 「新しい技術の導入と労働組合の力」B. ヴェクハウス, “The Japanese TNCs and the Transfer of Technology to Asian Developing Countries,” Keizō Yamada, “The Role of Japan in the Third World,” Helder Camara, 「難民の歴史と世界の対応」ディーター・ショルツ, 「経済危機に関する倫理的省察(要約)」カナダカトリック司教協議会社会問題司教委員会, 活動報告 1983-84

『社会正義』紀要4, 上智大学社会正義研究所, 1985年3月

「発展途上国との協力についての提言」垣花秀武, 「現代世界における解放の神学」山田経三, 「権威主義体制の一考察—フィリピンの場合: マルコスの実験」保岡孝顕, 「平和教育の試み」A. マタイス, 「解放の神学—グスタボ・グティエレスの著書をふまえて」山田経三, 「フィリピン社会と教会の役割」フエデリコ・エスカレル, “The Challenge of Peace—What does it say? What does it mean?” Peter J. Henriot, 「米国カトリック司教団経済教書第一次草案(要約)」, 活動報告 1984-85

『社会正義』5, 紀要上智大学社会正義研究所, 1986年3月

「現代における『神の国』とは」A. マタイス, 「カトリック教会の社会教説に見る人権と社会正義」山田経三, 「日本におけるインドシナ難民の定住状況と今後の課題」保岡孝頭, 「日本における“開発コミュニケーション”—歴史的な意味合いと今日の課題」武市英雄, 「アジアの農村開発の理念と実践—スリランカのサルボダヤ運動」A. T. アリヤラトネ, 「今日のイエズス会の大学」ペーター・ハンス・コルヴェンバッハ, “Speaking about God,” Gustavo Gutiérrez, 活動報告 1985-86

『社会正義』紀要6（本書）, 上智大学社会正義研究所, 1987年3月

「低所得者層の住宅と経済開発の関係について」エドワード・ホルヘ・アンソレーナ, 「解放の神学の先進諸国への挑戦——現代社会における福音宣教」山田経三, “Principles of Science and Technology Cooperation in Asia,” Hidetake Kakihana, “Work in the Modern World——Towards a Theology of Work,” Keizo Yamada, 「フィリピン民衆の選択——フィリピン二月革命とアキノ新政権」ホアキン・ベルナス, 「コミュニケーション・文化・宗教——フィリピンの経験」ハイメ・L・シン, 「日本の解放の神学を求めてI——解放の神学における『貧しさ』および『貧しい者』の意味」ホアン・リベラ, 活動報告 1986-87

2. 学内共同研究の成果

1) 学内共同研究「正義」班

『学内共同研究「正義」報告書—昭和54年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1980年4月

『学内共同研究「正義」報告書—昭和55年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1981年11月

『学内共同研究「正義」報告書—昭和56年度』上智大学学内共同研究「正義」班, 1982年5月

2) 学内共同研究「平和研究」班

『学内共同研究「平和研究」報告書—昭和57年度』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1983年7月

『学内共同研究「平和研究」報告書—昭和58年度』上智大学学内共同研究「平和

研究」班, 1984年5月

『学内共同研究「平和研究—難民と人権」報告書—昭和59年度』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1985年10月

A. マタイス『現代カトリック教会の平和論』上智大学社会正義研究所, 1982年10月, 1983年1月重版, 1986年10月第三版

アメリカ・カトリック司教協議会著, A. マタイス, 片平博訳『平和の挑戦—戦争と平和に関する教書』中央出版社, 1983年11月

『ヒロシマ・ナガサキ平和学習の旅』上智大学学内共同研究「平和研究」班, 1983年10月

3) 学内共同研究「食糧問題」班

『学内共同研究「食糧問題」報告書—昭和57年度』上智大学学内共同研究「食糧問題」班, 1983年3月

『学内共同研究「食糧問題」報告書—昭和58年度』上智大学学内共同研究「食糧問題」班, 1984年3月

4) 学内共同研究「発展途上国問題」班

『学内共同研究「発展途上国問題」報告書—昭和59年度』上智大学学内共同研究「発展途上国問題」班, 1985年3月

『学内共同研究「発展途上国問題」報告書—昭和60年度』上智大学学内共同研究「発展途上国問題」班, 1986年3月

5) 学内共同研究「解放の神学」班

『学内共同研究「解放の神学」報告書—1985年度』上智大学学内共同研究「解放の神学」班, 1986年7月

3. 海外調査研究の成果

『アジア・アフリカ難民の実情—上智大学, カリタス・ジャパン合同アジア・アフリカ難民現地調査報告』上智大学社会正義研究所, 1983年6月

『1984-85 アフリカ難民の実情—上智大学アフリカ難民現地調査報告』上智大学社会正義研究所, 1985年5月

4. 講演会のとりまとめ

『マザー・テレサを囲んで—Dialogue With Mother Teresa』上智大学社会正

義研究所, 1981年10月

『ソリダルノシチ〔連帯〕のワレサ委員長を囲んで』上智大学社会正義研究所,
1981年10月

5. シンポジウムの成果

『人間尊重の世界秩序をめざして』上智大学社会正義研究所, 1982年6月

基調講演: 地球化時代の変革, 国家安全保障の拘束服, 世界秩序の推進に対する大学の役割, 世界秩序にむけての戦略, 地球的精神性をめざして

シンポジウム: 日本の安全保障, 東アジア世界の現状と展望, 地球社会化教育
国際秩序のあるべき姿

隅谷三喜男, A. マタイス編『アジアの開発と民衆』YMCA出版, 1983年11月

基調講演: 近代化の再検討から内発的發展へ, アジアの経済發展と日本

分科会: 韓国報告—開発にたいする民衆の声, フィリピン報告—日系企業進出
とフィリピン社会, インドネシア報告—インドネシアにおける開発と正義, イ
ンド報告—人工・食糧・開発, 総括討論: アジアの開発と日本—今後のかかわ
り方

緒方貞子, A. マタイス編『世界の難民』明石書店, 1984年12月

基調講演: 難民の歴史と世界の対応, 難民の人権—日本の対応, 分科会: アフ
リカ難民—救援活動の現場, アフガニスタン難民—国を離れた350万人の希望
と苦悩, インドシナ難民—ポート・ピープルとランド・ピープル, 日本国内の
インドシナ難民—定住促進にむけて, 総括討論: 世界の難民と人権—私たちの
自覚と連帯を求めて

関 寛治, A. マタイス編『平和のメッセージ』明石書店, 1985年11月

基調講演: 『平和の挑戦』—それは何を語っているか, 平和教書と世界秩序,
分科会: 核の脅威, 軍需産業・開発, アームズコントロールと軍縮, 日本の平
和問題, 総括討論: 平和の挑戦—私たちの役割

G. グティエレス, A. マタイス編『解放の神学』明石書店, 1986年11月

基調講演: 『解放の神学』—神について語ること, 解放の神学はアジアの教会
で可能か, 分科会: 聖書における解放, バチカンのとる Option for the poor,
南米における解放の神学, アジアにおける解放の神学, 総括討論: 解放の神学

と私たち

6. 資 料

- 1) 『国際相互依存時代における人間尊重』上智大学社会正義研究所, 1981年10月〔第1回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 2) 『アジアにおける開発と正義』上智大学社会正義研究所, 1982年10月〔第2回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 3) 『世界の難民と人権』上智大学社会正義研究所, 1983年12月〔第3回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 4) 『平和の挑戦』上智大学社会正義研究所, 1984年12月〔第4回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 5) 『解放の神学』上智大学社会正義研究所, 1985年11月〔第5回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 6) 『現代社会と正義』上智大学社会正義研究所, 1986年11月〔第6回国際シンポジウムの英文邦訳資料〕
- 7) 『難民調査の旅』上智大学難民調査団, 1981年4月〔1981年3月～4月に実施された調査の成果〕
- 8) スライド『難民調査の旅』上智大学難民調査団, 1981年5月
- 9) スライド『アジア・アフリカ難民の実情』上智大学, カリタス・ジャパン合同アジア・アフリカ難民調査団, 1983年6月〔1983年2月～4月に実施された調査の成果〕（貸出可）
- 10) スライド『第3回アフリカ難民現地実情調査』上智大学難民調査団, 1985年5月〔1984年12月～1985年1月に実施された調査の成果〕
- 11) パネル
アジア・アフリカ難民の実情を伝えるもの（貸出可）

7. その他の出版物

- 1) A. マタイス『地球社会をめざす教育』中央出版社, 1984年7月
- 2) A. マタイス『地球社会をめざす教会』中央出版社, 1985年5月
- 3) 相馬信夫, 酒井新二, A. マタイス『日本にとって「解放の神学」とは』中央出版社, 1986年9月

- 4) 保岡孝顕『鉄の男ワレサー連帯の精神は死なず』中央出版社, 1984年8月
- 5) パンフレット『上智大学社会正義研究所』1981年10月
- 6) 英文パンフレット “Institute for the Study of Social Justice, Sophia University” 1984年3月, 1985年3月, 1986年3月, 1987年3月
- 7) ニュース・レター『世界の貧しい人々に愛の手を』, 創刊号 (1981年6月), 第2号 (1981年12月), 第3号 (1982年6月), 第4号 (1982年12月), 第5号 (1983年6月), 第6号特集—国際シンポジウム「世界の難民と人権」(1984年2月), 第7号 (1984年6月), 第8号 (1985年2月), 第9号 (1985年6月), 第10号 (1985年12月), 第11号 (1986年6月), 第12号 (1986年12月) [本研究
所気付, 「世界の貧しい人々に愛の手を」の会発行, 年2回]
- 8) アメリカ・カトリック司教協議会著, A. マタイス, F. ハクジャ, 片平博
訳『マルクス主義共産主義に関する教書』上智大学社会正義研究所, 1984年8
月

INSTITUTE FOR THE STUDY OF SOCIAL JUSTICE (ISSJ)

I ORIGIN AND AIM

ISSJ was established at Sophia University (Jesuit Univ.) in 1981. Its purpose is to investigate the conditions of social justice in the domestic and international arena and to contribute to the promotion of social justice, peace and development of humanity based on interdisciplinary efforts. The creation of ISSJ was a prompt response to the famous Decree 4 (the promotion of justice in the name of the Gospel) of the Thirty-second General Congregation of the Society of Jesus (1975).

The Institute emphasizes the need for wider support and cooperation from various research institutions both at home and abroad in pursuit of this objective. In accordance with this purpose, the Institute sets up research projects on justice issues.

One of the most important projects of the Institute is its annual international symposium on peace, justice, and development issues.

Another purpose of the Institute is to find a relevant relationship between research and teaching. Since the staffs of the ISSJ are faculty members of Sophia University, they teach in their respective specialities. So, ideas and insights originating from research projects being conducted by the Institute also influence students through their classes.

Results of research projects of the Institute are published annually. One of the main publications is called *Shakai Seigi*=*Social Justice*.

II ADMINISTRATION AND STAFF

Director

Anselmo MATAIX (Professor, Philosophy of Man, Ethics)

Staff Members

Roger DOWNEY (Assistant Professor, Economics, Social Accounting)

Hidetake KAKIHANA (Professor, Nuclear Fission and Fusion)

Eiji MATSUMOTO (Professor, Social Welfare)

Ken'ichi ODAWARA (Professor, International Economics)

Shigeo OHKŌCHI (Professor, Public Administration)

Kiyoshi WATABE (Professor, Philosophy)

David WESSELS (Assistant Professor, Political Science)

Keizō YAMADA (Assistant Professor, Management)

Visiting Researcher

Eduardo Jorge ANZORENA (Lecturer, Philosophy of Man)

Administration

Takaaki YASUOKA

Yasushi OHTAKE

Location

The Institute is located at Sophia University (No. 713, 7th Floor of the Central Library Building), 7-1, Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102, Japan, Tel. 03-238-3023, 3695.

III ACTIVITIES

The activities of the Institute are organized in four categories: A-Research, B-Symposia and Public Lectures, C-Action Programs and D-Publications.

A-Research (1986-87)

An interdisciplinary research is carried out in the form of intra-campus research group financed by Sophia University.

Catholic Social Teachings and Economic Ethics

This was organized by Professor Anselmo Mataix. Research activities were made in the following areas: Book Reviews on BUSINESS ETHICS by Richard De George; POLITICS AND MARKET: World Political Economic Systems by Charles Rindblom; ECONOMIC JUSTICE FOR ALL by U. S. Catholic Bishops; Economics for the Vulnerable and the Poor: Case Study of Bangladesh, India and the Philippines. The research was focused primarily on raising the human and ethical dimensions of economic life. Research members: Vicente Bonet, Assistant Professor, Philosophy of Man; Jaime Castañeda, Professor, Political Philosophy; Keiko Imai, Assistant Professor, Development Economics; Hidetake Kakihana, Professor, Nuclear Fission and Fusion; Juan Masia, Professor, Theology; Eiji Matsumoto, Professor, Social Welfare; Roger Downey, Assistant Professor, Economics; David Wessels, Assistant Professor, Political Science; Takaaki Yasuoka, ISSJ.

Problems and Prospects of Socio-Economic Development in Developing Countries

This has been organized by Professor Ken'ichi Odawara as the three year research program (1984-87). Research activities for 1986-87 period were made in the following areas: Japan and Latin America: Present and Future Relations; Protection Policy and Export of Industrial Goods: Case Study of Australia; Recent Developments in the Indonesian Economy; the Politics of Kadaffi and the Libian Economy; Land Reform in Brazil.

Research members: Toshikazu Hamada, Assistant Professor, International Economics; Kuniko Inoguchi, Assistant Professor, International Politics; Hiroshi Kitō, Assistant Professor, Economic History; Kōtarō Horisaka, Assistant Professor, Brazilian Economy, Mitsuo Matsushita, part-time Lecturer, Anti-monopoly Law; Keizō Yamada, Assistant Professor, Management.

Field Research on Refugees and Displaced Persons

Research was conducted in Kenya, Ethiopia, Sudan, Somalia

and Tanzania (March 7-March 28,1987). The research team headed by Professor Kiyoshi Watabe, included Takaaki Yasuoka of the Institute for the Study of Social Justice, Kazuo Yokogawa, Caritas Japan, and Yōichi Horikoshi, a Medical Student.

Through this research every other year, the Institute's Sophia Relief Service succeeded in getting vital information on the activities of relief and rehabilitation of African refugees and displaced persons for about 850 Japanese benefactors.

The research team has established contacts with non-governmental organizations such as Caritas Somalia (Bishop Salvatore Colombo), the Jesuit Refugee Services in Africa (Rev. Louis Plamondon, SJ), the Jesuit Relief Service in Ethiopia (Rev. Roland Turenne, SJ), Sudan Aid and UNHCR Sudan (Rev. Ed Brady), Catholic Relief Services in Kenya and Ethiopia and other relief agencies abroad.

B-Symposia and Public Lectures

• Symposia

The 6 th International Symposium

It was held by the joint program of this Institute and the Social Science Institute of International Christian University from Nov. 29 to 31, 1986 at Sophia University. The theme was JUSTICE IN THE CONTEMPORARY WORLD.

The 1st Day Nov. 28 (Fri.)

Opening

ORIENTATION: Anselmo Mataix (Director, Institute for the Study of Social Justice, Sophia Univ.)

KEYNOTE-LECTURES "Justice in the Contemporary Japan," Kenzaburō Ohe (Writer) "The Filipino Search For A NEW SOCIAL ORDER," Joaquin G. Bernas, SJ (President, Ateneo de Manila University, the Philippines)

The 2nd Day Nov. 29 (Sat.)

WORKSHOP (1) "Idea of Justice in the Western World"

Report: Ryōsuke Inagaki (Kyūshū Univ.), Comment: Jaime Castañeda (Sophia Univ.), Yoshimi Fujikawa (Seikei Univ.)

WORKSHOP (2) "Idea of Justice in Japan" Report: Shigeaki Tanaka (Kyoto Univ.), Comment: Seichi Anan (Nanzan Univ.), Yasuhiro Ohwa (Sophia Univ.)

WORKSHOP (3) "State and Justice" Report: Norikatsu Sasagawa (International Christian Univ.), Comment: Jose Llompert (Sophia Univ.), Shigeki Miyazaki (Meiji Univ.)

The 3rd Day Nov. 30 (Sun.)

LECTURE "A Just World Peace and the World Political Economy," Saul H. Mendlovitz (World Policy Institute, USA)

WORKSHOP (4) "Economic Justice: Distribution of Wealth" Report: Jun Nishikawa (Waseda Univ.), Comment: Katsu Yanaihara (Keio Univ.), Yōko Kitazawa (Critic of International Affairs)

PRAYER, PANEL DISCUSSION "Promotion of Social Justice and Our Role," Panelists: Miyoko Shiozawa (Kyōei Gakuen Univ.), Jirō Kamishima (Professor Emiritus, St. Paul Univ.), J. Bernas, SJ, Yūzō Tomono (Sophia Univ.), S. H. Mendlovitz, Chairperson: A. Mataix

• Public Lectures

(1) "People's Power and the Filipino February Revolution," Dr. Joaquin G. Bernas, SJ, President, Ateneo de Manila University. (May 2, 1986, Library-812)

(2) "Post Mao Reform in China," Dr. Samuel S. Kim, Professor Monmouth College, USA. (Jointly sponsored by the Institute of International Relations, June 19, 1986, Library-812)

(3) "A Liberation Theology and Contemporary Music," Dr. Klaus Huber, Professor, Freiburg University of Music, West Germany. The film "Das Volk stirbt nie" was presented. And the panel talks on the subject were given. K. Huber, A. Mataix, and Mr. Toshio Hosokawa, Composer. (Jointly sponsored by the Institute

of Oriental Religions, Institute for the Culture of German-speaking Areas, October 4, 1986, Auditorium)

(4) "Memory of Oswiecim Nazi Concentration Camp," Mr. Tadeusz Szymanski, Former director of Oswiecim Museum, Poland. (Jointly sponsored by the Institute for the Culture of German-speaking Areas, October 23, 1986, Auditorium)

(5) "Resistance Movement (Die Weisse Rose) in Germany," Ms. Kimiko Yamashita, Lecturer, Sophia University. The film "Die Weisse Rose" was presented. (Jointly sponsored by the Institute for the Culture of German-speaking Areas, November 15, 1986 Auditorium)

C-Action Programs

The Sophia Relief Service was established on May 1981 within the Institute for the Study of Social Justice.

The Sophia Relief Service is an organization made up of Japanese benefactors who are contributing money to the refugees and displaced people in the world. Funds are occasionally raised through charity shows, bazaars, and symposia. The standing committee directs the periodic disbursement of such funds as collected, to the respective relief organizations who have actively engaged in relief activities.

Every other year, field research on refugees in Pakistan, Kenya, Uganda, Ethiopia, Sudan and Somalia, and Tanzania will be conducted by the member of ISSJ and the volunteers. The reports of such studies help evaluate the effective utilization of donations from the general public for education, shelter, hospital, medical care and food for needy.

Films and slide presentations had been based on those trips utilized effectively by different schools and organizations throughout Japan. Panels, posters and other audio-visual aids are available for any individual or organization who wishes to use them.

Figures of Donations and Disbursement (As of March 1987)

Sophia Relief Service has received ¥79,078,146
from May 1981 up to now.

Disbursement: Pakistan	¥10,326,100	; Ethiopia	¥11,547,760
India	¥ 6,681,550	; Sudan	¥ 3,945,962
Vietnam	¥ 1,448,050	; Mozambique	¥ 1,000,000
Philippines	¥ 190,627	; Mexico	¥ 1,180,000
Kenya	¥13,916,650	; Colombia	¥ 1,000,000
Somalia	¥17,260,074	; Ecuador	¥ 544,320

Donations: You can help Poor People and Refugees in the World
by sending your contributions to: Post Account Number Tokyo 8-
86078 (Sekai no Mazushii Hitobito ni Ai no Te o)

D-Publications

The Institute has emphasized the importance of high quality
research papers and academic publications.

The followings are the books and research papers and other
types of publications during the period of 1981-87.

1. Academic Publications

(1) *Shakai Seigi (Social Justice)* Vol. 1. (Tokyo: Institute for the
Study of Social Justice=ISSJ, Sophia University, 1982) 152 pp.

Contents:

Toward Achieving Peace and Justice/Social Teaching of Pope
John Paul II/The International Order with a Human Face/Mass
Media and Social Justice—in the case of the Philippines/Catholic
Thought on Property/The Management Philosophy based on the
New Encyclical “Laborem Exercens”/Global Spirituality/The Re-
ports: Activities of 1981-82/

(2) *Shakai Seigi (Social Justice)* Vol. 2. (Tokyo: ISSJ, Sophia
University, 1983) 147 pp.

Contents:

A Study on Justice/Communication and Citizen's Participation/
Information Flow between the Developed and the Developing
World/Do they really work too hard? /Development and Human

Rights in Asia-The Challenge from Asian Neighbors and Japanese Responsibility/The Refugee Aid Programs-the Cases of Caritas Austria and Caritas Germany/The Impact of the Nuclear Age on Public Health/The Reports: Activities of 1982-83/

(3) *Shakai Seigi (Social Justice)* Vol. 3. (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1984) 170 pp.

Contents:

From Rerum Novarum to Laborem Exercens/Financing Housing of the Poor/Employment of New Technology, and the Strength of Labor Unions/The Japanese TNCs and the Transfer of Technology to Asian Developing Countries/The Role of Japan in the Third World/The World Refugee Problem: Our Responsibility and Role/Ethical Reflections on Economic Crisis/The Reports: Activities of 1983-84/

(4) *Shakai Seigi (Social Justice)* Vol. 4. (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1985) 191 pp.

Contents:

Proposal for Collaboration with Developing Countries/The Theology of Liberation in the Modern World/A Study of "An Authoritarian Rule"-A Case Study of the Philippines: The Marcos' Experiment/Attempt towards Peace Education/(Study Note) The Theology of Liberation-based on the works of Gustavo Gutiérrez/The Role of the Church in the Philippine Society/The Challenge of Peace-What does it say? What does it mean?/Catholic Social Teaching and U. S. Economy-First Draft (Summary)/The Reports: Activities of 1984-85/

(5) *Shakai Seigi (Social Justice)* Vol. 5. (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1986) 244 pp.

Content:

What does "The Kingdom of God" mean to Our Modern Society? /The Human Rights and Social Justice in the Social Doctrine of Catholic Church/A Preliminary Survey of the Problems and

Prospects of Indo-Chinese Refugees Settling in Japan/Implication of "Development Communication" in Japan/Theories and Practices of Asian Rural Development-A Case of Sarvodaya Movement in Sri Lanka/The Jesuit University Today/Speaking about God/The Reports: Activities of 1981-86/

(6) *Shakai Seigi (Social Justice)* Vol. 6. (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1987) 165 pp.

Contents:

Housing and the Economic Development of the Urban Poor/The Challenge of the Theology of Liberation to Industrial countries-The Evangelization in the Modern World/Principles of Science and Technology Cooperation in Asia/Work in the Modern World-Towards a Theology of Work/People's Power and the Filipino February Revolution/Communication, Culture, Religion-The Philippines Experience/Toward a Japanese Theology of Liberation I -"The Poor" and "Poverty" in the Theology of Liberation/The Reports: Activities of 1986-87/

(7) *Ningensonchō no Sekaichitsujo o Mezashite (In Search of Human Dignity and World Order)* (Tokyo: ISSJ, Sophia University, 1982) 105 pp.

This is the Report of the First International Symposium on Human Dignity in the Age of Interdependence which was held at Sophia University from October 30 to November 1, 1981.

(8) A. Mataix and Mikio Sumiya eds., *Ajia no Kaihatsu to Minshū (Development and Justice Issues in Asia)* (Tokyo: YMCA, 1983) 266 pp.

This book was published by the Japan YMCA League, the co-sponsor of the Second International Symposium on Development and Justice Issues in Asia which was held at Sophia University in October 1982.

(9) A. Mataix and Sadako Ogata eds., *Sekai no Nanmin (The World Refugees)* (Tokyo: Akashi Shoten, 1984) 250 pp.

This is the report of the Third International Symposium on World Refugees and Human Rights—Our Roles and Responsibilities which was held at Sophia University in December 1983.

(10) A. Mataix and Hiroharu Seki eds., *Heiwa no Message-Kaku Sensō no Kyōi o Norikoete (Message of Peace—Beyond the Threat of Nuclear Warfare)* (Tokyo: Akashi Shoten, 1985) 225 pp.

This is the report of the Fourth International Symposium on Challenge of Peace and Our Role which was held at Sophia University in December 1984.

(11) A. Mataix and Gustavo Gutierrez eds., *Kaihō no Shingaku Kokusai Shimpojjūmu (A Liberation Theology: International Symposium)* (Tokyo: Akashi Shoten, 1986) 221 pp.

This is the report of the Fifth International Symposium on A Liberation Theology which was held at Sophia University in November 1985.

(12) *Heiwa no Chōsen (The Challenge of Peace)* (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1983) 218 pp.

Contents:

This is the translation of the U. S. Catholic Bishops' Pastoral Letter on War and Peace by Prof. Anselmo Mataix, S. J. and Mr. Hiroshi Katahira as a project of the intra-campus peace study group organized for academic year 1983-84.

(13) A. Mataix, *Chikyū Shakai o Mezasu Kyōiku (Education for a Global Community)* (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1984) 238 pp.

(14) Takaaki Yasuoka, *Tetsu no Otoko Walesa-Rentai no Seishin wa Shinazu (The Iron Man Walesa, The Spirit of Solidarity Shall Never Be Forgotten)* (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1984) 153 pp.

(15) A. Mataix, *Chikyū Shakai o Mezasu Kyōkai (Church for a Global Community)* (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1985) 230 pp.

(16) Keizō Yamada & Nozomu Seki, *Kaihō no Shingaku (A Theology of Liberation by Gustavo Gutiérrez)* (Tokyo: Iwanami Shoten, 1985) 322 pp.

(17) Keizō Yamada, *Keizai no Rinri (Business Ethics by Richard T. De George)* (Tokyo: Akashi Shoten, 1985) 426 pp.

(18) A. Mataix, Nobuo Sōma and Shinji Sakai eds., *Zadankai=Nippon nitotte Kaihō no Shingaku towa: Gendai kara Mirai eno Teigen (Discussion: A Liberation Theology for Japanese Society-Suggestions for the Future)* (Tokyo: Chūō Shuppansha, 1986) 122 pp.

2. Research Papers

(1) *Seigi(Justice) I* (Tokyo: Institute for the Study of Social Justice=ISSJ, Sophia University, 1980) 33 pp.

(2) *Seigi (Justice) II* (Tokyo: ISSJ, 1981) 66 pp.

(3) *Seigi (Justice) III* (Tokyo: ISSJ, 1982) 47 pp.

(4) *Peace Research (Heiwa Kenkyū) I* (Tokyo: ISSJ, 1983) 72 pp.

(5) *Peace Research (Heiwa Kenkyū) II-U. S. Pastoral Letter on War and Peace* (Tokyo: ISSJ, 1984) 63 pp.

(6) *Food Problems in Developing Areas I (Hattentōjōkoku no Shokuryō Mondai) I* (Tokyo: ISSJ, 1983) 68 pp.

(7) *Food Problems in Developing Areas II* (Tokyo: ISSJ, 1984) 103 pp.

(8) *Problems of Socio-Economic Development in Developing Countries I (Hattentōjōkoku no Keizai Shakai Mondai)* (Tokyo: ISSJ, 1985) 137 pp.

(9) *Problem of Socio-Economic Development in Developing Countries II (Hattentōjōkoku no Keizai Shakai Mondai)* (Tokyo: ISSJ, 1986) 143 pp.

(10) *Refugees and Human Rights (Nanmin to Jinken)* (Tokyo: ISSJ, 1985) 120 pp.

(11) *A Study of Liberation Theologies (Kaihō no Shingaku)* (Tokyo: ISSJ, 1986) 109 pp.

These research papers have been published with the financial aid of Sophia University's Intra-campus Research Promotion Program under the Office of the Vice-President for Academic Affairs.

(12) A. Mataix, *Gendai Katorikku Kyōkai no Heiwaron (Contemporary Catholic Church's Treatises on Peace)* (Tokyo:ISSJ, 1982) 30 pp.

(13) *Hiroshima Nagasaki Heiwagakushū no Tabi (A Peace Study Trip to Hiroshima and Nagasaki)* (Tokyo: ISSJ, 1983) 111 pp.

Organized by the Institute for Academic year 1983-84.

(14) *Ajia-Afurika Nanmin no Jitsujō (Situations of Asian and African Refugees-Research findings)* (Tokyo: ISSJ, 1983) 108 pp.

Contents:

Pakistan Report/Kenya Report-Marsabit Re-settlement Project: Kakuma Project/Ethiopia, Somalia, and Uganda Reports.

(15) *Afurika Nanmin no Jitsujō 1984-1985 (Situations of African Refugees and Displaced Persons 1984-85. Research findings)* (Tokyo: ISSJ, 1985) 54 pp.

Contents:

Natural and Man-made Disasters in Ethiopia/Self-help Programs in Somalia/Rehabilitation Works for Ethiopian Refugees and Displaced Persons in Sudan/Slum Improvement Programs in Kenya/ Problems and Prospects.

3. Public Lectures

(1) *Mother Teresa o Kakonde (Dialogue with Mother Teresa)* (Tokyo: ISSJ, 1981) 38 pp.

Contents:

The Most Beautiful Thing in the World-Dialogue with Students/ This is the pamphlet of Mother Teresa's talks before students of Sophia University on her visit to the Campus on April 26, 1981. She visited again on April 24, 1982 and on November 22, 1984 by the invitation of the ISSJ.

(2) *Walesa Iinchō o Kakonde (Leader of Polish Labor Union Solidarity-Mr. Walesa)* (Tokyo: ISSJ, 1981) 15 pp.

Lech Walesa, on the occasion of his first visit to Japan, called on Sophia University, and had a discussion with students in May 1981. He was welcomed by the students and faculty members with

great enthusiasm.

4. Newsletter

The Sophia Relief Service has its office at the Institute, whose primary task is to collect donations from the general public from all over Japan and send these donations to needy people in Asian and African countries. The Sophia Relief Service publishes its newsletter carrying news of various activities concerning the goals of the organizations.

(1) *Newsletter (Sekai no Mazushii Hitobito ni Ai no Te o-Extending Hands to Needy People of the World)*, Vol. 1-I (Tokyo: Sophia Relief Service, May 1981)

(2) *Newsletter*, Vol. 1-II (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1981)

(3) *Newsletter*, Vol. 2-III (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1982)

(4) *Newsletter*, Vol. 2-IV (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1982)

(5) *Newsletter*, Vol. 3-V (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1983)

(6) *Newsletter*, Vol. 3-VI (Tokyo: Sophia Relief Service, February 1984)

(7) *Newsletter*, Vol. 4-VII (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1984)

(8) *Newsletter*, Vol. 4-VIII (Tokyo: Sophia Relief Service, February 1985)

(9) *Newsletter*, Vol. 5-IX (Tokyo: Sophia Relief Service, June 1985)

(10) *Newsletter*, Vol. 5-X (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1985)

(11) *Newsletter*, Vol. 6-XI (Tokyo: Sophia Relief Service, June, 1986)

(12) *Newsletter*, Vol. 6-XII (Tokyo: Sophia Relief Service, December 1986)



社 会 正 義 紀 要 6

1987 年 3 月 25 日 印刷
1987 年 3 月 31 日 発行

編 集 者	渡 部 清
発 行 者	アンセルモ・マタイス
発 行 所	上智大学社会正義研究所
	〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
	電 話 03-238-3023
	3695
印 刷 所	聖パウロ修学院

SOCIAL JUSTICE

No. 5 (1986)

Contents

What does "The Kingdom of God" mean to Our Modern Society	<i>Anselmo Mataix</i> 3
The Human Rights and Social Justice in the Social Doctrine of Catholic Church	<i>Keizō Yamada</i> 9
A Preliminary Survey of the Problems and Prospects of the Indo-Chinese Refugees Settling in Japan	<i>Takaaki Yasuoka</i>49
Implication of "Development Communication" in Japan	<i>Hideo Takeichi</i> ... 117
Theories and Practices of Asian Rural Development: —A Case of Sarvodaya Movement in Sri Lanka	<i>A. T. Ariyaratne</i> ... 147
The Jesuit University Today	<i>Peter-Hans Kolvenbach</i> ... 161
Speaking about God	<i>Gustavo Gutiérrez</i> ... 183
Reports on Activities of 1981-86	... 195
Institute for the Study of Social Justice, Sophia University Report 1981-86	... 227

Institute for the Study of Social Justice
Sophia University